

三重県齋宮跡調査事務所年報1983

史 跡 齋 宮 跡

発掘調査概報

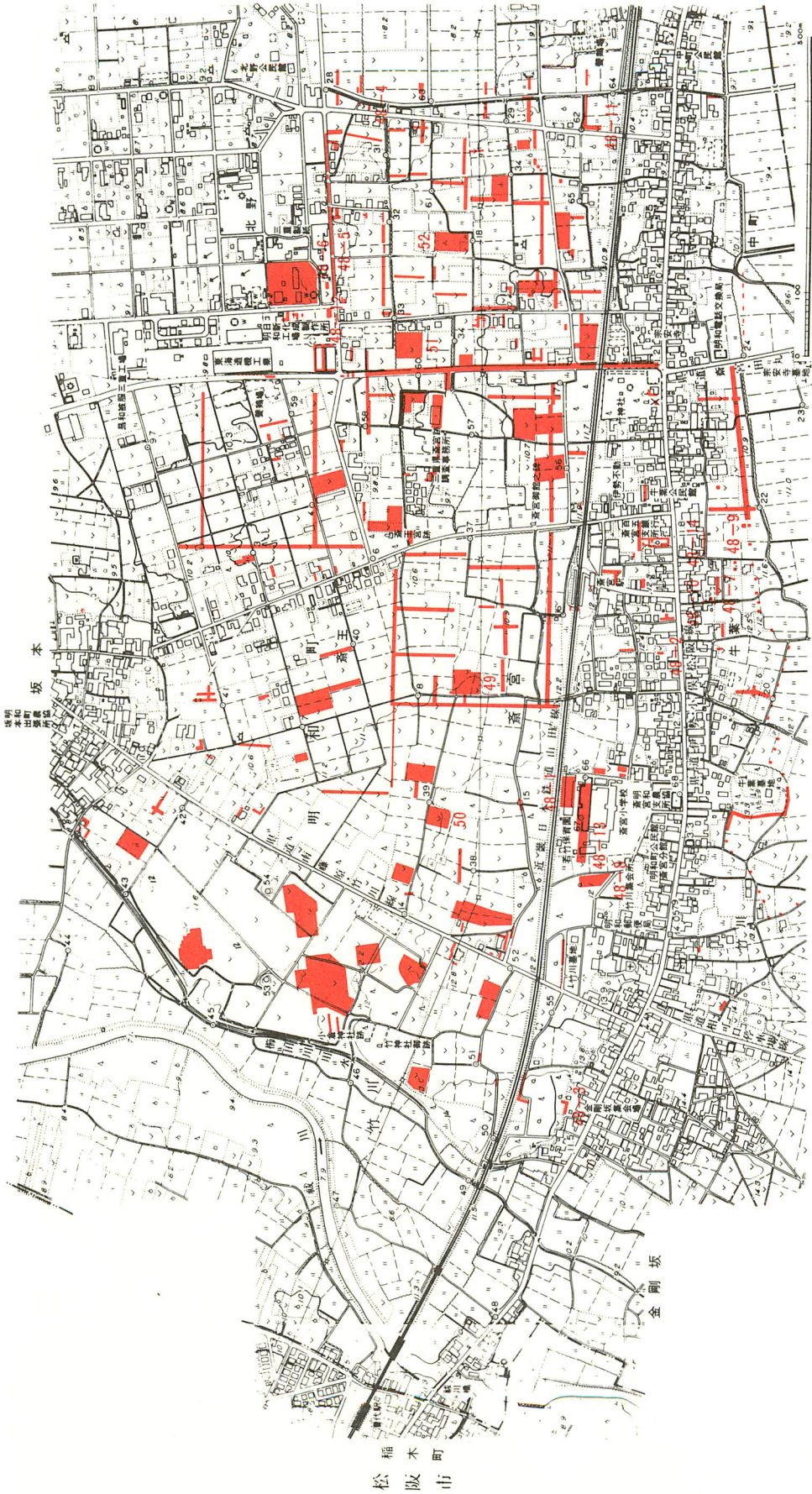
昭和59年 3 月

三重県教育委員会
三重県齋宮跡調査事務所



第50次調査全景 (北から)

昭和58年度 発掘調査地区



は じ め に

「竹は節があるが故に^{つよ}勁し」と言われますが、何事もその節目・節目を大切にすることは、それ自体に、より強い生命力を与えるものと申せましょう。

齋宮跡が昭和54年3月に国の史跡に指定され、本年度末で丁度満5年の節目を迎えることになります。

この重要な年に、昨年度から持ち越されました当史跡の将来を決定する重要な「保存管理計画の見直し」が、関係各位とりわけ地元住民・地権者の方々の史跡保存への深いご理解とご協力により、遂にその合意を得ましたことは、まことに意義深く、感謝の念で一杯であります。

その主な見直し点としては、新しい土地利用区分に編成したなかでの次の2点であります。その第1点は、第1種保存地区即ち公有化地区として、従来の地区に新たに奈良時代遺構が顕著に残る古里南部を加えること。他の1点としては、新たに第2種保存地区を設け、平安時代齋宮の重要な一画として注目をあびることとなった史跡東部（中町裏）をその対象地区として、さらに今後5カ年の発掘調査の結果を踏まえ、公有化等の線引きを明確化しようとするのであります。

ここにご報告申し上げます昭和58年度の発掘調査は、正にこの新しい土地利用区分への調査に主眼をおいて実施したものであります。

思えば、「幻の宮」とまで言われ、その存在すら知らない人が多かったこの史跡が、指定後わずか5年にして、「よみがえる齋宮」へと多くの人々の関心を集め、見学者も増加の一途をたどっておりますことは、まことに喜びにたえないところであります。

この史跡にたゆまず生命力を与えてきていただいた齋宮跡調査指導委員の諸先生をはじめ、文化庁、明和町の関係機関、さらに調査に保存にと惜しみなくご協力をいただいた地元関係各位に重ねて謝意を表するとともに、今後一層のご指導とご協力を念願して、発刊のご挨拶といたします。

昭和59年3月

三重県齋宮跡調査事務所長

佐々木 宣 明

目 次

I 調査の経過	1
II 第49次調査	4
III 第50次調査	14
IV 第51次調査	24
V 第52次調査	38
VI 第48次調査(個人住宅新築等の現状変更緊急調査)	46
VII 調査事務所要覧	55

例 言

1. 本書は、三重県斎宮跡調査事務所が、国庫補助金を受けて昭和58年度に実施した史跡斎宮跡の発掘調査の概要と事務所要覧である。
2. 第VI章は、明和町斎宮跡保存対策室が国庫補助金を受け調査主体となつて行なつた現状変更緊急調査と、原因者負担による現状変更緊急調査である。発掘調査は斎宮跡調査事務所及び明和町教育委員会が担当した。報告書については、別に明和町が出版している。
3. 遺構実測図作成にあたっては、国土調査法による第6座標系を基準としている。方位の標示は真北(N 5°40' E)を用いた。
4. 遺構標示記号は次の通りである。
SB; 建物 SK; 土壇 SD; 溝 SE; 井戸 SA; 柵 SF; 道路
5. 斎宮跡の調査全般については、元京都大学教授福山敏男氏、三重大学名誉教授服部貞蔵氏、奈良国立文化財研究所所長坪井清足氏、椋山女学園大学教授久徳高文氏、京都府立大学教授門脇楨二氏、名古屋大学教授橋崎彰一氏、皇学館大学助教授渡辺寛氏の指導を得た。
6. 本概報の執筆・編集は、三重県斎宮跡調査事務所の、佐々木宣明、山沢義貴、谷本鋭次、福村直人、倉田直純があたり、森本敦子、刀根やよい、皇学館大学生坂真弓美、豊田敏子がこれに協力した。

I 調査の経過

国史跡に指定され四年目を迎えた齋宮跡の昭和58年度の発掘調査は面的な計画調査を4ヶ所実施した。昨年度実施予定の保存管理計画の見直しが58年度にくりこしてきたため、発掘調査の開始が例年に比べ大幅に遅れ、7月になるとともに、調査箇所も未調査地区の多い中町北部のC地区を重点に実施することになった。また、例年通り明和町が主体の現状変更緊急調査も調査事務所が担当して実施した。調査面積は計画調査5565㎡、緊急調査3757㎡、合計9322㎡におよんでおり、今年度の調査面積をあわせると調査総面積は史跡の約6.3%に達した。

第49次調査はAB地区の西端部、古里地区よりつづく古道が小字広頭、小字塚山の境界に沿って走り、小字上園にとりつく個所のすぐ東側で、7月より10月にかけて1845㎡に亘り実施した。奈良時代と鎌倉時代の遺構が多く、平安時代の遺構が殆んど見られず、奈良時代齋宮の東へひろがりを知る上に貴重な資料が得られている。

8月より11月にかけて実施した第50次調査は49次調査の西方200mの個所で、大字齋宮と大字竹川の境界部分である。奈良時代の溝SD170および竪穴住居、平安時代にかけての掘立柱建物とともに平安時代末葉の掘立柱建物や溝が検出されている。平安時代末葉の掘立柱建物は4間×4間の総柱建物で、最近、県下で多く見つかって注目されているものの一種で、ややその先駆的なものとも考えられる。

第51次調査は広域圏道路のすぐ東側で、区画溝と掘立柱建物の関連を追求するため、約1,900㎡の広い面積で11月より翌年2月にかけて実施した。区画溝SD291より約10m離れて掘立柱建物が建てられており、齋宮寮造営計画の一端を窺いしることができた。また、齋宮跡最大級の掘立柱建物であるSB3220は雨落溝を有し、建物規模を復元し得た。

第52次調査は昭和54年の第24次調査で検出した正殿、後殿、脇殿と配置された建物群の北方部分の状況把握を目的に約750㎡に亘り1月より3月にかけて実施した。しかし、直接第24次調査結果に結びつく建物を明確にし得なかったが、9世紀代の井戸及びそれに先行する建物群を検出した。井戸からは、くり抜きの木製井戸枠がはじめて見つかり、小形銅製儀鏡や石製蛇尾などが出土している。

一方、現状変更に伴う緊急発掘調査は学校建設や防火水槽建設など公共事業に伴うもの6件、個人住宅建設に伴うもの8件の計14件、3757㎡を実施した。公共事業に伴うものが多く、特に学校施設関連が現状変更調査面積の二分の一近くに及んでいる。また、これらの調査の中で注

目されるものに第48－11次調査がある。調査個所は史跡の東端部分で、これまで奈良時代の遺構は無いと考えていた個所であったが、竪穴住居、掘立柱建物があり、円面硯も出土しており、東部地区も奈良時代の官衙が及んでいた可能性がでてきた。

以上の如く、昭和58年度の発掘調査は多大の成果を得ることができ、懸案であった保存管理計画の見直しについては、昭和58年3月に地権者に対して提示された見直し案が、種々の話合いの結果、12月には一応の了解を得ることができた。

一方、今年度は斎宮跡の基本整備構想を策定することになった。これは住民生活との調和のとれた史跡の環境整備を実施するため、全体計画を二ヶ年に亘って樹立するもので、地元三重大学工学部建築学科北原理雄助教授を中心とする地域環境計画研究会に委託した。

また、第50次調査の際には、斎宮跡保存啓発事業の一環として、今年度より「体験発掘」を計画し、明和中学生30名の参加があった。恒例の秋の講演会には指導委員の久徳高文先生に「斎宮の姫君たち」と題してご講演をいただいた。

調査次数	調査地区	調査面積	調査期間	地 籍・地 番	所 有 者	備 考
48-1	6ACM-M	1,050 ^{m²}	58.6.1 ~ 58.6.30	明和町斎宮字広頭 3385	明 和 町	プール新設 D地区
48-2	6ADP-Q	27	58.5.23 ~ 58.5.27	明和町斎宮字牛葉 3033-1・2	吉田 和子	個人住宅新築 D地区
48-3	6ABL-M	116	58.5.25 ~ 58.6.1	明和町竹川字中垣内 434-6	西川 大木	個人住宅新築 D地区
48-4	6AGL-B	33	58.5.30 ~ 58.6.3	明和町斎宮字東前沖 2480	倉田 公子	個人住宅新築 C地区
48-5	6AGD~ 6AFE	260	58.7.26 ~ 58.8.31	明和町斎宮字東前沖	明 和 町	町道側溝新設 C地区
48-6	6AGC-A	83	58.8.18 ~ 58.8.31	明和町斎宮字西前沖 3550-1	今西 繁野	倉庫新築 D地区
48-7	6ADT-H	120	58.9.5 ~ 58.9.17	明和町斎宮字木葉山 307	森西 保	車庫新築 D地区
48-8	6ACL- E,F,G	840	58.10.11 ~ 58.11.7	明和町竹川字東裏 334-15.16.17.336-1	早川 洋他	倉庫新築 D地区
48-9	6AEV-J	102	58.11.2 ~ 58.11.18	明和町斎宮字鈴池 341-1	明 和 町	防火水槽新設 D地区
48-10	6ADT	25	58.11.29	明和町斎宮字牛葉	〃	町道側溝新設 D地区
48-11	6AGP-E	93	58.12.15 ~ 58.12.21	明和町斎宮字鍛冶山 2351-1.2352-1	礪原 辰己	倉庫新設 C地区
48-12	6AFC-H	128	59.2.15 ~ 59.2.23	明和町斎宮字西前沖 2604-8.9	清水 仁	個人住宅新築 D地区
48-13	6ACM-O	840	59.2.20 ~ 59.3.31	明和町竹川字東裏 283-2	明 和 町	校舎増築 D地区
48-14	6AET	40	59.3.1 ~ 59.3.5	明和町斎宮字牛葉	〃	町道側溝新設 D地区
49	6ADI- D,V,W,X,U	1,815	58.7.1 ~ 58.10.7	明和町斎宮字上園 3083 他	〃	計画的面調査 A B地区
50	6ACH-H	1,100	58.8.18 ~ 58.11.19	明和町竹川字東裏 294. 297	山本 利市	計画的面調査 C地区
51	6AFF-D	1,900	58.11.18 ~ 59.2.28	明和町斎宮字西加座 2663-1 他	森下 齊	計画的面調査 C地区
52	6AGF-D,E	750	59.1.5 ~ 59.3.14	明和町斎宮字西加座 2703 他	山上 実他	計画的面調査 C地区

第1表 昭和58年度発掘調査地区一覧表

II 第 49 次 調 査

6 A D I (上園地区)

今回の調査地は、上園地区の西端部に位置し、西側で塚山地区・広頭地区との字界に接する場所である。これまでに当地区近辺では、IおよびJ・Lトレンチ(8-4・5・7次)など3本のトレンチ調査が実施されており、字界に沿って鎌倉時代から室町時代の溝が何条も走ることや、現存する塚山地区と広頭地区との字界をなす農道は、鎌倉時代以降の古道であろうと考えられてきた。また古里地区で検出された奈良時代の大溝から枝分かれし、古道の南側に沿って走る溝SD 170の一部も確認されていた。

今回はこれらの遺構を面調査によって、より明確にし、宮域中央部西寄り部分の遺構状況及び性格を知ることを目的とした。

遺構の検出される地山面までの基本的な層序は、耕土→暗褐色土→黒色土→黄褐色砂礫土(地山)となっており、地山が東に向かって低くなっているため、その分調査区の東半分は黒色土が厚く堆積していた。調査区北東部や南東部にある鎌倉時代以降の溝や土壇の一部は、この黒色土上面で検出し得た。

調査の結果、当調査区が各時代の溝地帯であるが故に掘立柱建物等の検出数は少なかったが、溝SD 170の面的な確認をはじめ、奈良時代前半の良好な一括資料が出土した土壇SK 3000の検出や、古道が上園地区には延びないことなど貴重な成果が得られた。

(I) 奈良時代の遺構

竪穴住居2、掘立柱建物1、柵列1、土壇6、溝1がある。

竪穴住居SB 2997・SB 2980は、いずれも一辺4m足らずの小規模なもので、四隅の支柱穴や周溝は認められない。カマドは東壁に付設される。埋土の切り合いよりSB 2997が新しい。おもな出土遺物は土師器杯・皿・甕・胴長甕で、須恵器は少量である。

調査区南端にある掘立柱建物SB 3010は、梁行2間、桁行3間以上の南北棟建物である。柱掘形は、形状、大きさとも不揃いで、柱間も一定していない。

柵列SA 3009は5間分を確認した。5間×2間の東西棟建物とも考えられるが、妻柱を明確に検出できなかったため、ここでは一応柵列と考えた。

土壇には調査区北部のSK 3024と調査区南部のSK 3000・SK 3001・SK 3002・SK 3004・SK 3005がある。このうち、お互いに切り合い関係にあるSK 3000・SK 3001・SK 3002は、いずれも埋土に焼土を含んでおり、それぞれの出土土器が互いに接合するものがあるので、短期間に連続して掘られたものと考えられる。特に径3.6m、深さ35cmの土壇SK 3000からは、

多量の土師器杯・皿をはじめ、甕・胴長甕・把手付鍋・鉢・高杯のほか、完形の須恵器長頸壺・甕などが出土している。

調査区の中央部を斜めに横切る東西方向の溝S D 170は、幅2 m、深さ80cmを測り、断面が逆台形状を呈する整然とした溝である。底部は小礫の多い砂礫層を掘りこむ。溝底のレベルは最も高い所と最も低い所の差が10cmしかなく、ほぼ平坦であると考ええる。溝の埋土からは土馬、土師器薬壺及びその蓋・杯・皿・甕・鍋・高杯、須恵器杯・蓋・甕等が出土しており、時期的には土埴S K 3000出土のものに似ている。従ってS D 170の埋没時期の下限を奈良時代の前半頃に求めたい。現在S D 170の東への延長は、昨年度の第47次トレンチ調査によって斎王の森に通じる道路のあたりまで確認されており、古里地区からは総延長約730 m程になる。

(II) 平安時代初頭の遺構

この時期の遺構は少なく、竪穴住居S B 3007、掘立柱建物S B 3008、土埴S K 2996のみを検出した。

竪穴住居S B 3007は一辺3.5 m×3.0 mの小規模なもので東壁やや南寄りにカマドとしての焼土の高まりが若干認められた。掘立柱建物S B 3008とは東西に並行しており、S B 3008が居住用、S B 3007が厨房とも考えられる。

(III) 平安時代中葉の遺構

土埴S K 3014と溝S D 3016のみを検出した。いずれも黒笹90号窯期の灰釉陶器に伴う土師器が少量出土している。なお掘立柱建物としてのまとまりを欠いているが、調査区北東部の小穴の何ヶ所からか、この時期の土師器片が出土している。

(IV) 平安時代後半の遺構

土埴S K 2988のみがある。完形の土師器杯1点と少量の土師器片が出土。

(V) 平安時代末葉の遺構

掘立柱建物S B 3030、溝S D 2987、S D 3028がある。

S B 3030は、3間×2間の東西棟建物で、床束柱をもつ。柱掘形径30cmと小さく、2ヶ所の柱掘形内に扁平な石が置かれていた。棟方向は溝S D 2987の方向に揃う。

溝S D 2987は、幅1.4 m～1.6 m、深さ40cm前後で、Iトレンチで検出の溝S D 168につながるものと考えられる。奈良時代の溝S D 170とはほぼ並走する。

(VI) 鎌倉時代前半の遺構

溝2、土埴3、土埴墓1がある。

調査区西端にある溝S D 221は、現在の農道に沿っており、Lトレンチで検出の溝S D 220とともに、それぞれ道路の東側溝及び西側溝に相当するものと思われる。溝S D 3017は、溝S D 2987の北側を並走し、調査区東部へ延びるものである。

土壇には、円形を呈する S K 3022・S K 3023 と、方形を呈する S K 3031・S K 3006 がある。それぞれ土師器小皿・鍋、山茶碗等が少量出土している。

土壇墓 S X 2990 は、1.7m×0.9m の方形を呈し、深さ 45cm を測る。木棺の痕跡を明確にし得なかったが、掘形の底部で、完形もしくは完形に近い土師器皿 4 枚、小皿 11 枚、山茶碗 1、鉄製刀子 1 が出土した。土壇墓は、これまでに古里地区、中垣内地区、篠林地区で見つかっているが、古里地区を除き、今回のように土壇墓群を形成せず、単独で見つかる場合が多い。

(Ⅶ) 鎌倉時代後半の遺構

この時期の遺構が最も多く、掘立柱建物 1、土壇 12、溝 1、柵 1 がある。

掘立柱建物 S B 2994 は 4 間×2 間の東西棟建物で北側に 2 間×1 間分の張出し部分がある。柱掘形内には一部を除き、扁平な河原石を底に置く。建物の東隅には 2 間×1 間分の土壇 S K 2995 が伴う。土壇内には、こぶし大の石が多量に入っており、土壇からは土師器鍋・皿・小皿・常滑壺・瀬戸卸皿が出土した。このような掘立柱建物内東隅に土壇をもつ例は、最近県内各地で見つかっている。代表的な例として松阪市草山遺跡、伊勢市中ノ垣外遺跡がある。斎宮では、今回が 3 例目である。草山遺跡では、南東隅の土壇を中世の絵図から馬小屋と推定しているが、土壇内の出土土器より台所とか納戸のような施設も考えられよう。S B 2994 の南にある柵 S A 2999 は、S B 2994 の隠し堀のようなものと考えられる。

この時期の土壇には、S K 2980・S K 2981・S K 2982・S K 2983・S K 2986・S K 2995・S K 3044・S K 3033・S K 3018・S K 3019・S K 3021・S K 3027 がある。このうち大半が調査区北部に集中しており、平面プランが方形ないし長方形を呈するものである。出土遺物には、土師器鍋・皿・羽釜、山茶碗、常滑甕などがあり、それぞれの土壇出土の土器組成においてほぼ共通している。また土壇 S K 2982、S K 2983 の埋土には、若干の焼土が混入しており、S K 2983 には炉のような石囲いが認められるところから、このような土壇は掘立柱建物に伴う厨房施設としての機能を果たしていたのではないかと考えられる。

溝 S D 3015 は S D 3017 の南側で並走し、総延長約 10m 程認められた。溝西端部より完形の土師器鍋が出土している。

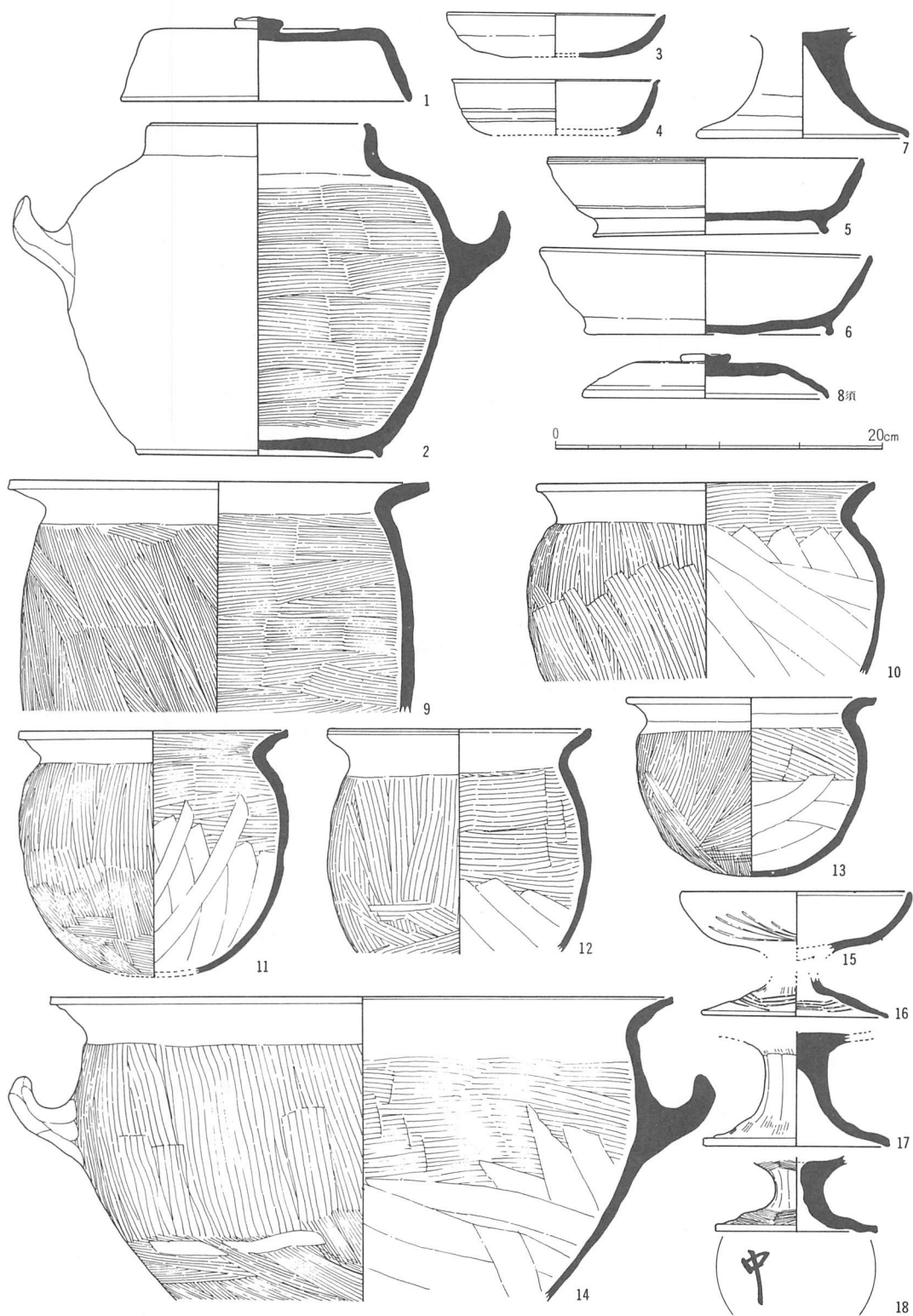
(Ⅷ) 室町時代の遺構

土壇 2、井戸 1 のほか、何条もの溝を検出した。

土壇は調査区東部の S K 3013 と S K 3020 で、鎌倉時代後半の土壇と同様、出土遺物の主体は土師器鍋・皿・羽釜等である。

井戸 S E 3003 は径 90cm 足らずの円形素掘り井戸である。

この時期の溝は多い。S D 221 の東側を南北に走る 4 本の溝 S D 2991・S D 2992・S D 2993・S D 3032 は調査区北西部で合流し、S D 203、S D 204 につながって北上するものと思われる。



第2図 第49次出土遺物 SD170; 1~8、SK3000; 9~18

S D 2985とS D 2984、S D 3025とS D 3026はそれぞれ一連のものであり、小区画を形成する溝であろう。調査区南東部にあるL字形に曲がる幅の広い溝S D 3011、S D 3012も同様な溝であろう。なお、この時期になっても東西溝S D 3025・S D 2989・S D 3012のように、奈良時代の溝S D 170の溝方向の影響が残っていることは注目に値する。

(IX) 遺物

検出された遺構が奈良時代と鎌倉時代～室町時代の2時期に集中しているため、出土遺物もこの時期のものが大半を占めている。

とりわけ土壇S K 3000からは整理箱で15箱ほどの土器の出土量があり、斎宮の土器編年上良好な一括資料が得られた。時期的には、多量の土師器に共伴する須恵器甕及び長頸壺が愛知県猿投窯編年における高蔵寺2号窯期に相当するものと思われ、奈良時代前半頃を考えている。土師器杯・皿の器面の調整は、口縁部を横なでし、底部をヘラケズリするb手法が大半で、ごくまれにc手法やe手法が認められる。

鎌倉時代の良好な一括資料には、土壇墓S X 2990出土のものがある。器種には山茶碗と土師器皿・小皿があり、山茶碗は藤澤氏作成による瀬戸窯山茶碗編年におけるⅢの6段階に相当するようであり、13世紀初頭頃と思われる。土師器皿・小皿は淡褐色を呈し、胎土は砂粒少なく良好である。こうした土師器皿・小皿の一群が、ロクロ製の土師器小皿を伴う平安時代末葉の土師器皿・小皿の一群と鎌倉時代後半～室町時代の通称ペラと呼ばれるごく薄手の白っぽい胎土の土師器皿・小皿の一群との間を埋めるものであらうと考えられる。

特殊なものでは、S D 170出土の土馬、S X 2990出土の鉄製刀子、布目平瓦3片などがある。土馬は胴部から尾部にかけての小片であるが、胴部が空洞となっており、これまでに斎宮で出土している土馬とは、作り方に違いを見せている。

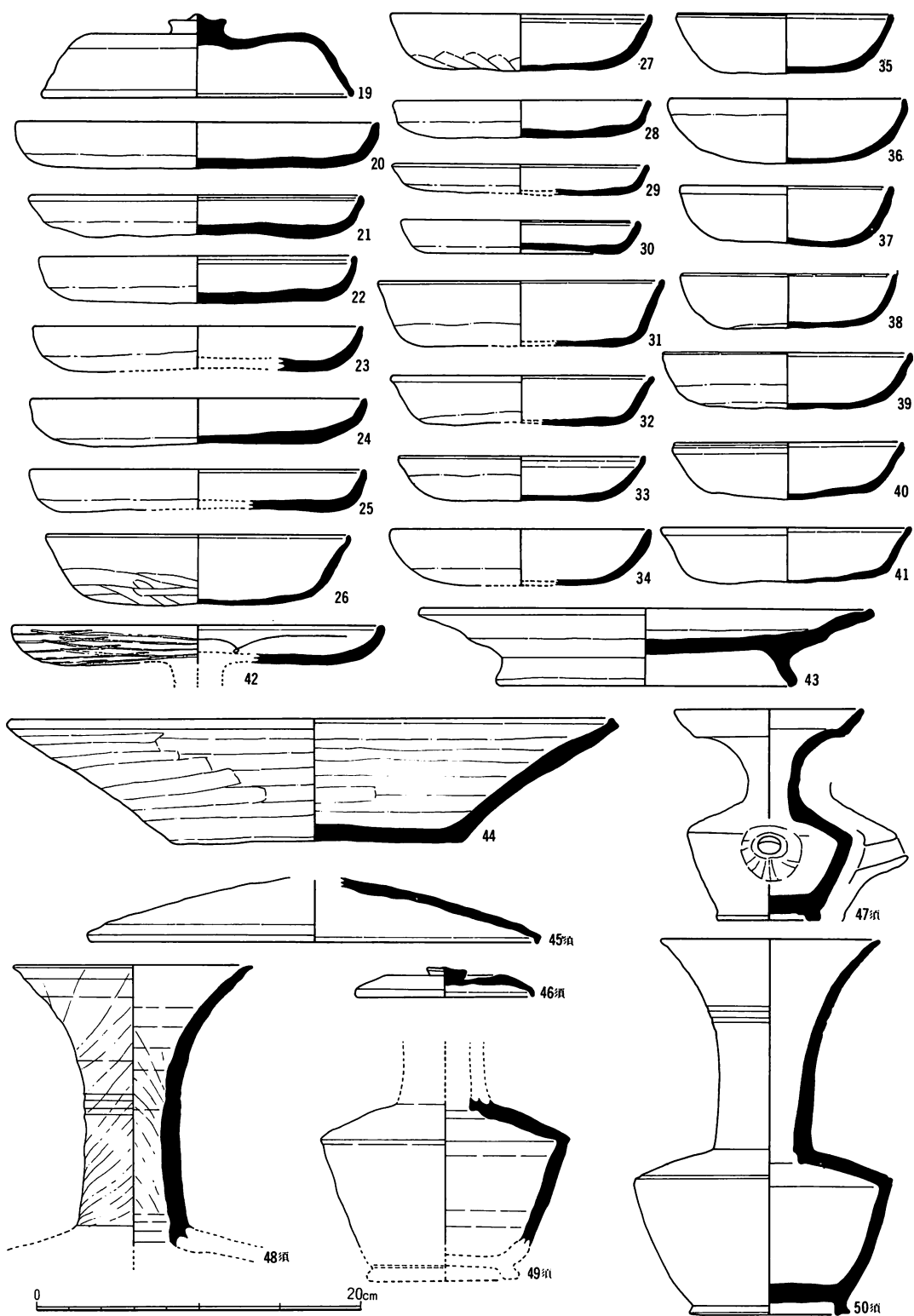
墨書土器は4点出土している。2点はS K 3000出土のもので、土師器高杯脚裾部内面に「中」と書いたものと、須恵器杯蓋外面に漢字一字を書いたものである。他の2点は山茶碗底部に記号のようなものを書いたものである。

緑釉陶器は、これに伴う時期の遺構が少ないこともあって26片出土しただけである。

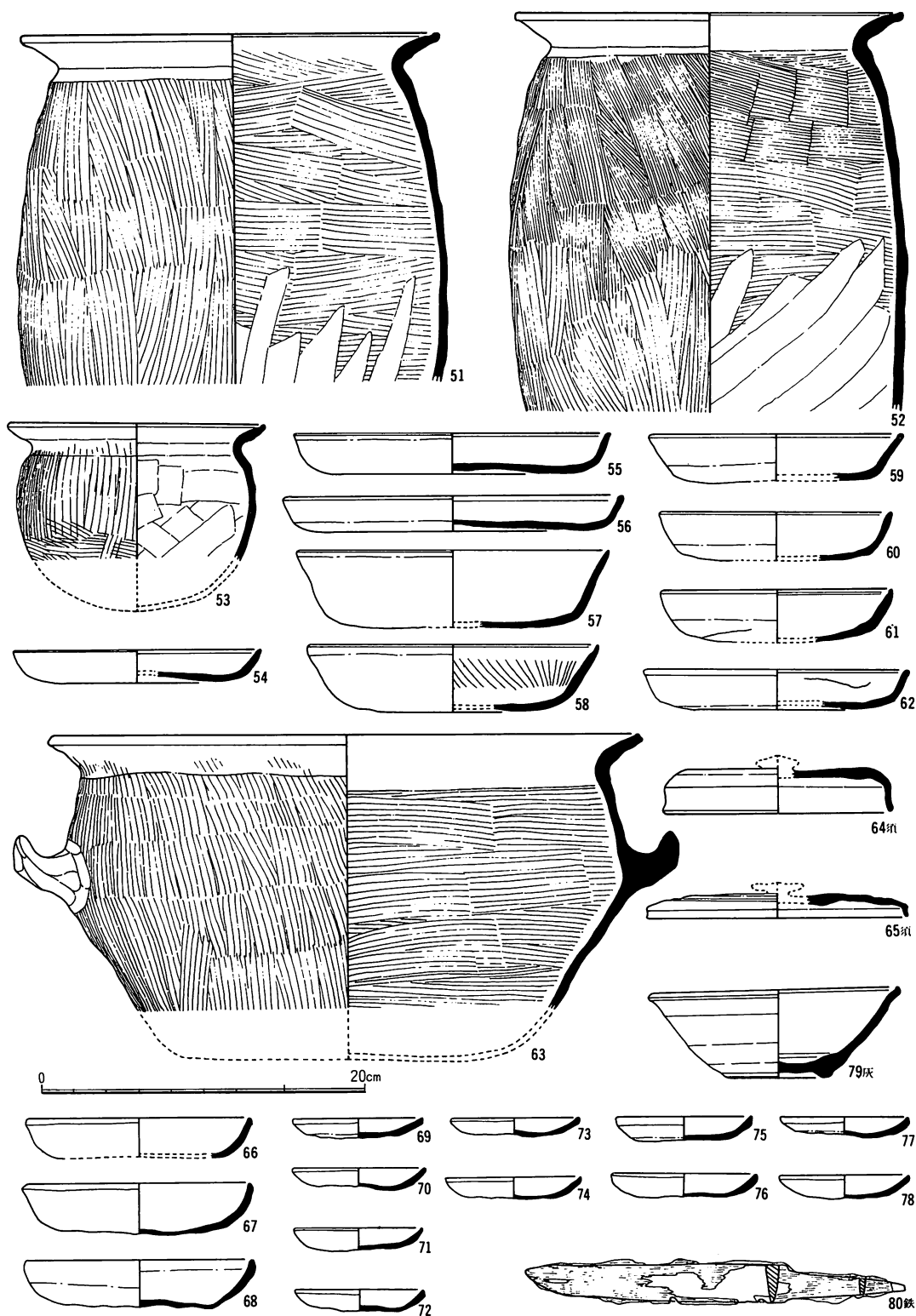
このほか遺物包含層からではあるが、15世紀前後の緑釉小皿や、古瀬戸灰釉平碗、折縁皿などが出土している。

(X) まとめ

塚山地区と広頭地区との字界をなす古道沿いの調査では、これまでに古道の北側で2回ほど面調査を実施し、奈良時代の竪穴住居や平安時代中葉～末葉に至る掘立柱建物を多数検出している。今回はこの古道の延長部に相当する場所に調査区を設定し、調査を行なった。しかし、予想に反し、平安時代の遺構はあまり検出されず、建築遺構では、奈良時代の竪穴住居2、掘



第3図 第49次出土遺物 S K 3000



第4図 第49次出土遺物 S K3602; 51~65、S K2990; 66~80

立柱建物1、平安時代末葉及び鎌倉時代後半の掘立柱建物を各1棟ずつ検出し得たのみである。これは今回の調査区を各時期の溝が集中する溝地帯に設定したことにも起因するようであるが、それにしても建物の分布が稀薄な場所である。この遺構状況だけから判断すれば、各時代を通じて当地区は外院的な色彩の強い地区と理解されよう。

一方、奈良時代の溝S D 170が導水路なのか排水路なのか、またこの溝に伴う建物が竪穴住居であるのか、官衙を形成する掘立柱建物であるのかといった課題が調査前からあった。調査の結果、当調査区においては水がいずれの方向に流れるのかは明らかにできなかったが、第47次トレンチ調査で検出しているS D 170の溝底のレベルの方が低く、相対的に水は西から東へ流れるようである。しかしながら、第50次調査で検出したS D 170のように場所によっては溝底のレベルが東より西の方が低い所もあり、S D 170の東端に何が存在するのかということと共に今後の検討課題である。また残念ながら溝と建物との明確な関係を把握するには至らなかった。

ところで、塚山、東裏、広頭地区といった古道沿いに面する地区の掘立柱建物の方向は大部分が北で東に偏る建物であり、また平安時代～室町時代に至る各時期の溝方向が、S D 170の溝方向に近いものであり、奈良時代の溝S D 170が後世の宮域西部における地割りに与えた影響は大であると言えよう。

Ⅲ 第 50 次 調 査

6 A C H－H（東裏地区）

昭和46年、古里B地区の発掘調査において、蹄脚硯の破片や、大形飾土馬を出土する奈良時代の大溝を検出した。この大溝は幅 3.5m、深さ 2 mを測る巨大な溝で、旧竹神社の北側部分より約60m程東北東に向ってのび、それより東は急に浅くなり、僅か地山上面より20cm足らずとなる。この浅くなる直前の個所は方形の土壇状となり、その個所より幅80cm、深さ40cmのV字形を呈する溝が東南に向ってのびている。S D 170と呼称するこの溝はその後、第7次の古里E地区、第8次のI・L・Pトレンチ、第12次の2 B トレンチ、さらに第47次や今年の第49次の調査においても検出しており、総延長 730m以上におよぶ長大な溝である。

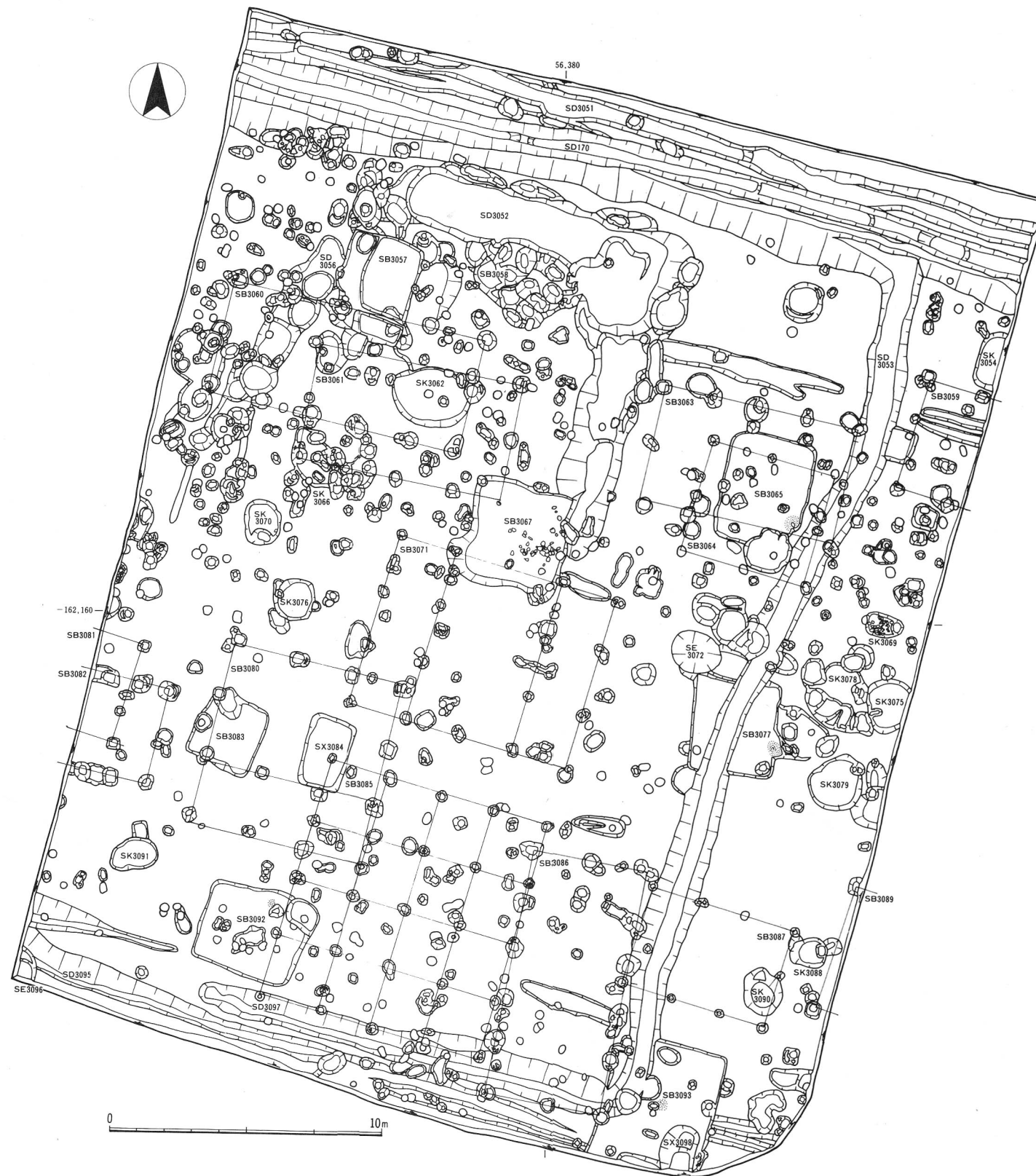
同様に古里B地区において、竹神社北部分より小字の境界に沿って走る鎌倉時代の道路と考えられる遺構を検出している。古里地区においては、小字「古里」と「中垣内」の境界部分で、両側に溝を有する幅 2 m～3 mの道路跡で、県道南藤原竹川線を越えて、「塚山」と「広頭」「東裏」の境を現在の農道に沿って東へ向ってのびている。

以上の奈良時代のS D 170や鎌倉時代の古道の周辺での計画的な調査は、これまで第28次と第32次の2回実施している。しかし、いずれもこれらの遺構の北側部分であり、南側部分では未調査であった。このため、第50次の発掘調査はこの未調査地区の様相の把握のため、県道と駅西より坂本へぬける農道のほぼ中間部分に調査区を設定して実施することになった。この個所の東側は大字竹川と大字斎宮の境界である。

（Ⅰ）奈良時代の遺構

東西に走るS D 170、竪穴住居S B 3058・S B 3065・S B 3077・S B 3083・S B 3092・S B 3093、土壇S K 3075・S K 3090などがある。S D 170は現在の農道にはば並行して走る。上部には鎌倉時代以降の溝が重複している。幅 1.8m、深さ現地表より、東端部で 1.4m、西端部で 2.4mを測るが、溝底は平坦ではなく、掘り残したように山状に高くなる個所や、段状に高くなる部分もある。標高は西端で 9.8m、東端で10.8mである。溝内からは遺物の出土はあまり多くない。西端部近くより土師器甕・高杯・杯、須恵器甕・杯・蓋などが出土している。

計6戸の竪穴住居は互いに10m近く離れて建ち、重複するものはない。いずれも一辺がやや長い長方形を呈し、地山上面からの深さ10cm～45cmである。東側の3戸は長軸をほぼ方位にのせ、東壁南寄りにカマドを備えている。S B 3092は長辺である北壁の東寄りの個所に焼土の散布が見られた。最も小さいS B 3083はカマドも柱穴も認められない。S B 3058は北東側をS D 3052に削平されており、カマドは不明であり、その上、床面は多数の土壇状の凹凸があり、柱



第5図 第50次遺構実測図 (1:200)

穴も明瞭でない。カマドをもつ住居跡はカマドの右脇に貯蔵穴をもつようである。床面の標高を見ると、壁が最もしっかりしている S B 3093 が 11.3 m、最も小さい S B 3083 が 11.6 m で、他はこの両者の中間である。遺物の出土は S B 3058、S B 3093 から土師器、須恵器が多数出土している。また、S B 3098 のカマドには土師器甕を使用していた。

土壇 S K 3075、S K 3090 は径 1.6 m 前後、深さ 40 cm の円形の土壇である。いずれも土師器杯・甕・甗などが出土している。

(II) 奈良時代より平安時代の遺構

この期にしたものは明瞭に奈良時代あるいは平安時代と識別し得ない。掘立柱建物 8、土壇がある。掘立柱建物は時期別に三群に区分できる。A 群 (S B 3060・S B 3063・S B 3080・S B 3082) の 4 棟は全て東西棟で、建物の方向はほぼ一致する。特に S B 3060 と S B 3063 は梁行が同じで、南北側柱を揃える。また、S B 3060 と S B 3080 と東側柱を揃えている。柱間は 1.8 m より 2.1 m であるが、S B 3082 の桁行のみは 1.2 m と狭い。続く時期のものに B 群 (S B 3061・S B 3086) がある。前者に比べ方位に対する偏りはやや小さい。東西棟と南北棟の建物である。ともに梁行は 4.2 m で、前述の東西棟 S B 3060、S B 3063 の梁行と同じである。2 つの建物の東、西の側柱は 3.8 m 離れる。次いで C 群 (S B 3059・S B 3081・S B 3089) の三棟がある。いずれも東西棟であるが、調査区の周辺部分で全体の窺えるものはない。建物の方向は北に対し最も大きく東へふれる。これらの 3 群の建物群は順次時期が新しくなるものと思われる。この期の土壇は A 群と同じものに S K 3066 がある。不正形な土壇やピットが重複した形である。須恵器円面硯、土師器杯・鉢など比較的多数の土器が出土している。この A 群以外の土壇には S K 3054・S K 3078・S K 3079・S K 3091 がある。径 1.2 m ～ 2.3 m、深さ 30 cm 程度の楕円形を呈するものが多い。この他 C 群に伴う S K 3062 がある。平安時代初頭頃の土師器杯・甕、黒色土器などが出土している。

(III) 平安時代後半の遺構

二基の土壇墓と思われる遺構がある。S X 3084 は S B 3080 に重複した状況で、径 2.6 m × 1.7 m の長方形を呈する。長軸方向は N 15° E、深さ 48 cm で黄茶褐色土が埋まり、底近くより 200 余片の土器片が出土している。土師器杯、灰釉陶器碗とともに棺に使用した鉄釘もある。

S X 3084 より南東へ 20 m 程離れた個所で、S B 3093 に重複して S X 3098 がある。南側は調査区外にのびる。S X 3084 に比べやや楕円形に近いが長軸の方向はほぼ同じである。上層に拳大の礫が多数集石されていた。土壇底は北側が 10 cm 程一段高くなっている。土師器杯、甕、須恵器甕、灰釉陶器の破片が出土している。この期の遺構は他に無い。

(IV) 平安時代末葉の遺構

掘立柱建物 4、土壇、溝がある。掘立柱建物は全て建物方向は同じで N 16° E を示す。

中でも S B 3071 と S B 3085 は南北に通る柱通りは全て揃えている。S B 3071 は東と西に廂をもつ南北棟の建物で、S B 3085 は総柱の建物である。柱間は S B 3071 は梁行 2.0m、桁行 2.15m 廂は桁行柱間と同じである。S B 3085 は桁行の両端は 2.3m、中が 2.15m である。またこの二つの建物は 2.1m 離れている。S B 3064 は S B 3071 の北東側にある 3 間×2 間の建物で、柱間とともに 1.8m、S B 3087 は S B 3085 の東側で 3 間×2 間の東西棟の建物である。両側柱と S B 3085 の東側柱とは 4.3m 離れる。これらのこの期の掘立柱建物の柱掘形は径 40cm～50cm 足らずの円形であり、奈良時代より平安時代にかけてのものが径 60cm～80cm の大形であるのに比べて小さい。

土壇には S K 3070・S K 3076・S K 3088 がある。いずれも径 1.3m×1.6m の楕円形を呈する土壇である。比較的多数の土師器杯・甕、山茶碗片が出土しており、S K 3070 からは瓦器、緑釉陶器片が、S K 3076 からは土製支脚が、S K 3088 からは灰釉陶器片や土錘が伴出している。

溝 S D 3052、S D 3056 は S B 3091 の北側に台形状にめぐる溝である。幅 1.4m～2.4m で、西側に比べ東側が幅広である。深さは東側では 50cm で溝底は比較的平坦であるが、S D 3052 の西側部分や S D 3056 は多数の土壇が重複した状況である。多数の土師器杯・鍋、山茶碗、山皿や土製支脚が出土しており、緑釉陶器片も見られる。

(V) 鎌倉時代の遺構

竪穴住居、溝、土壇がある。竪穴住居 S B 3057、S B 3067 はともに方形を呈する。S B 3057 は 3.6m×2.7m で南北に長い方形で、その後、一廻り小さく縮小されたようである。深さは最初は 25cm と浅く、後は 50cm と深い、柱穴は明瞭でない。一方、S B 3067 は正方形に近い形で一辺 3.8m、深さ 40cm、東北隅は S D 3052 を切り込んでいる。床面には拳大より人頭大の礫が多数散乱していた。この 2 戸の竪穴住居からは山茶碗、土師器杯・甕、白磁片、青磁片など多数の土器片が出土している。

溝は発掘区の南北両端に東西に走る S D 3051・S D 3095・S D 3097 があり、それにとりつくように南北に走る S D 3053 がある。S D 3051 は S D 170 に並行しており、古道の南側溝と考えられるものである。南側の S D 3095、S D 3097 は並行して走る浅い溝で、S D 3097 は南北に走る S D 3053 につづくものである。S D 3053 は幅 1.4m、深さ 30cm の逆台形を呈し、南へいくほど浅くなる。これらの溝からは、ともに山茶碗や常滑製の甕や土師器鍋などが出土している。S K 3069 は径 1.4m×0.9m の楕円形を呈し、山茶碗、土師器鍋、青磁片とともに、小さな礫が多数埋っていた。

また、調査区の南西隅の S E 3096 と S B 3077 の北部分の S E 3072 は径 1.5m 程の素掘りの井戸で、鎌倉時代以降の陶器などが出土している。

(VI) 遺物

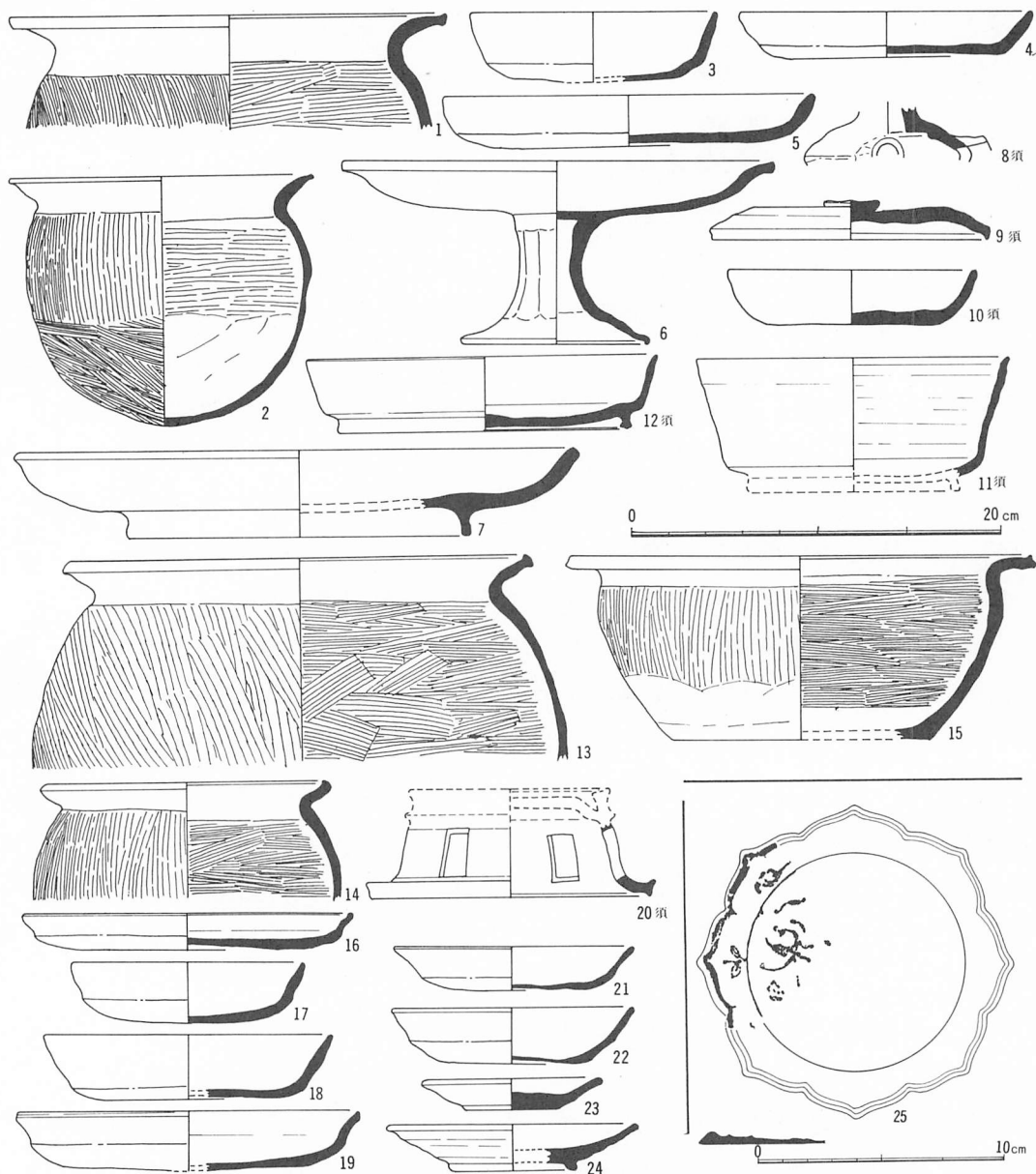
整理箱約100箱の遺物が出土している。奈良時代より鎌倉時代にいたる遺物が出土しており、その多くは平安時代末葉の土器である。S D 170からは土師器甕・杯・高杯、須恵器杯・蓋・甕などが出土している。土師器甕は長胴の長甕と胴部が球形となる小形の甕の二者がある。杯はやや深い椀に近いものと、器高2cm足らずの皿状のものがあり、いずれも口縁部がヨコナデ、底部が指による押えのe手法である。7の台付杯は口径31cmの大形品で、6の高杯とともに全面摩耗してしまっている。須恵器甕は胴上半部の小破片である。注口部が僅かに上方に向く。口縁部は二段構成である。杯蓋はへラケズリされた平坦な天井部に径3cmの扁平なつまみがつく。杯は高台のつかない底部がへラ切りのままのもので、内面に大きな「X」印がへラで描かれている。高台のつく杯は器高4cmの浅いもの、6cm近くの深いものの二者がある。これらのS D 170出土の土器群は8世紀前後に比定し得るものであろう。6戸の竪穴住居から出土している土器群も同時期のものと考えられる。

つづいて、S K 3066出土の土器である。S D 170の土器と比べると、土師器甕は同様に大小二者があるが、やや薄手であり、口唇部立ちあがりが大きくなり、胴部の刷毛目も粗いようである。土師器鉢も成形、調整法および口唇部の形状は甕と同様である。土師器杯も椀に近いもの、皿に近いものの二者があるが、口縁部のヨコナデ部分のくびれがS D 170出土の杯に比べ大きい。今回の調査で唯一須恵器円面硯が出土している。脚部のみの破片で、陸部、海部は不明である。器厚6mmの薄手で、脚端部が大きく外方に張り出す。径1.2cm×2.8cmの方形の透しが8ヶ所あけられている。奈良時代末もしくは平安時代初頭の所産と考えられる。

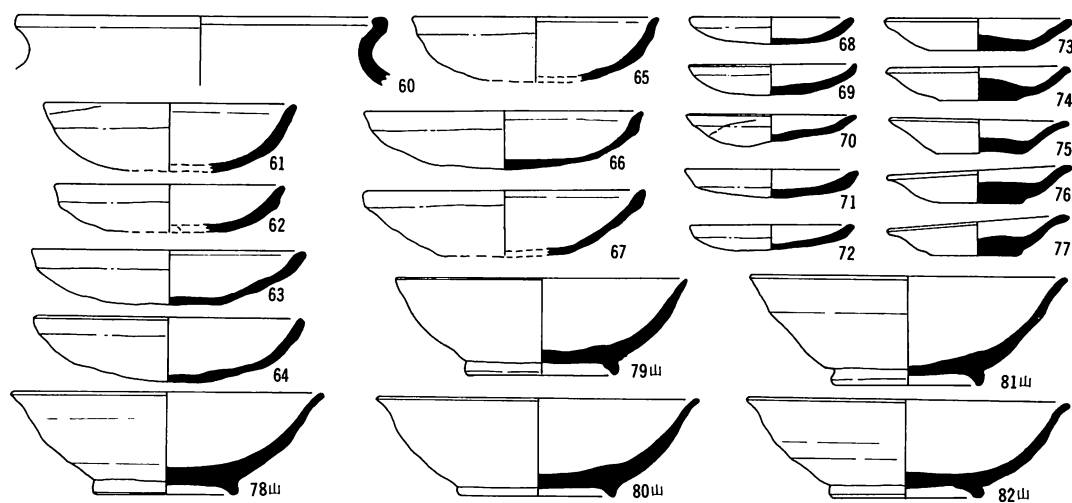
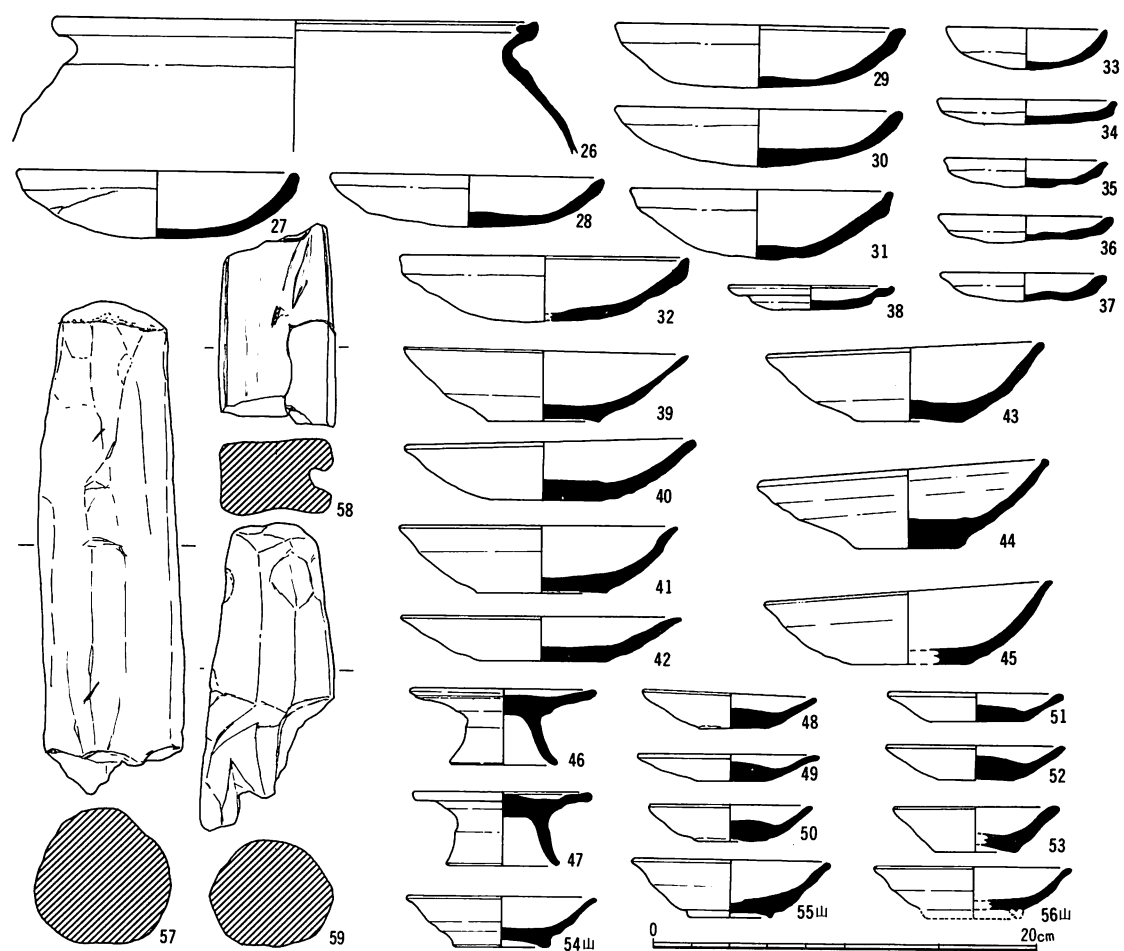
平安時代後半のS X 3084からは土師器杯・小皿・甕、灰釉陶器皿、土錘、鉄釘、鏡片が出土している。土師器杯は口径13cm、器高3cm、比較的薄手で口縁部がゆるく外反する。口縁部はヨコナデ、底部は指による押えで、表面は凹凸がある。皿はロクロ製品で、杯より一廻り小さく、口径10cm、底部には糸切痕を明瞭にのこす。灰釉陶器皿は器高2.4cmの厚手の皿で、内面に全面黄白色の灰釉が施される。鉄釘は一部欠損しており、部分的に木質部の付着が見られ、木棺に使用していたものであろう。鏡は瑞花双鳥八稜鏡の小破片である。推定径13cm、径9cmの界圈が巡り、瑞花、飛鳥をあしらっている。折戸53号窯期の新しい時期のものかと考えている。

今回の調査において平安時代末葉の土器群が比較的纏って出土している。S D 3052、S D 3056は一連の溝と考えられるもので、土器の組み合わせを見ると土師器鍋・杯・小皿・台付皿、山茶椀、山皿、土製支脚などがある。この中で最も特徴的なことはロクロ製の土師器の存在である。ロクロ製の土師器には杯・小皿・台付小皿の三種がある。杯および小皿はロクロ製でない杯、小皿と法量がほぼ一致する。杯は口径15cm、器高2cm～4cm、小皿は口径9cm、器高1.5

cm程度のもので、小皿には山皿と同形態のものもある。台付皿は口径9cm、器高4cm足らずで、皿部分は先述の小皿より浅く、深さは僅か数mm足らずである。これに対し、台部分は比較的高い。これらロクロ製の土師器は淡い茶褐色を呈するものが多く、胎土には細砂を含んでいる。一方、ロクロ製でない杯、皿は全て口縁部のみをヨコナデするもので、ヨコナデの下端部分が凸出するように肥厚する。粘土紐巻上げの痕跡をのこすものもある。白っぽい褐色もしくは茶褐色を呈し、胎土には細砂を含む。その量はロクロ製品より多いようである。この他に土師器



第6図 第50次出土遺物 SD170; 1~11、SK3066; 3~20、SK3084; 21~25



第7図 第50次出土遺物 S D3052; 26~59

小皿で、口縁端部が小さく立ち上がるものがある。これは、これまでのものと法量は似るが、形状はやや異なり、当地域ではあまり見られないものである。土師器鍋は口唇部が内側につき、み出されたようになるもので、胴部はほぼ球形で、刷毛目は全く見られない。山茶碗は全て口径16cm～17cm、器高6cm足らずである。口縁部がゆるく外反し、やや膨らみ気味の底部につづく。低い貼付高台がつけられ、高台内側には糸切痕をのこす。山皿は山茶碗を小形化した形状で、口径10cm、器高2.6cmで、成形、調整法は山茶碗と同様である。土製支脚は二つの溝から総数14点が出土している。いずれも破片で、全形の窺えるものはない。全体に長さ30cm～40cmと推定され、断面は径7cm近くの円形もしくは4cm×7cmの方形を呈し、端部はやや細くなり丸味をおびる。全体に白っぽい黄灰色を呈し、端部は肌色をおびている。胎土は緻密で、やや軟質である。スサ状のものが混入する痕跡が見られる。

これら、平安時代末葉とした土器群は山茶碗の編年からみると、12世紀中葉頃に比定し得る。

(Ⅶ) まとめ

奈良時代の溝SD 170は第3次古里B地区、第7次古里E地区、第8次のI、L、Pトレンチ、第12次の2Bトレンチ、第47次の宮ノ前地区、それに今年度の第49次調査と計8ヶ所において確認している。総延長730m以上におよぶこのSD 170は古里B地区の旧竹神社北脇の個所より東へのびる大溝から派生するもので、当初は東への導水路かと考えていた。しかし、今回の調査の結果では溝底が東端の方が高く、途中で山状に高くなる個所があり、単純に東への導水路とは言い難いことが判明した。そのうえ、古里E地区においても所々に土壇状の落ち込みが認められることや、古里B地区の大溝の底は、SD 170が始まる個所の溝底より約1m深いことも気になる。しかし、他の調査個所の溝底レベルをみると相対的に東の方が低くなっている。SD 170からの遺物の出土状況を見ると、溝底よりも中層、上層からの出土が比較的多く、その時期は第49次SK 3000や今回の竪穴住居の遺物とあまり隔たりがなく、奈良時代前半頃のもので、奈良時代より平安時代にかけての掘立柱建物の時期には相当埋没していたと考えられる。しかし、SD 170の方向は後の時代の遺構も規制したものか、掘立柱建物や更に時代の下る鎌倉時代の溝の方向に一致している。

つづいて、掘立柱建物であるが、奈良時代より平安時代のものが数棟づつグループで認められる。調査区の西北100mの個所での第38次調査においても同様に平安時代前半の掘立柱建物が検出されており、宮域の西部、古里地区に近い当地区においては平安時代初頭頃まで掘立柱建物が存在するようである。

掘立柱建物は平安時代末葉に再びこの地区で見られるようになる。SB 3071は3間×2間の南北棟で東西に廂をもつものと思われるが、すぐ南に接するSB 3085はSB 3071と柱通りを描える総柱の建物であり、身舎の規模がどれだけであるのか、あるいは柱穴は全て床束であるの

か識別は困難である。このような総柱的建物は最近県下各地で見つかっている。斎宮跡でも第37－4次では2間×2間の身舎に三面廂がつくと考えられる建物が見つかっており、伊勢市中ノ垣外遺跡や松阪市草山遺跡には4間×4間の建物がある。これらの多くは南東隅に土壇を伴うものであり、今回の建物より新しいものである。更に第49次のS B 3030のように柱穴内に根石をもつ建物へと変わっていくようである。これらの総柱的建物の上部構造がどのようなものであったか今後の課題である。

この掘立柱建物と同時期としたS D 3052、S D 3056からは計13点の土製支脚が出土している。完形品は無いが、長さ30cm程度で、径4 cm×7 cmの方柱もしくは円柱状で先端部がやや丸味をおび細くなっており、一部煤の付着しているものもある。胎土は、やや緻密でスサ状を含む。斎宮跡ではじめての検出である。土製支脚は玉城町小ばし遺跡や明和町堀田遺跡からも出土しているが、当遺跡のものと異なり、先端が二股にわかれ、一方に曲がっており、同一の土製支脚としてよいかどうか疑問がある。しかし、時期的には平安時代末頃の同時期のものである。堀田遺跡では出土例の稀少性から特別な場合に使用されたものと述べられている。斎宮跡においても該期の遺構、遺物を多量に検出しているが、今回はじめての出土であり、出土したS D 3052、S D 3056もまた特殊な性格をもつ溝と考えなくてはならないものかもしれない。

Ⅳ 第 51 次 調 査

6 A F F－D（西加座東地区）

今回の調査区は、斎宮跡調査事務所の東側に当たり、字西加座地区に位置する。調査区のすぐ北側には、現在家庭用排水路があり、これが、西前沖地区と西加座地区との字界になっている。これまでのトレンチ調査によればこの字界に沿って、平安時代前半～鎌倉時代の溝が何条も走ることが確認されている。中でも S D 291 と呼んでいる溝は、官衙を区画する主要な溝の一つではないかと考えられてきた。今回の調査の主目的はこの溝を面的に明らかにし、あらためて、溝の時期、性格、掘立柱建物との関係等を考え直そうというものである。

遺構の検出される地山面までは、調査区中央部で地表より約15cm、北部と南部で約30cmと全体的に浅い。調査区中央部の地形は以前から高く、後世に削平したとのことである。

調査の結果、区画溝 S D 291 をはじめ、奈良時代の竪穴住居 1、奈良時代末葉から平安時代末葉に至る各時期の掘立柱建物63、奈良時代末葉～平安時代初頭の井戸 1、平安時代後半の井戸 1 のほか、各時期の土壇64などを検出した。

（Ⅰ）奈良時代の遺構

竪穴住居 1、土壇11がある。

調査区北西部にある竪穴住居 S B 3113は一辺 4.2mの方形プランを呈する小規模なもので、東壁中央にカマドを付設する。なお同時代の竪穴住居としては珍しく四隅に主柱穴が確認された。奈良時代末葉以降の掘立柱建物は、この S B 3113の埋土を掘り込んで建てられる。

土壇は調査区の中央部から東半分が多く検出された。西から順に S K 3123・S K 3170・S K 3169・S K 3136・S K 3167・S K 3165・S K 3247・S K 3210・S K 3211・S K 3212・S K 3181・S K 3182がある。なお、時期的には奈良時代後半のものが多く、一部奈良時代末葉に含められそうなものもある。

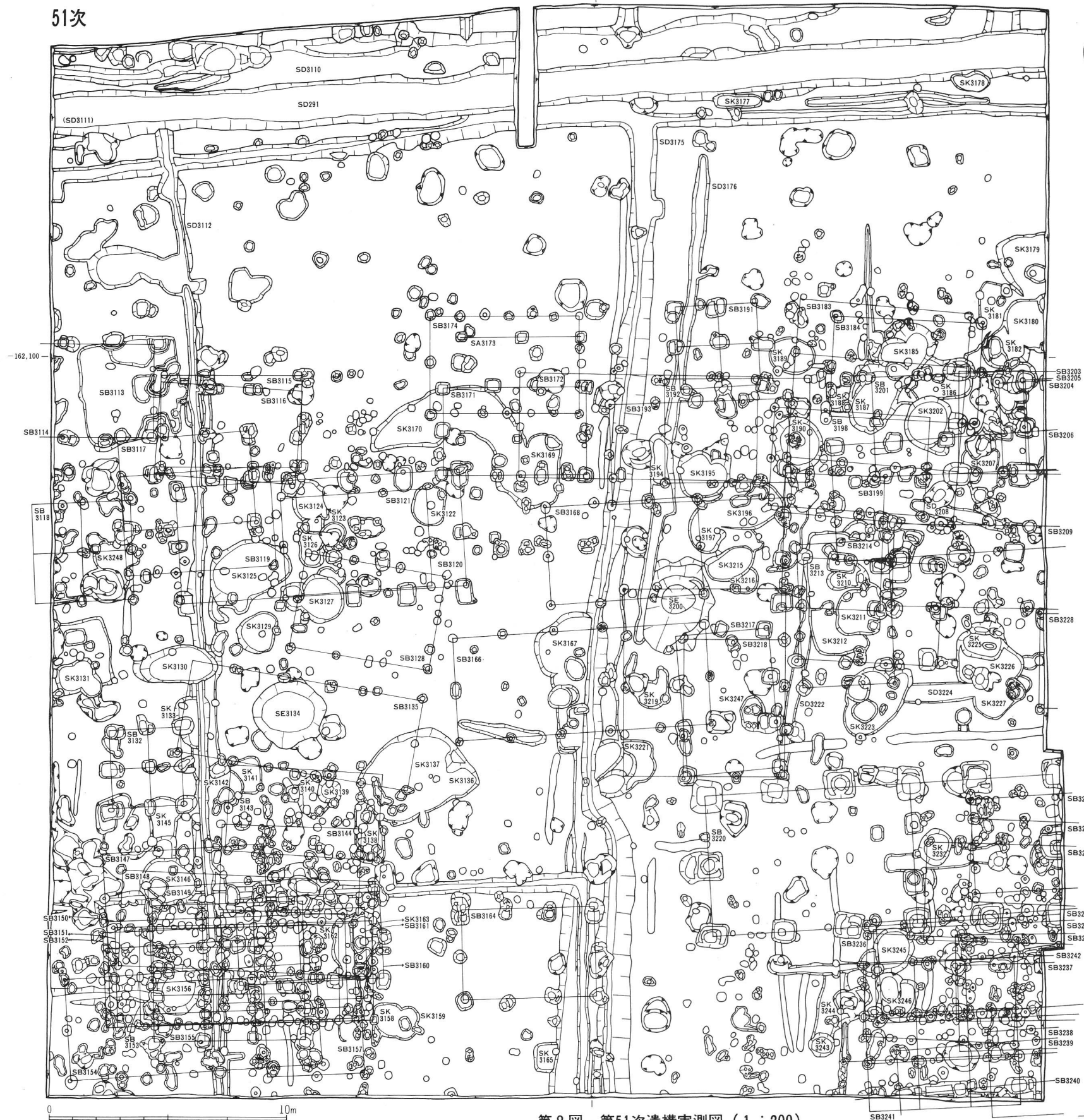
（Ⅱ）奈良時代末葉～平安時代初頭の遺構

愛知県猿投窯の須恵器編年による折戸10号窯期から井ヶ谷78号窯期にかけての時期に相当する遺構をこの時期のものとした。しかし各遺構から出土する須恵器の量はごく少量でこの時期における土師器編年の細分がまだ確定していないため、一応ここでは、奈良時代末葉から平安時代初頭という時期設定を行ない、遺構を抽出した。

特に掘立柱建物では、各建物間の前後関係や建物の方向も重視し、時期を決めた。

検出した遺構には、掘立柱建物18、堀 1、土壇11、井戸 1、溝 1 がある。

掘立柱建物は、調査区中央部の井戸 S E 3200を中心として調査区の各所にある。掘立柱建物



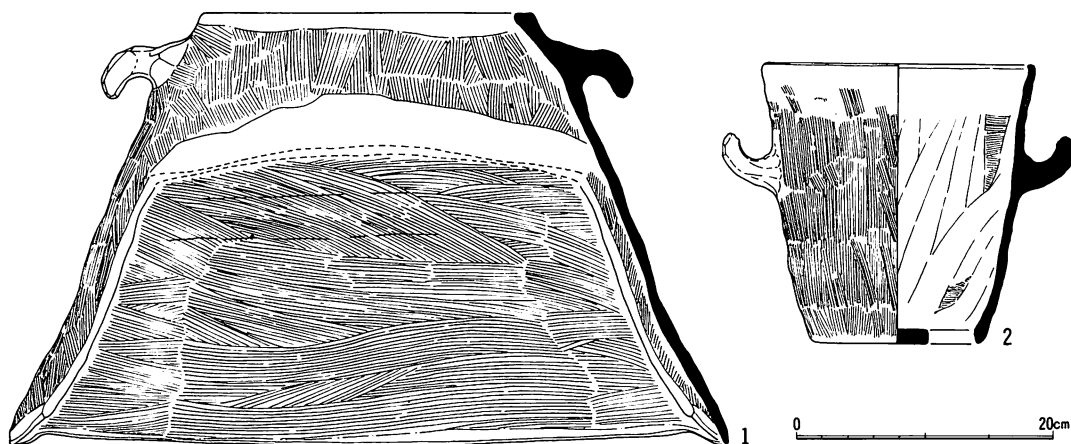
第8図 第51次遺構実測図(1:200)

の方向は北で東に偏るもの3棟、ほぼ北を示すもの4棟、北で西に2°偏るもの2棟、3°偏るもの4棟、4°偏るもの5棟がある。このうち、柱掘形の切り合い関係から比較的時期の先行する建物群は、建物の方向が北を示すものに多く、調査区北部ではほぼ横一線に並らぶS B3116・S B3171・S B3203、調査区南部の3間×3間の総柱建物S B3115、その東側のS B3164がある。S B3203は調査区の東側に延びる建物であるが、柱掘形が一辺1m、深さ60cmを測る大型の建物である。S B3171の北側にあるS A3173は、S B3171に伴う隠し堀と考えられる。

以上の掘立柱建物群の次に、建物の方向が北に対し4°前後偏る建物群が造営されるものと考えられる。この建物群の構成を見てみると5間×2間の大型東西棟建物と、3間×2間の東西棟建物、そして2間×2間の倉庫と思われる建物群からなっている。これらの中で調査区南東部にある5間×2間の東西棟建物S B3220は、柱掘形が一辺1.2m～1.3m、柱間は2.95m（10尺）を測る非常に大形の建物で一官衙における中心的な建物と思われる。西から3間目には間仕切りがあり、周囲には幅30cm前後、深さ10cm程の雨落溝が巡ることが北、南、西側の一部で確認された。これにより北と南の軒の出が約1.7mに復元できる。以上のようにS B3220は、建物の規模、構造において斎宮では初例の建物である。

全体的にみてもこの時期の建物が最も規模が大きく、整然とした建物配置をとっている。たとえばS B3220の西側妻柱通りは、この北にあるS B3191の西側妻柱通りに揃えており、同じくS B3220の東西方向の中軸線が、ほぼS B3160の北側柱通りと揃う。又調査区中央部の西と東にあるS B3120、S B3206は、全く同規模の建物で棟方向を揃え、5間×2間の建物が東西に2棟並らぶ配置をとっている。

掘立柱建物のうち、切り合い関係が判明しているものでは、調査区北西部のS B3115→S B3117→S B3114、S B3118→S B3117、北東部のS B3191→S B3193の順を確認している。このことから奈良時代末葉から平安時代初頭において少なくとも3期以上の変遷が考えられる。



第9図 第51次出土遺物 S B3113

土壇は調査区西半分に集中している。方形を呈する S K 3131、溝状となる S K 3194、不整円形を呈する S K 3132・S K 3125・S K 3129・S K 3130・S K 3137・S K 3162・S K 3163・S K 3221がある。ほとんどが深さ20cm前後の浅いものであるが、S K 3130は深さ60cmでやや深い。出土遺物は、土師器杯・皿・碗が大半を占めている。掘立柱建物との前後関係では、S B 3120がS K 3125より古く、S B 3160がS K 3163より古いことが確認されている。

井戸 S E 3200は調査区のほぼ中央にある。井戸上部は径2.8m×3.8mですり鉢状に掘られているが上面より1.2mからは、径1.2mで真すぐ下方に掘られる円形表掘り井戸である。遺構面から約4.8mで底に達したが、木杵や木製品は残りが悪く発見できなかった。出土遺物は、上層から下層に至るまで万遍なく見つかり、整理箱で約13箱ほどの出土量があった。

調査区北辺部を東西に走る溝 S D 291は幅約2.0m、深さ80cm前後で、断面が逆台形状を呈する。溝の深さはほぼ一定で、溝の中軸線が東で4°程北に偏り、真すぐ延びる。溝埋土の出土遺物は、ほとんどが平安時代中葉のものであるが、この時期の土器もわずかに含まれており、又掘立柱建物の方向も考慮して、この時期から存在していたものと考えた。溝 S D 291に沿って掘られた S K 3177は、南側の橋脚となる可能性もある。ただし北側の橋脚は溝の北側肩が鎌倉時代の溝により切られているため不明である。

(Ⅲ) 平安時代前半の遺構

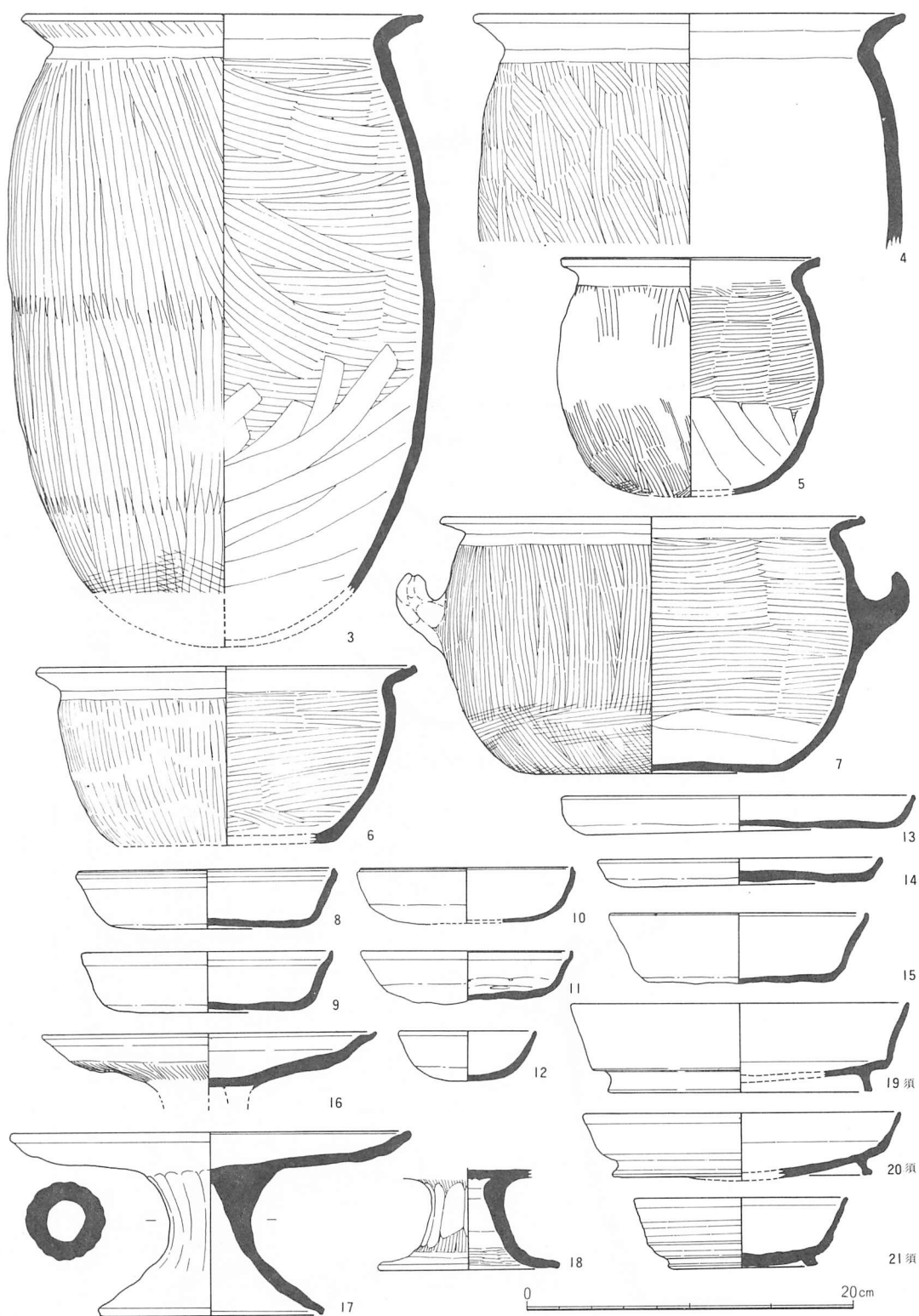
愛知県猿投窯の灰釉陶器編年による黒笹14号窯期に相当する時期の遺構をこの時期のものとした。

検出した遺構には、掘立柱建物9、土壇11、溝1がある。

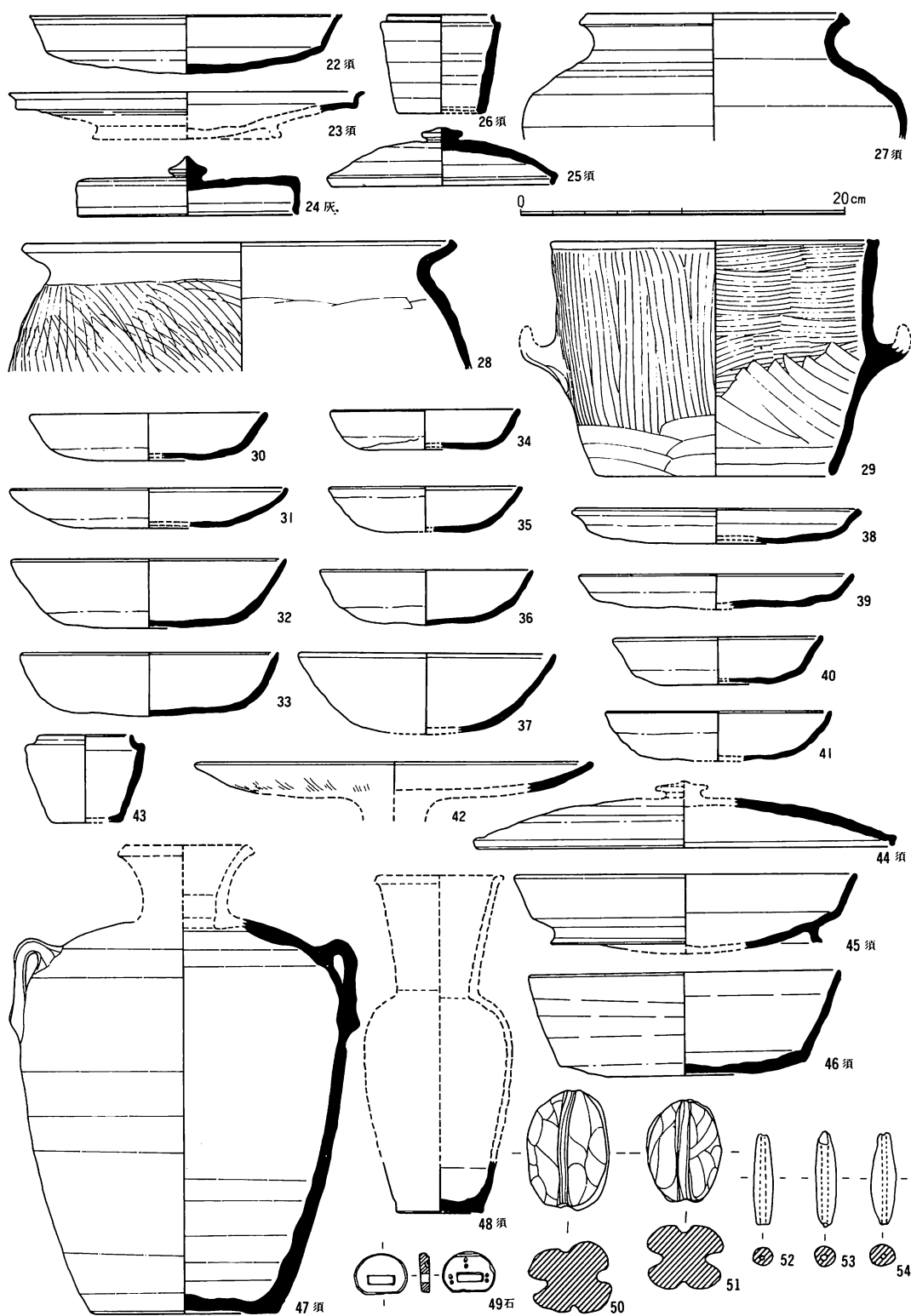
掘立柱建物は、その大半が奈良時代末葉～平安時代初頭の建物が建っていた場所とほぼ同様な位置に建つ。調査区北西部の S B 3119・S B 3121、南西部の S B 3154、北東部の S B 3201・S B 3204がこれに相当する。しかし新たに調査区中央部に、この時期には、完全に埋まっていた井戸 S E 3200の埋土を切って5間×2間の東西棟建物 S B 3166が建つ。また南北棟建物が出現するのもこの時期からで、調査区東部にある3間×2間の掘立柱建物 S B 3214・S B 3217がこれである。調査区南東部にある S B 3240は北側柱列しか検出されておらず全体の規模は不明である。柱間が2.4mあるところから、時期が遡る可能性もある。

掘立柱建物の方向は、そのほとんどが北に対し西へ4°前後偏る建物であり、建物の方向に統一性がみとめられる。柱掘形は径40cm～60cmの円形を呈するものが主流で、たいていの柱掘形内に柱痕跡が認められる。この時期における官衙の構成は5間×2間、3間×2間の建物から成り、倉庫風の建物は見られない。そして掘立柱建物の重複状況から少なくとも2時期の変遷が考えられる。

土壇には、調査区西部の S K 3124・S K 3140・S K 3141・S K 3158、東部の S K 3179・S K



第10図 第51次出土遺物 S E 3200



第11図 第51次出土遺物 S E 3200; 22~27、S K 3130; 28~54

3180・S K 3188・S K 3195～S K 3197・S K 3223がある。これらは上記の掘立柱建物の近辺にあり、径1.2m～2.6mの不整形円形土壇で、深さはだいたい10cm～20cmと浅い。各土壇からは、土師器杯・皿・碗・甕のほか、少量の黒色土器碗、黒笹14号窯期の灰釉陶器碗・皿、須恵器杯・皿、製塩土器などが出土している。

溝は、調査区北部のS D 291がある。S D 291からは、この時期の遺物がほとんど出土していないが、溝の方向と掘立柱建物の方向との関係から前の時期に引き続き存続しているものと考えた。

(Ⅳ) 平安時代中葉の遺構

愛知県猿投窯における灰釉陶器の編年による黒笹90号窯期に相当する遺構をこの時期のものとした。

検出した遺構には掘立柱建物7、土壇13、溝1がある。

掘立柱建物はその配置状況から大半が、平安時代前半の建物が占地していた場所を避けて建てられており、これには、調査区北部のS B 3174・S B 3172、西部のS B 3128・S B 3135、南東部のS B 3237がある。このうちS B 3174は桁行6間の建物としたが、3間の間にさらに束柱をもつ、齋宮では前例のない構造をとる建物と見ることもできる。柱掘形の深さは、床束と思われる方が5cmほど浅い。なお調査区東部の南北棟建物S B 3199・S B 3218は、位置的に、平安時代前半の南北棟建物S B 3214・S B 3217と重複しており、それぞれこれらの建物の建て替えと思われる。S B 3218は3間×2間の身舎に北と西に廂の付く二面廂付建物で、当調査区における廂付建物の出現は、この時期からである。

掘立柱建物の方向は、S B 3237を除き、他はすべて北、ないしは北に対し東へ偏る。特にS B 3128とS B 3135は北に対し東へ10°も偏り、溝S D 291の方向から大きくはずれる。

土壇には、調査区西部のS K 3126・S K 3127・S K 3133と東部のS K 3178・S K 3185～S K 3187・S K 3190・S K 3215・S K 3216・S K 3219・S K 3232・S K 3246がある。土壇の大きさ、形状は平安時代前半のものと大差はない。おもな出土遺物には、土師器杯・皿・碗・甕、少量の黒笹90号窯期の灰釉陶器碗・皿・段皿、緑釉陶器碗・皿、須恵器甕、黒色土器碗、製塩土器、土錘などがある。

溝S D 291の埋土からは、上面から底部に至るまでこの時期のものが最も多く出土しており、比較的短期間に埋まったものと思われる。

(Ⅴ) 平安時代後半の遺構

掘立柱建物7、井戸1がある。

掘立柱建物は、調査区南西部のS B 3143・S B 3153、中東部のS B 3168・S B 3192・S B 3209・S B 3228、南東部のS B 3238がある。この時期の建物は、3間×2間の小規模な建物が多

く、建物の棟方向もE4°SからE4°Nに至るまで種々様々である。

井戸S E 3134は、S B 3143の北にあり、径3.2m×2.8mで、深さ 4.6mで底に達した。井戸底の絶対高は 5.1mである。井戸底で、井戸枠を支える四隅の角材のうち東側の2つを、小さな残片ではあるが確認した。これにより井戸枠の一边は約60cmぐらいと推測できる。井戸の埋土からは、土師器杯・皿・碗・甕をはじめ、百代寺窯期に相当する灰釉陶器碗などが出土している。

(Ⅵ) 平安時代末葉の遺構

掘立柱建物22、土壇15、溝4がある。

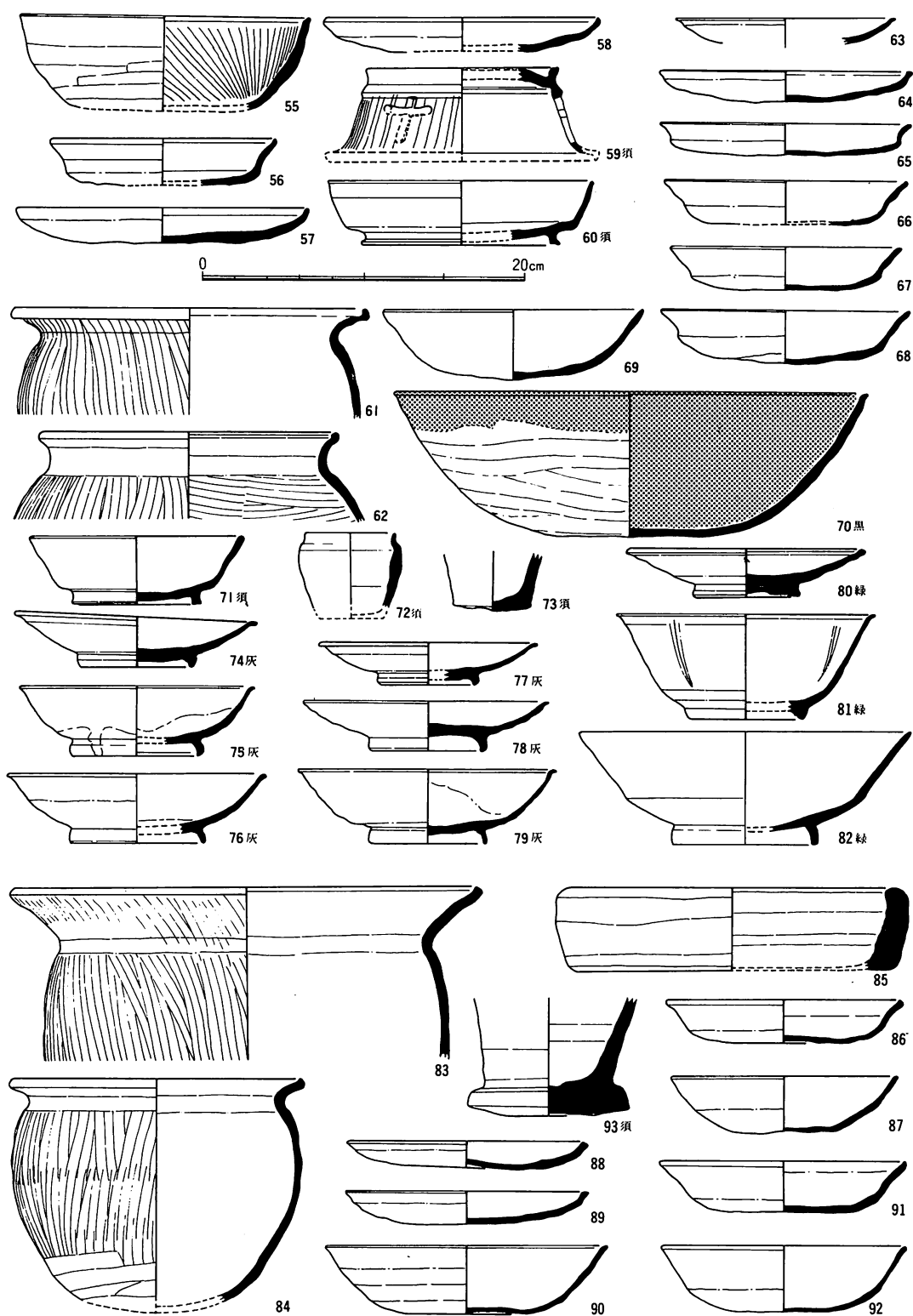
検出された掘立柱建物はすべて東西棟建物である。同一場所において比較的短期間のうちに何度も建て替えられたためであろう。調査区の北東部、南西部、南東部において建物が集中するブロックを形成している。なおこの時期は、平安時代後半の建物配置と同様、奈良時代末葉～平安時代前半の建物が検出された調査区北西部には、一棟の建物も検出されていない。

北東ブロックには、S B 3183・S B 3184・S B 3198がある。このうちS B 3183は、北と南に廂の付く二面廂付建物である。掘立柱建物の方向は いずれも北に対し東へ偏るものであり、南西、南東ブロックにある大部分の建物の方向とは若干異なる。柱掘形の切り合いによりS B 3184は、S B 3198より新しい。

南西ブロックには、S B 3144・S B 3147～S B 3152・S B 3157・S B 3161の計9棟の掘立柱建物がある。建物の規模をみると5間×2間の東西棟建物が4棟、3間×2間の建物が4棟、2間×2間の倉庫と考えられる建物（S B 3157）が1棟ある。柱掘形は径30cm～40cmの円形で、ほとんどの建物の柱掘形に柱痕跡をとどめている。柱間は7尺前後のものが多い。掘立柱建物の新旧関係が確認されているものとしては、柱掘形の切り合いより、S B 3152は、S B 3144・S B 3149・S B 3150より新しく、S B 3148はS B 3157より新しい。掘立柱建物の方向では、北に対し西へ2°～3°偏る建物が多い。

南東ブロックには、S B 3229～S B 3231・S B 3233～S B 3236・S B 3239・S B 3241・S B 3242の計10棟がある。これらのほとんどが調査区の東へ延び全体の規模は不明であるが、桁行5間と3間の建物が中心となろう。このうちS B 3241は、調査区の南へ延びているが、おそらく3間×3間の総柱建物で倉庫と考えられるものであろう。掘立柱建物の方向は北で西へ3°前後偏るものが多い。掘立柱建物の新旧関係の明らかなものでは、S B 3234はS B 3233より新しく、またS B 3229→S B 3231→S B 3236の順を確認している。

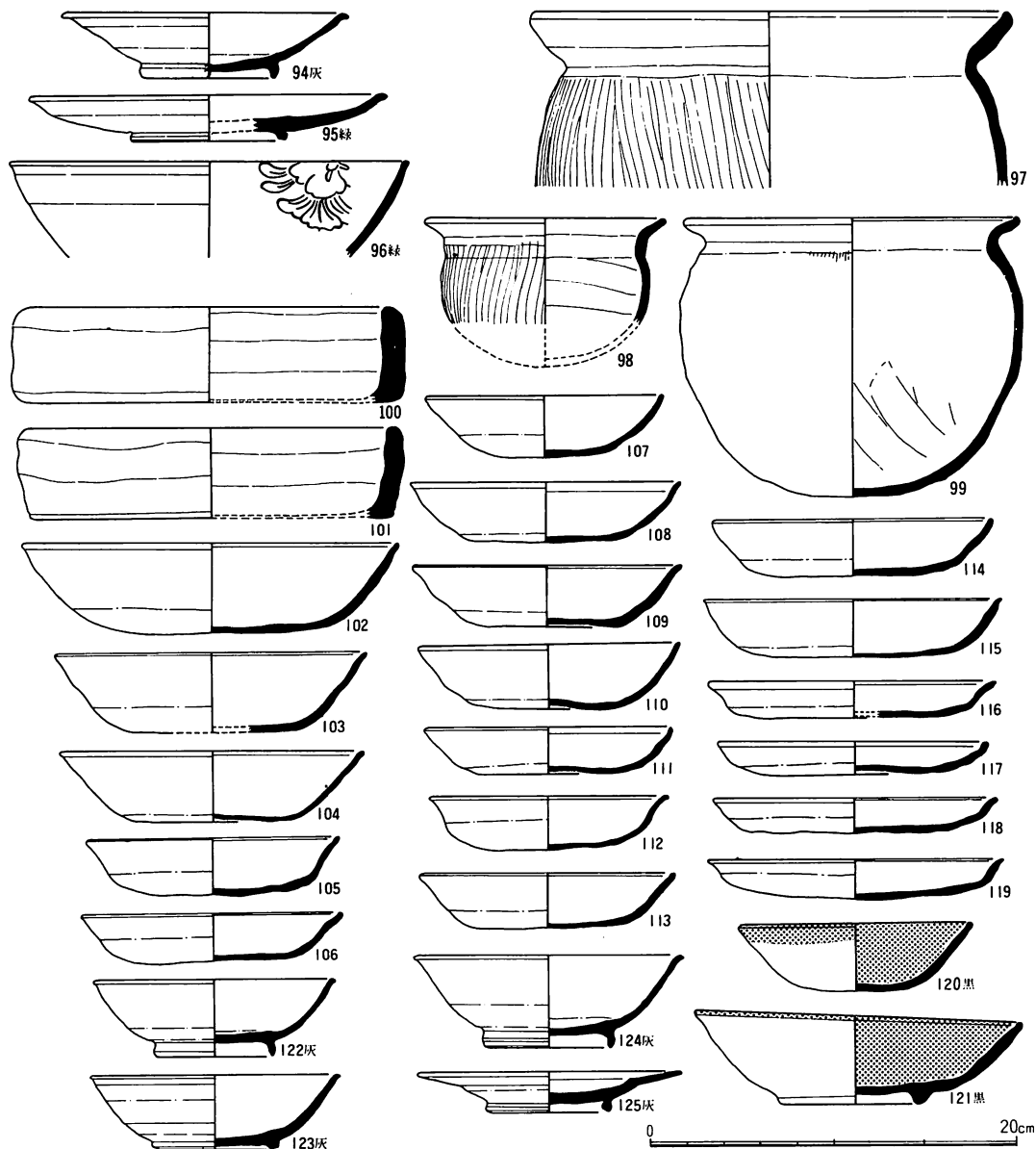
さて以上の掘立柱建物から同時期に存在した建物を抽出することは非常に困難であるが、建物の重複状況から判断して、建物の方向が北で東へ偏る建物群では最低3期以上、北で西へ偏る建物群では6期以上の建物の変遷が考えられる。



第12図 第51次出土遺物 S K 3137; 55~60、S D 291; 61~82
S K 3185; 83~93

土壇は、建物が集中する各ブロックごとにそれぞれ何か所がある。

北東ブロックには、S K 3189・S K 3207、南西ブロックには、S K 3129・S K 3138・S K 3142・S K 3145・S K 3146・S K 3156・S K 3157、南東ブロックには、S K 3243～S K 3245がある。また北東ブロックと南東ブロックの間にS K 3225～S K 3227がある。各土壇からは、土師器皿・小皿・甕、ロクロ製土師器小皿・台付皿のほか、少量の山茶碗、山皿、白磁碗などが出土している。時期的には11世紀後半代から12世紀の中頃までの間にほぼおさまるものと考えている。また平安時代末葉における掘立柱建物の変遷もほぼこれと同年代内におさまるもの



第13図 第51次出土遺物 S K 3185; 94～96、S K 3127; 97～125

思われる。

溝には調査区北部を東西に走る S D 3111 と調査区東部の小溝 S D 3208 ・ S D 3222 ・ S D 3224 がある。S D 3111 は、S D 291 の埋土を切り、ほぼこれと同位置を走る溝である。溝幅は S D 291 の約半分の 1 m で、深さは 20cm 前後である。溝 S D 3208 と S D 3222 は、幅 60cm、深さ 10cm 前後の浅い溝で、それぞれの延長線が直交する関係にある。しかしその性格については不明。S D 3224 は土壇 S K 3226 ・ S K 3227 より新しい。

(Ⅶ) 鎌倉時代以降の遺構

掘立柱建物等の官衙の遺構が廃絶したのちに造られた遺構で、調査区北部を東西に走る溝 S D 3110 と南北溝 S D 3112 ・ S D 3175 ・ S D 3176 がある。

(Ⅷ) 遺 物

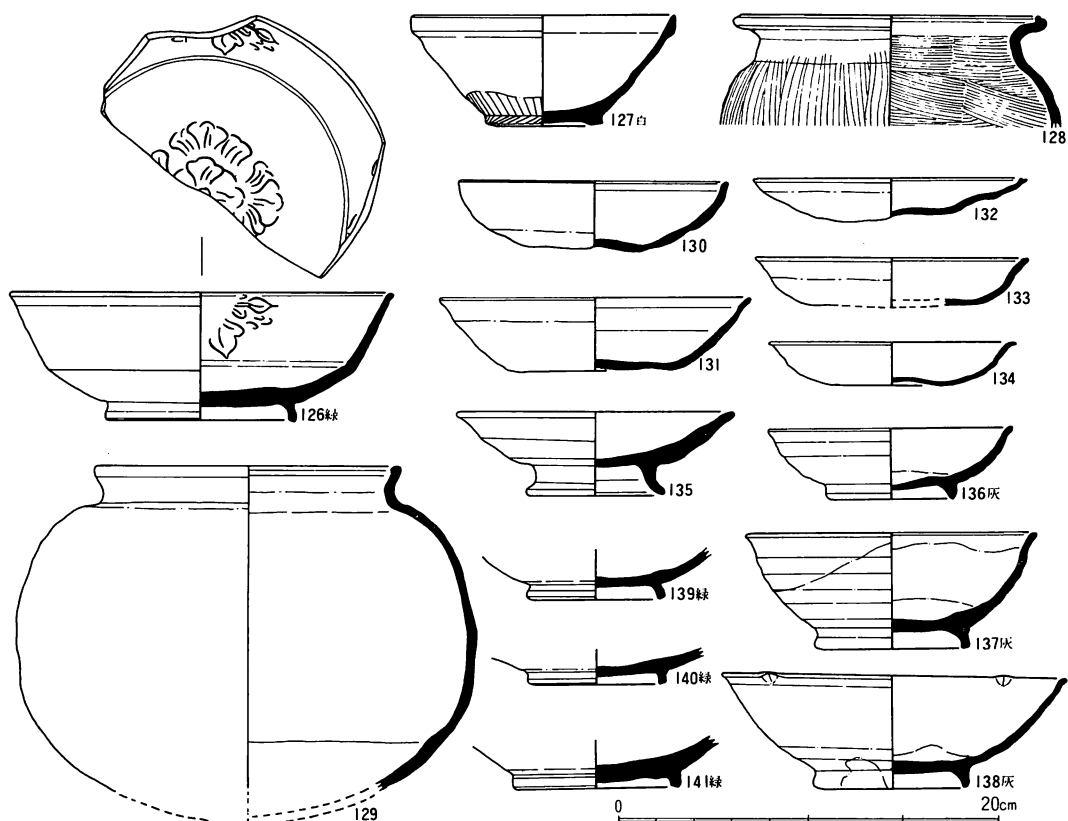
奈良時代より鎌倉時代に至る各時期の遺物が多数出土している。とりわけ土師器杯・皿類の出土量が多い。このうち特に平安時代初頭～中葉の土壇、井戸、溝から良好な一括資料が得られている。

平安時代初頭に位置付けられる良好な土器の一群としては、土壇 S K 3130 ・ S K 3137、井戸 S E 3200 出土のものがある。おもな器種には、土師器杯・皿・碗・高杯・甕・鍋・甌・小形壺、須恵器杯・蓋・皿・盤・長頸壺・双耳壺・小形壺、製塩土器、土錘などがある。特殊なものでは、S K 3130 出土の石帯（丸鞆）、S K 3137 出土の円面硯がある。なおこの円面硯の一部は S K 3140 出土のものと接合関係にある。さて、以上の土器は、折戸 10 号窯期に相当する時期のものと思われ、実年代では 8 世紀末～9 世紀初頭頃を考えている。

平安時代中葉の良好な一括資料としては、土壇 S K 3127、溝 S D 291 出土のものがある。おもな器種には、土師器杯・皿・碗・甕・甌・鍋、黒色土器碗、須恵器小形壺、黒笹 90 号窯期の灰釉陶器碗・皿・段皿、製塩土器などがある。なお S K 3127 出土の灰釉陶器碗の中には、角高台で内面全面に灰釉を刷毛塗りするものもあり、S K 3127 出土の一括資料は時期的に黒笹 14 号窯期に近いものと思われる。

平安時代後半では、井戸 S E 3134 出土のものがある。おもな器種には、土師器杯・皿・碗・高杯・甕、須恵器甕、灰釉陶器碗などがある。時期的には、百五銀行の事前調査で確認した井戸 S E 2000 出土のものよりやや新しい様相を呈しており、11 世紀中葉頃を考えている。なお灰釉陶器は、色調が灰白色で、透明感のある灰釉をつけ掛けしており、美濃窯系のものではないかと思われる。

緑釉陶器は 146 点確認された。全体の器形を窺えるものも多く、土壇 S K 3190 ・ S K 3185 からは陰刻花文を施した緑釉陶器が見つかった。陰刻花文の特徴から黒笹 90 号窯出土のものに近いものと考えている。



第14図 第51次出土遺物 S K 3190; 126 S K 3142; 127
S E 3134; 128~138

青磁碗・白磁碗の出土量も多く25片が出土。特に今回白磁碗の出土量が多い。

このほか特殊な遺物では、須恵器杯底部外面を硯面とした転用硯2点、墨書土器5点、灰釉陶器碗体部外面に「大」とへう書きしたもの1点、平瓦6点、鉄釘13点などがある。

(Ⅸ) ま と め

今回の調査により、大型掘立柱建物S B 3220をはじめ多数の掘立柱建物、土壇等の検出や、区画溝S D 291の面的な確認ができ、官衙地区における主要な一画を明らかにすることができた。

また掘立柱建物と区画溝S D 291との関係から平安時代初頭～前半までは、斎宮寮の造営に際し、溝の方向がかなり意識されていたものと思われ、整然とした建物配置の確認とともに斎宮寮造営計画の一端を窺い知ることができた。しかしこうした計画性は、S D 291が平安時代中葉のある時期に埋没してしまうと崩れ始めるようであり、この時期の掘立柱建物の方向が急変していることから理解されよう。以後平安時代末葉になり溝S D 3111がS D 291とほぼ同位置に掘られるが、この時期の掘立柱建物の棟方向は、E5°SからE4°Nまで様々で平安時代初頭～前半における溝と掘立柱建物のような密接な関係はないように思われる。ところで現在

S D 291の西への延長は広域圏道路の事前調査の際一部が確認されており、また、東への延長は第9－4次トレンチ調査で確認のS D 354がこれにあたるものと思われ、総延長約 380mほど確認されている。S D 291と同様な形状の溝は、鍛冶山地区で実施した第46次調査、東加座地区で実施した第35次、第40次調査などでも見つかり、これらが碁盤目状になるのか否かは、なお検証を要するが、建物の造営に関し密接な関連をもつ区画溝であることは間違いなかろう。

一方、同一の場所において桁行3間～5間の掘立柱建物が何度も建て替えられる状況が平安時代末葉になり見い出せる。こうした状況は御館・柳原地区で実施した第19次、第20次調査の状況とよく似ており、この時期における官衙地区の広がりを知るうえで貴重な成果が得られた。

V 第 52 次 調 査

6 A G F - D (西加座西地区)

宮域東部の中町裏のほぼ中心地における第24次(昭和54年)の発掘調査においては、平安時代前半の掘立柱建物が多数検出されている。

それらの建物の中で、5間×2間の東西棟の建物を主殿として、後方北側に後殿、南西側に脇殿といった配置がみられ、区画溝とともに斎宮寮内における建物配置の計画性が窺える貴重な発見があった。

今回の調査は、この第24次調査で検出した主要建物の北方部分の状況把握を主目的として、約750㎡にわたって実施することになった。

調査の結果、竪穴住居1、掘立柱建物9、井戸1をはじめ多数の土坑、溝などの遺構を検出した。その大半は奈良時代から平安時代中葉にかけてのものである。出土遺物には奈良時代より鎌倉時代にかけての土師器、須恵器の他、小型銅製儀鏡、石製蛇尾各1点などがある。

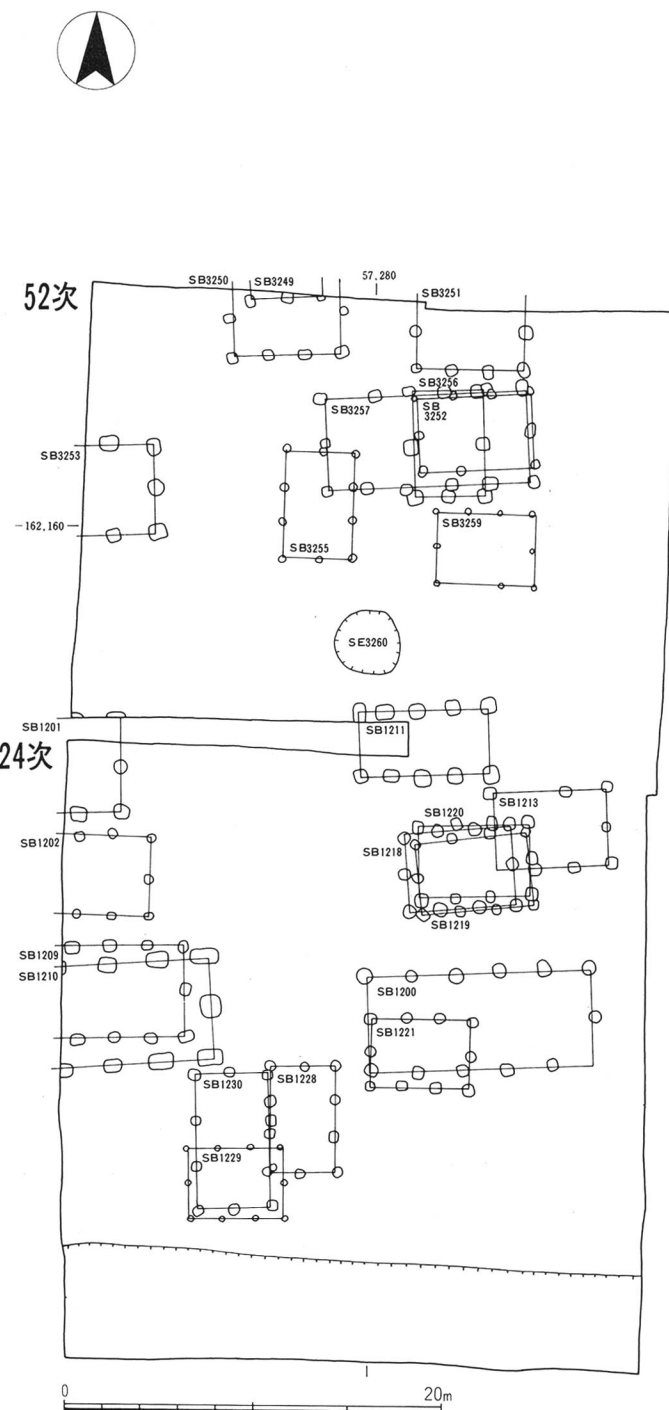
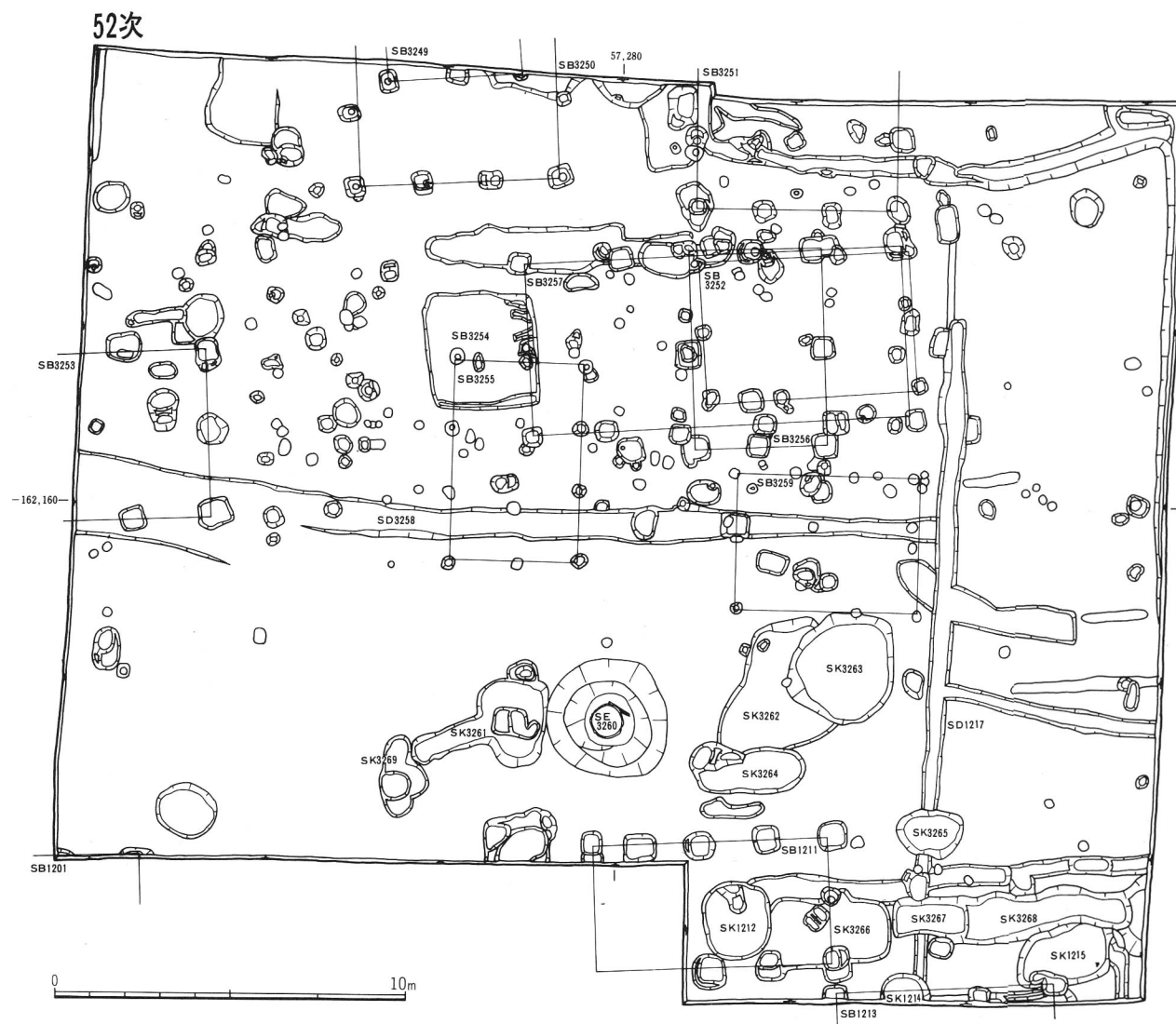
(I) 奈良時代の遺構

土坑5(S K 3261・S K 3266・S K 3267・S K 3268・S K 3269)を検出した。S K 3266、S K 3267のように不整長方形を呈するものと、S K 3268のように溝状に細長いもの、あるいは不整形を呈するもの(S K 3261・S K 3269)がある。すべて調査区の南半分で検出され、S K 3266・S K 3267・S K 3268は、第24次調査で検出されたS K 1212とともに一連のものである。深さは15cm～30cmと比較的浅いものが多い。出土遺物は最も多いS K 3266で整理箱に2箱程度と比較的少ないものが多い。S K 3261より提瓶が出土している以外は、土師器の杯・皿・甕、須恵器の甕等がほとんどである。なお、これら土坑は、同発掘区内のすべての掘立柱建物、竪穴住居に先行するものであり、これらの建物と直接関連するものではない。

(II) 平安時代初期の遺構

竪穴住居1(S B 3254)のほか、土坑3(S K 3262・S K 3263・S K 3264)を検出した。S B 3254は1辺3.2m、約10㎡のほぼ方形を呈する竪穴住居で、東壁の中央よりやや北よりにカマドをもつ。地山から床面までは深さ約20cmである。主軸の方向は北で、わずかばかり東に偏るものである。柱穴は認められない。カマド跡付近からは土師器の長甕等が出土しているが全体で整理箱1箱分と遺物の出土量は少ない。

土坑はS K 3262・S K 3263・S K 3264の3つを検出した。前後関係については、埋土の切り合い関係によって、S K 3262が最も古いことがわかるが、S K 3263、S K 3264の前後関係は不明である。いずれも規模、形状ともに様々で、一ヶ所に集中しているものの、特別の性格を窺



第15図 第52次遺構実測図 (1 : 200)

わせるものではない。S K 3262、S K 3264は10cm～20cmと浅く、遺物の出土量もわずかである。

S K 3263は径3m、深さ30cmのほぼ円形を呈し、土器の出土量も整理箱3箱と比較的多く、土師器の杯・甕・高杯、須恵器の杯蓋・鉢などが出土している。

(Ⅲ) 平安時代前半の遺構

掘立柱建物7 (S B 3249・S B 3250・S B 3251・S B 3252・S B 3253・S B 3256・S B 3257)と、井戸1 (S E 3260)を検出した。

今回発見した7棟以外のS B 1211、S B 1213の2棟は、すでに第24次調査で確認したもので、今次調査でその規模がより明確になった。このうち、掘立柱建物の柱穴の相互に重複関係をもつのは、S B 3252・S B 3256・S B 3257の3棟であるが、その前後関係はS B 3256が最も古く、次いでS B 3257→S B 3252の順となる。S B 3249・S B 3250・S B 3251の3棟は、調査区外へ延びるため、その規模は不明であるが、すべて梁行2間の建物であろうと思われる。棟方向は、S B 3253とS B 3257の2棟が、第24次調査で検出された大型柱穴をもつ主要建物S B 1200と同じく、東に対し3°北に偏るもので、同時期のものと考えられる。S B 1200を主殿とし、S B 1230を脇殿、S B 1220を後殿とする計画的な建物配置は、第24次調査で確認されたものであるが、今回検出された2棟も、棟方向およびS B 3253のような柱掘形1m前後の大型柱穴をもつ建物等より考えて、あるいはS B 1200に付随して計画的に建てられたものと思われる。またS B 3250とS B 1211はともに東に対し2°北に偏っているものであり、同時期のものであろう。棟方向よりみて単独に存在するS B 3249、S B 3251の2棟を除いて考えても、今回検出した平安時代前半の掘立柱建物の作られた時期は、S B 1200とそれに付随すると思われるS B 3253、S B 3257を中心にして、柱通りの方向から考えて2期以上、埋土の切り合い関係から考えて少なくとも3期以上あったことが予想される。

井戸(S E 3260)は、径3.5mの素掘りのもので、調査区の中央南端部分で検出し、地山面より約1mの深さまでは掘り方の傾斜も比較的ゆるやかであるが、それ以下は傾斜の急な掘り方である。井戸の底部からは高さ約70cm、直径約90cm、厚さ4cm～5cmのくり抜きの井戸枳が検出された。斎宮では、過去にも井戸は10数基発見されているが、井戸枳が見つかったのは今回がはじめてである。宮域東部の今回の調査区は水位が比較的高いのであろう。上部には黒色土が埋まり、底部は黒色の粘質土が埋まっていた。遺物は土師器の甕・杯、須恵器の甕・鉢等がほとんどだった。中には須恵器杯蓋の転用硯も混じっていた。井戸の底部からはこれらの土器と共に、小型銅製儀鏡、石製蛇尾等が出土している。なお井戸からの出土遺物は整理箱15箱分と当発掘区内の遺構の中では最も多い。

(Ⅳ) 平安時代中葉の遺構

この時期と考えられる遺構には、掘立柱建物2 (S B 3255・S B 3259)、溝1 (S D 3258)、

土壇1 (S K 3265)がある。掘立柱建物S B 3255は3間×2間の南北棟、S B 3259も同じく3間×2間の東西棟の建物で、S B 3259は径40cm前後、S B 3255は径30cm前後の、ともに小規模な柱穴の建物である。S D 3258は幅1m、深さ10cmの東西に走る浅い溝で、茶褐色土が埋まり、土師器片などがわずかに出土しているだけである。同時期のS B 3255、S B 3259ともにこの溝と重複しているが、その前後関係は明らかではない。S D 1217は第24次調査で確認されたS D 1217の北側に続くもので、今回の調査でその規模がより明確になった。幅50cm、深さ10cm前後の小規模なもので、北端近くでS D 3258がこの溝に交わっている。同時期のS B 3255、S B 3259と似た方位を示し、平安時代中葉の一時期の小区画を示す溝とも考えられる。茶褐色土が埋まり、土師器の杯・甕、須恵器の甕、土錘等が出土しているが、量はわずかである。S K 3265は1.5m×2.0mの楕円形のもので、深さ約20cm、土師器の杯が数点および黒色土器の杯1点が、ほぼ完形に近い形で出土している。

(V) 遺物

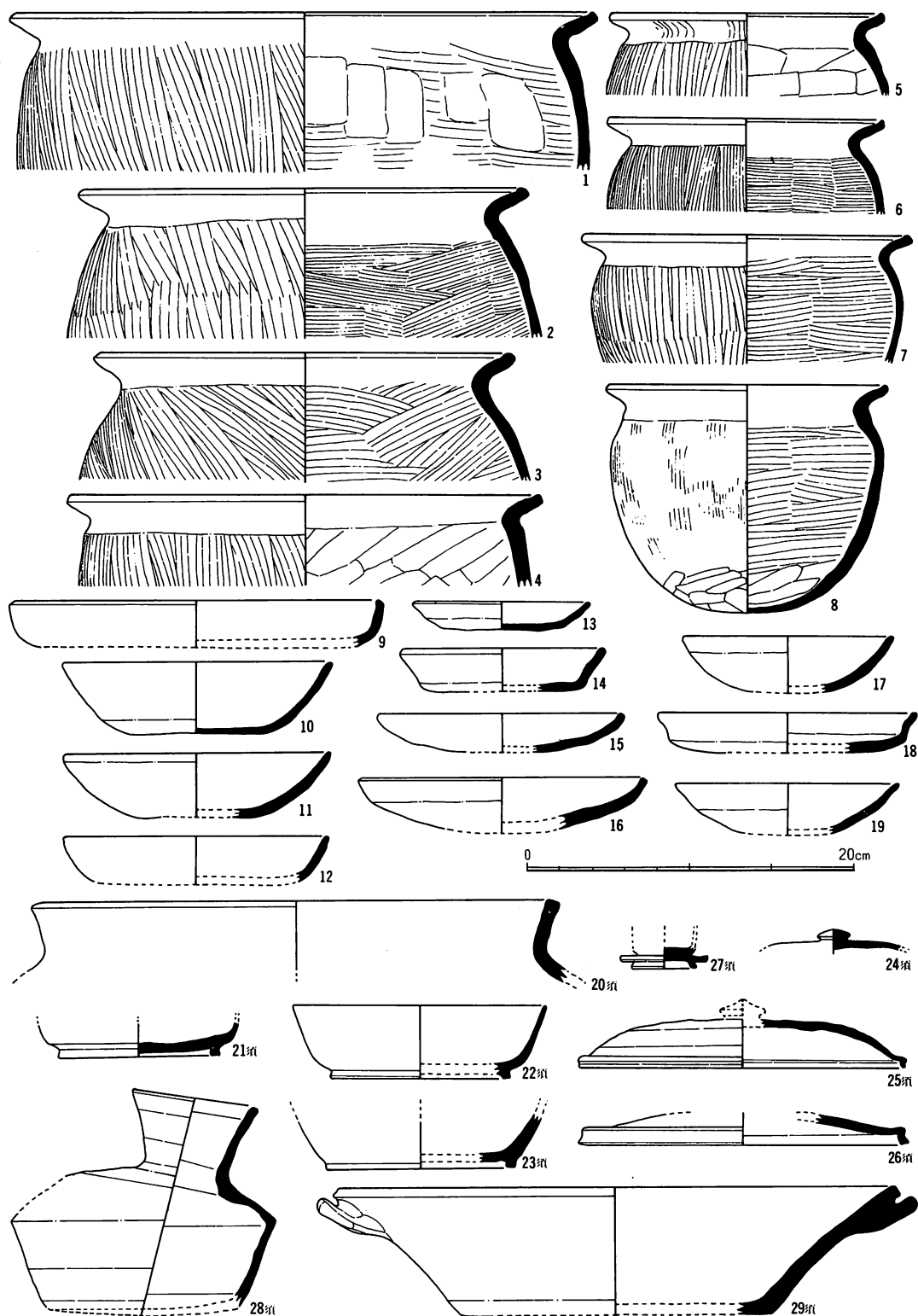
約750㎡と狭い発掘調査であったが、遺物出土量は比較的多い。奈良時代から平安時代にわたる遺構が検出されたことに対応して、これらの時期の遺物がほとんどである。時期別にあげると、奈良時代のS K 3261からは土師器の杯・甕とともに提瓶が出土している。平安初頭の遺物については、S B 3254から土師器の長甕が、杯等とともに出土し、またS K 3263からは比較的多量の土器が出土しており、その種類も土師器杯が数点完形に近い形で出土しているのをはじめ、土師器高杯脚部・甕、須恵器甕・杯等と多かった。平安時代前半の遺物が今回の調査区では最も多く、中でもS E 3260からは整理箱で15箱という多量の土器と共に、前述の石製蛇尾や小型銅製儀鏡が出土している。土器はほとんどが土師器と須恵器であり、土錘も混じる。井戸底部にすえられていた井戸枠も貴重な発見である。

平安中期の遺物は二つの溝と土壇S K 3265から出土しているがわずかである。S K 3265から出土している黒色土器杯は、口径30cm、器高8cmと比較的大きく、体部は丁寧にヘラ削りがなされている。包含層も含めると出土遺物は全体で整理箱約70箱であった。

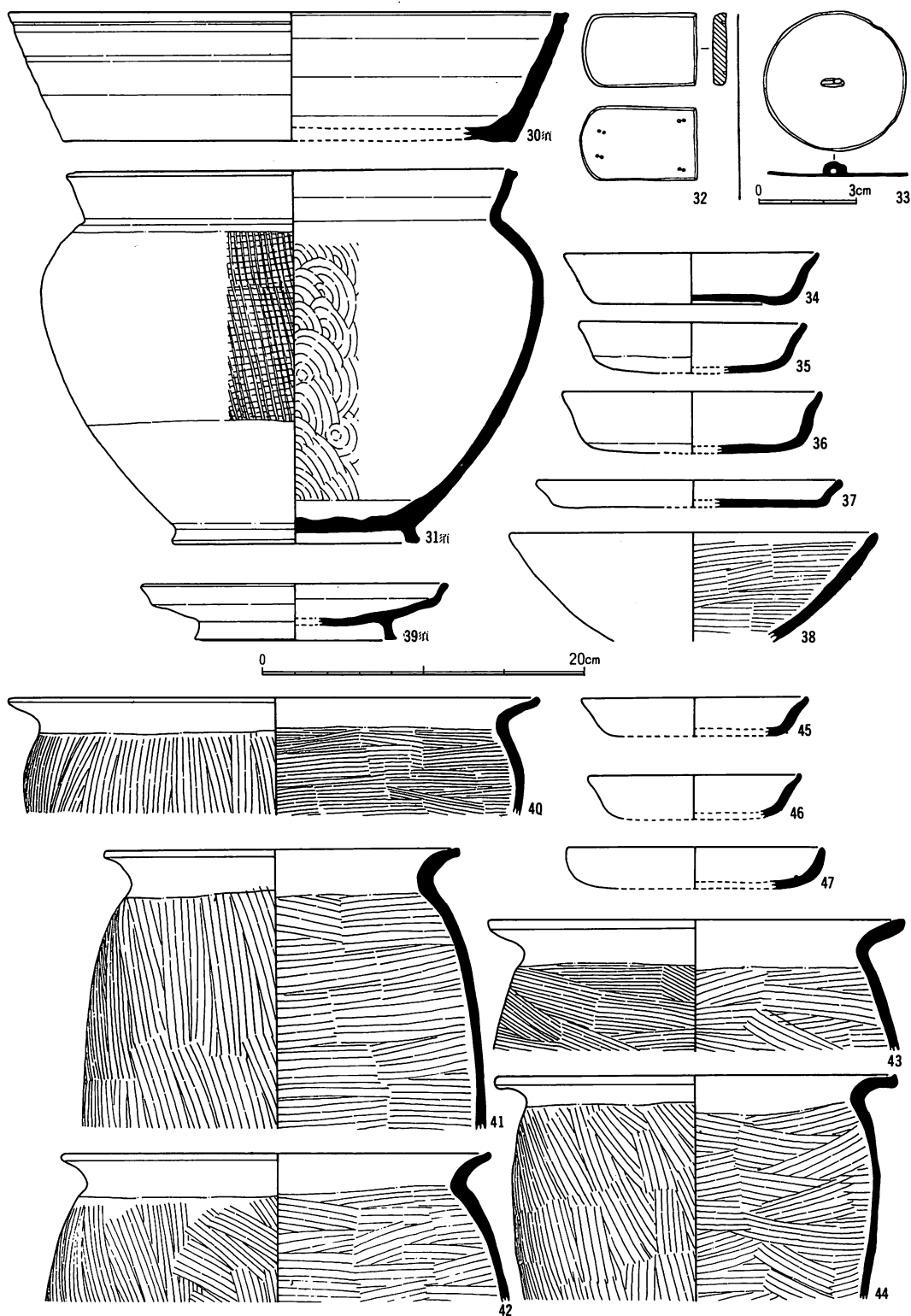
(VI) まとめ

かつて第24次調査でS B 1200を主殿とし、S B 1230を脇殿、S B 1220を後殿とする平安時代前半の計画的な建物配置を検出している。今回の調査は、これら主要建物配置の後方部分の状況把握を目的としたものであったが、この結果これら3棟に先行する奈良時代の土壇および平安時代初頭の竪穴住居、同じく3棟と時期および建物の柱通りを同じくする2棟の掘立柱建物とそれに付随する井戸1基、また3棟の後に続く平安時代中葉の掘立柱建物2棟を確認した。

奈良時代の遺構としてはいくつかの土壇が検出されたにとどまる。平安時代初頭になると竪穴住居が造られてくるが、わずか1棟検出したのみである。しかし、計画的な建物配置がなさ



第16図 第52次出土遺物 S E 3260



第17図 第52次出土遺物 S E 3260; 30~33 S K 3263; 34~39
S B 3254; 40~47

れる以前の当地区に於ける様子の一端を窺い知ることができる。さて、平安時代前半には S B 1200 と棟方向を同じくして東に対し北へ 3° 偏る S B 3253 と S B 3257 が作られる。恐らく井戸 S E 3260 も同じ頃作られたものであろうが、これらの建物と井戸が S B 1200 にともなって計画的に作られたものか否かは、現段階では明確にすることはできない。他に同時期の掘立柱建物は 5 棟あり、少なくとも 3 つの時期に分けられるものであるが、計画的な建物配置を窺い知ることとはできない。しかし、S B 3256 など、比較的大きな柱掘形をもつ建物もあり、平安時代前半の齋宮寮での計画的な一画を占めていたことが考えられる。平安時代中期になって造られた 2 棟の掘立柱建物 (S B 3255・S B 3259) は、柱掘形もずっと小さくなっている。

次に遺物では特殊なものとして井戸底より出土した小型銅製儀鏡があげられる。井戸や池などに霊力が宿るとされる鏡を、これまた水霊が宿るとされる井戸や池に納める風習は 5 世紀代よりみられるところで、平城京の 9 世紀代の溝からも今回の儀鏡と同様の鏡がみつまっているが、齋宮での出土は今回がはじめてであり、これにより古代日本の、あるいは齋宮寮における習俗の一端を知ることができた。また井戸底に据えられていたくり抜きの井戸枠であるが、これまで齋宮で発見された他の井戸の中にも同様の井戸枠があったであろうことが今回の発見で十分予想されよう。

VI 第 48 次 調 査

(個人住宅新築等の現状変更緊急調査)

第48－1次調査 6 A C M－M (プール新設)

斎宮小学校のプール新設にあたって、1050㎡の面的調査をした。以前校舎建築に伴う第15次調査では四脚門・方形周溝等が発見されており、奈良・平安時代の遺構が重複して検出されている場所である。検出した遺構には奈良時代では掘立柱建物1 (S B 2944)、竪穴住居7 (S B 2940・2943・2947・2948・2952・2957・2960)、土壇8 (S K 2942・2945・2946・2951・2953・2954・2956・2961)があり、平安時代後半では掘立柱建物1 (S B 2950)、溝4 (S D 2941・2949・2958・2959)がある。S B 2943・2947・2952・2957は東壁にカマドを持っている。S B 2950は南北に廂を持つ二面廂付建物だが、柱掘形は不揃いで小さい。4条の溝は調査区全体にちらばり、まとまりがなく不整形である。奈良時代の遺物は土師器杯・皿・甕・甑が殆んどで、他に須恵器杯・蓋・甕等、また平安時代の各種土師器・黒色土器・製塩土器・緑釉陶器が見つかった。包含層からは山茶碗など中世の土器が出土している。

第48－2次調査 6 A D P－Q (吉田宅地)

近鉄線以南の住宅密集地域で、幅3m、長さ9mの南北トレンチを設定し調査した。検出した遺構は平安時代前半の井戸1 (S E 3271)、平安時代後半の掘立柱建物1 (S B 3270)、鎌倉時代の溝2 (S D 3272・3273)、室町時代以降の土壇1 (S K 3274)である。柱掘形内から緑釉陶器、土師器杯・皿片が出土した。

第48－3次調査 6 A B L－M (西川宅地)

台地の西端部分で、東西に幅4m、南北に幅5mのL字形のトレンチを設定して調査した。検出した遺構は、室町時代の溝 (S D 3276～3281)と弥生時代中期の溝 (S D 3282)のみで、斎宮にかかわる時期の遺構は検出されなかった。出土遺物は、中近世の土師器、陶磁器類が多かった。

第48－4次調査 6 A G L－B (倉田宅地)

昭和52年度に実施した2Fトレンチで、斎宮の東の限りとされる溝が確認されていた地区で、東西に幅3m、長さ11mのトレンチを設定し調査した。いずれも南北に走る溝5条を検出した。S D 3283は平安時代中葉の溝で、溝幅2.6m、深さ約50cmで、埋土中からは土師器杯・皿・甕が出土した。S D 3285・3286は鎌倉時代の溝である。S D 3285はエンマ川に沿う西側の大溝と確認され、溝幅2.3m、深さは旧地表より1.7mを測り、埋土中から土師器皿・甕、山茶碗が見つかった。他の溝は時期不明である。

第48－5次調査 6AGD（町道側溝）

史跡指定地東部北限にあたる町道側溝新設個所に幅1m～2m、総延長約175mのトレンチを設定し調査を実施した。調査前から予想されていた大溝SD5をはじめ、第37－4次調査で検出の南北溝SD2474・2475等の延長部分を確認した。他に掘立柱建物1棟、土壇2、溝9条を検出した。平安時代初頭の遺構はSD3289のみで、SB3288・SK3290は平安時代中葉、SK3291・SD3295は平安時代末葉、SD3293は鎌倉時代のものである。他は時期不明である。特にSK3290からは黒笹14号窯期の土器が大量に出土している。

第48－6次調査 6AGC－A（今西倉庫）

第48－5次調査の北側に接する畑地で、東西11.5m、南北7.2mの調査区を設定して調査した。検出した遺構には、奈良時代の竪穴住居1（SB3303）、宮城北辺部としては大型の平安時代中葉の掘立柱建物1（SB3302）、土壇3（SK3300・3304・3305）、鎌倉時代の井戸1（SE3301）である。いずれの土壇からも黒笹90号窯期の灰釉陶器が出土している。特にSK3300は緑釉陶器の素地も含まれていた。

第48－7次調査 6ADT－H（森西車庫）

牛葉集落南部の畑地に幅4m、長さ30mの東西トレンチを設定して調査した。検出した遺構は掘立柱建物3、土壇4、溝2、井戸1などがある。奈良時代の遺構にはSK3307で、SB3313・SD3306は平安時代前半、SK3312は平安時代中葉、SB3311は平安時代後半、SB3310・SK3314・3315は平安時代末葉、SD3309・SE3308は鎌倉時代のものである。SD3306は、第43－2次調査で検出した平安時代後半の南北溝SD2900と並行するものと思われ、南北に走る道路の東側溝とも考えられる。出土遺物は各時期の土師器杯・皿、須恵器等が見つかった。

第48－8次調査 6ACL－E・F・G（早川工場他）

以前四脚門の見つかった斎宮小学校の西側にあたり、これまで雑木林であった個所において840㎡調査した。斎宮と関係する遺構は少なかったが、奈良時代の土城SK3320、平安時代末葉の土壇SK3321、鎌倉時代の土壇SK3322、室町時代以降の溝SD3318・3323・3324、江戸時代の土壇SK3326、井戸SE3317、柵列SA3319が見つかった。その他は時期不明である。出土遺物は、SK3320から見つかった奈良時代後半の良好な一括資料の他は鎌倉時代、江戸時代の土師器、山茶碗陶器などである。

第48－9次調査 6AEV－J（防火水槽）

史跡の南端部分の畑地で、防火水槽新設にあたって102㎡調査した。調査区の南部分は水田で削平され、東側部分には近世の排水溝が埋設されていたため、検出した遺構は平安時代後半から末葉にかけての掘立柱建物SB3330と溝状に連続する不整形な土壇群SK3331～3337である。出土遺物は少ないが、緑釉陶器碗2点、灰釉陶器碗の転用碗2点が見つかった。

第48-10次調査 6 A D T (町道側溝)

牛葉集落南側にあたる町道側溝新設にあたって25㎡調査した。地山直上の深さ90cm～100cmのところまで掘り下げたが、ごく最近の瓦・陶器・針金等を含む攪乱層で斎宮跡に関する遺構・遺物は何ら検出できなかった。

第48-11次調査 6 A G P - E (櫛原倉庫)

史跡の東端部分、役場へ通じる道の東側の畑地で東西 3.1m、南北30mのトレンチを設定し調査した。検出した遺構は、奈良時代の掘立柱建物6 (S B 3342～3344・3346・3348・3349)、竪穴住居2 (S B 3340・3350)、平安時代末葉から鎌倉時代の溝2 (S D 3345・3347)、室町時代の溝2 (S D 3339・3341)である。奈良時代の遺物が多く出土しているが、特にS B 3340は東壁にカマドを持ち円面硯片が見つかっている。これまで東部地区は平安時代に属すると考えていたが、今回の調査において掘立柱建物・竪穴住居が検出され、東部地区においても奈良時代の遺構があることが判明した。

第48-12次調査 6 A F C - H (清水宅地)

第48-6次調査の西側にあたる宅地で、幅8m、長さ16mの調査区を設定し調査した。調査区の約半分が後世の攪乱のために削平されていたため、検出した遺構は奈良時代の掘立柱建物S B 3353、土壇S K 3356、平安時代前半の土壇S K 3354、平安時代中葉の掘立柱建物S B 3360、溝S D 3355である。出土遺物は奈良時代から平安時代の土器が少量出土したにとどまる。

第48-13次 6 A C M - O (校舎増設)

斎宮小学校校舎の西側で、校舎増設にあたって 840㎡の面的調査をした。調査地の東側は現校舎建設時に破壊されており、また中央部は旧プールのあった場所で、基礎や排水溝で一部破壊されていた。検出した遺構は掘立柱建物2、竪穴住居7、土壇3、溝10、土壇墓1である。竪穴住居はすべて奈良時代で、S K 3365・3394も同時期のものである。S B 3367・S K 3368は平安時代末葉、S D 3375・S X 3380は鎌倉時代、S D 3372・3374・3382・3393は室町時代、S D 3369は江戸時代のものである。その他は時期不明である。遺構・遺物ともに奈良時代のもが多く、掘立柱建物もわずか2棟しかなく、そのうえ硯の出土も見られなかったが、第15次調査で検出されている四脚門・築地塀等の存在から当地区も官衛の一部、もしくは官人の居宅地とも考えられる。

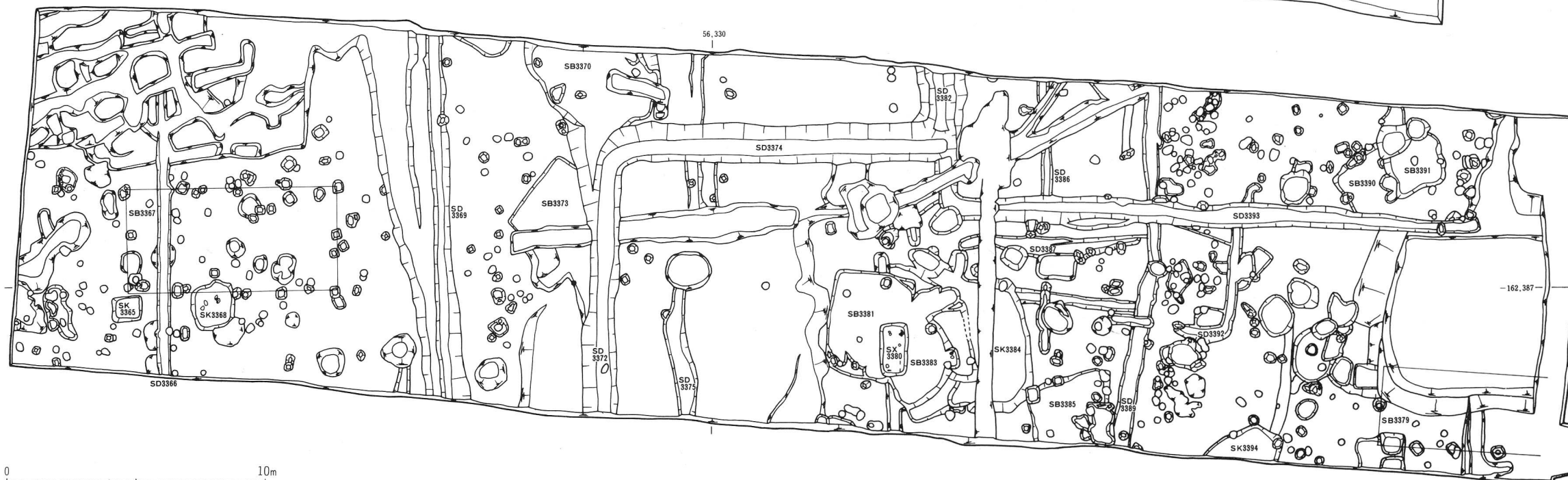
第48-14次調査 6 A E T (町道側溝)

牛葉地区と鈴池地区との字界を通る町道側溝新設にあたって、幅1m、長さ40mにわたり調査した。調査区の中央を水道管や有線の埋設溝が東西に走っていたが、室町時代から江戸時代にかけての土壇1 (S K 3396)、溝4 (S D 3395・3397～3399)、時期不明の掘立柱建物1 (S B 3401)を検出した。遺物も室町時代以降の鍋・陶磁器片が比較的多く出土した。

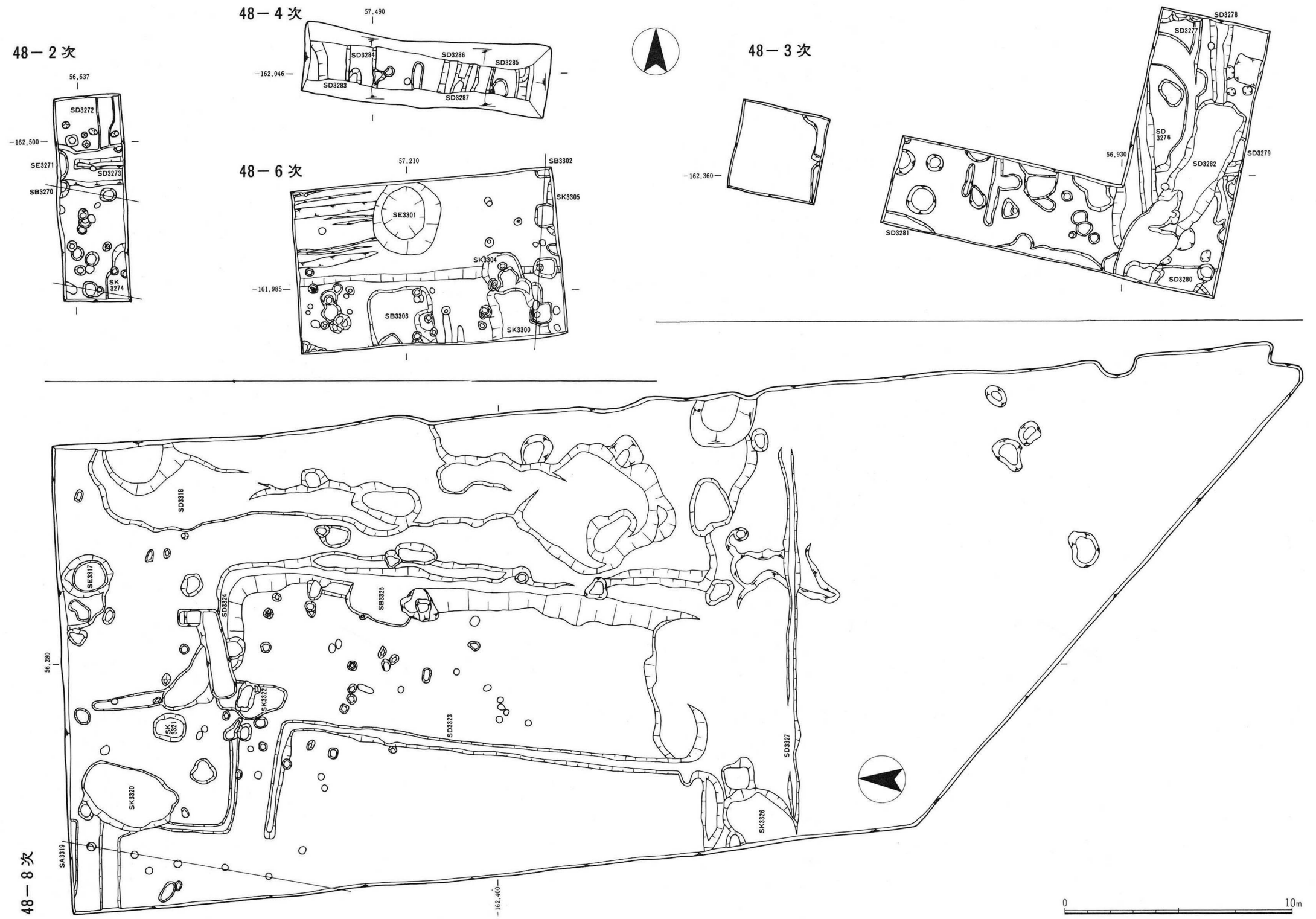
48-1次



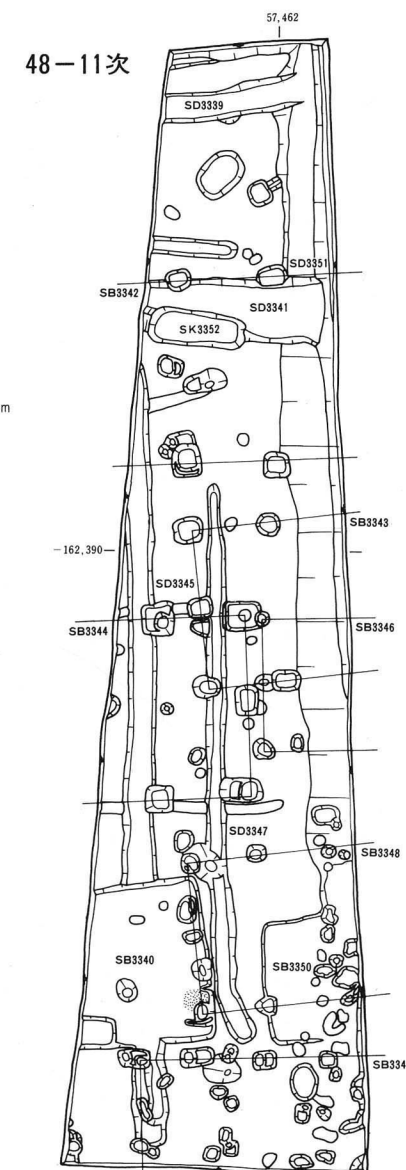
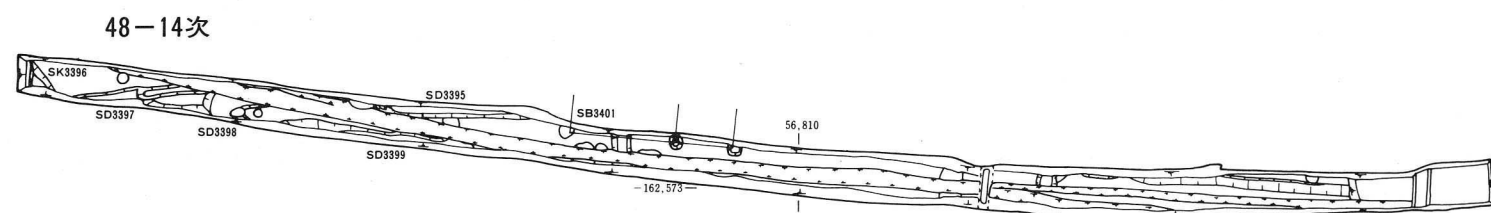
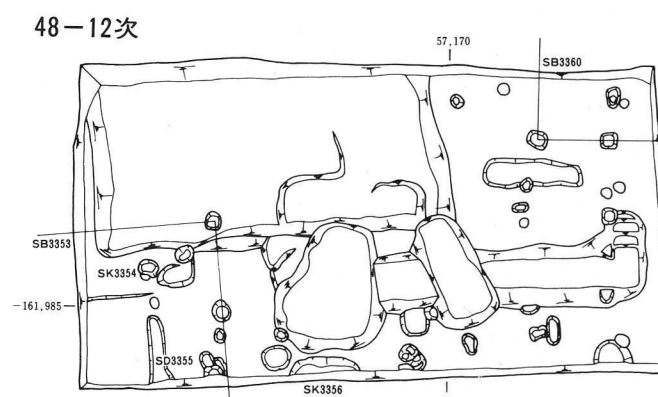
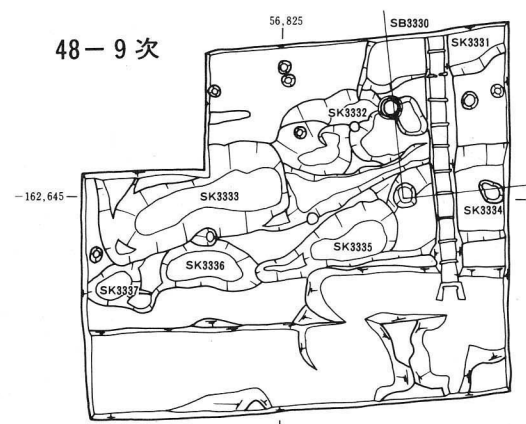
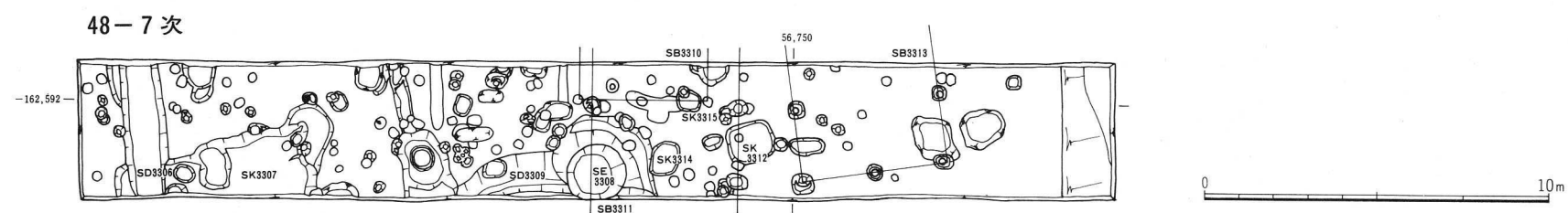
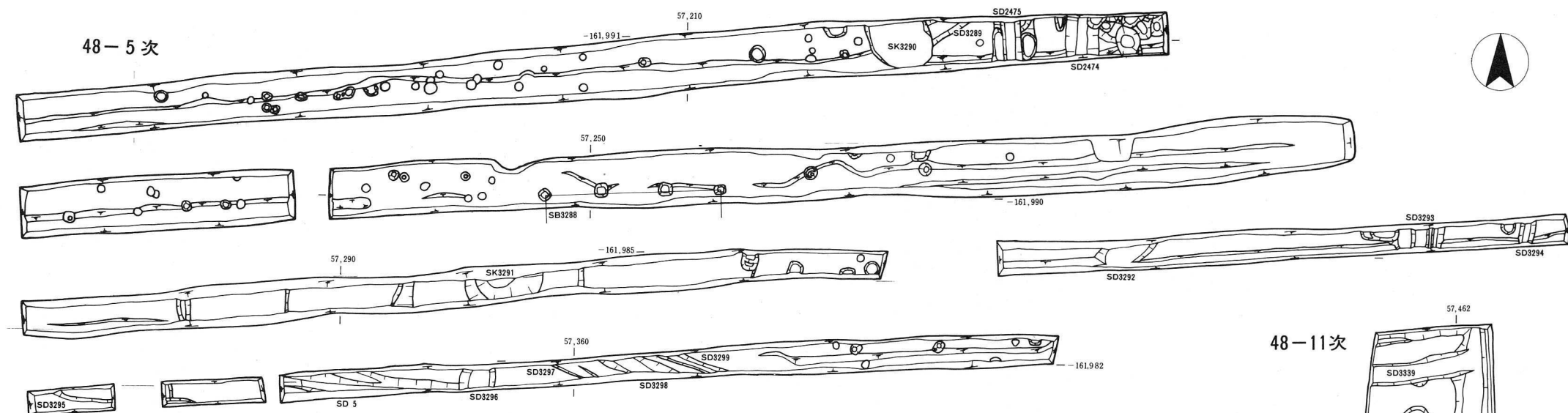
48-13次



第18図 第48次遺構実測図 (1:200)



第19図 第48次遺構実測図 (1:200)



第20図 第48次遺構実測図 (1:200)

VII 調査事務所要覧

I 調査概要

(1) 調査事業 18地区 9,413㎡

ア 計画発掘調査 4地区

第49次調査 上園地区 1,815㎡

第50次調査 東裏地区 1,100㎡

第51次調査 西加座西地区 1,900㎡

第52次調査 西加座東地区 750㎡

イ 緊急発掘調査（個人住宅新築等）

第48－1次～14次調査 3,848㎡

(2) 普及事業

ア 現地説明会の開催

(ア) 第48－1次発掘調査現地説明会

日時 昭和58年6月19日 14時

場所 明和町斎宮宇広頭地内

調査面積 1,050㎡

調査期間 6月1日～6月30日

報告 山沢義貴主査

参加人員 約120名

(イ) 第49次発掘調査現地説明会

日時 昭和58年8月28日 10時30分

場所 明和町斎宮宇上園地内

調査面積 1,815㎡

調査期間 7月1日～10月7日

報告 倉田直純主事

参加人員 約280名

(ウ) 第50次発掘調査現地説明会

日時 昭和58年11月3日 10時30分

場所 明和町竹川字東裏地内

調査面積 1,100㎡

調査期間 8月18日～11月19日

報告 谷本鋭次主査

参加人員 約230名

(エ) 第51次発掘調査現地説明会

日時 昭和59年2月5日 10時30分

場所 明和町斎宮宇西加座地内

調査面積 1,900㎡

調査期間 11月18日～2月28日

報告 倉田直純主事

参加人員 約300名

(オ) 第52次発掘調査現地説明会

日時 昭和59年2月5日 10時30分

場所 明和町斎宮宇西加座地内

調査面積 750㎡

調査期間 1月5日～3月14日

報告 福村直人事務

参加人員 約300名

イ 調査報告講演

(ア) 5月1日 日本考古学協会第49回総会 谷本鋭次主査

(イ) 7月12日 明和町寿大学 山沢義貴主査

(ウ) 8月28日 鈴鹿市郷土史研究会 山沢義貴主査

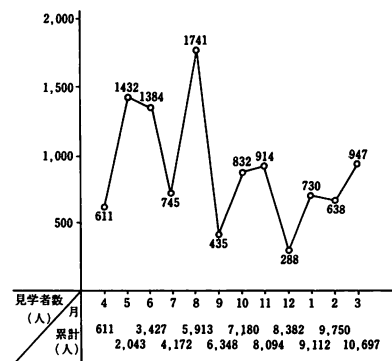
(エ) 10月19日 昭和58年度行政研究会 佐々木宣明所長

(オ) 11月14日 松阪市花岡歴史講座 山沢義貴主査

(カ) 1月14日 国学院大学、日本文化研究所 山沢義貴主査

(キ) 1月29日 三重郷土史会 倉田直純主事

ウ 資料展示室見学者数



エ その他

齋宮跡講演会

日時 昭和58年11月3日 午後1時30分

場所 明和町中央公民館講堂

演題 「齋宮の姫君たち」

講師 梶山女学園大学教授 久徳高文

II 予 算

齋宮跡保存対策費 73,402千円

(単位:千円)

事業名	区分	歳 出	財源内訳		備 考
			県 費	国 費	
発掘調査費		32,842	16,842	16,000	発掘面積 約 6,500㎡
史跡公有化 補 助 金		36,000	36,000	—	公有化面積 約1.5ha
管 理 施 設 設 置 補 助		100	100	—	
保 存 啓 発 事 業		500	500	—	
維 持 管 理		2,760	2,760	—	
整 備 計 画 策 定		1,200	1,200	—	
計		73,402	57,402	16,000	

III 組織規定

三重県教育委員会事務局組織規則抜粋

(昭和43年4月1日
教育委員会規則 第6号)

最終改正 昭和54年3月31日

教育委員会規則第6号

第三章 出先機関の組織

(教育事務所及び齋宮跡調査事務所の設置等)

第12条 事務局の事務(県立学校関係事務を除く。)を分掌させるため、出先機関として教育事務所及び齋宮跡調査事務所を置く。

3. 齋宮跡調査事務所の名称及び位置は次のとおりとする。

名 称	位 置
三重県齋宮跡調査事務所	多気郡明和町

(分掌事務)

第14条 3. 齋宮跡調査事務所においては次に掲げる事務をつかさどる。

一、齋宮跡の発掘並びに遺構及び出土品の調査研究に関すること。

二、齋宮跡に関する各種資料の収集調査及び研究並びに公開展示に関すること。

三、その他齋宮跡に関すること。

附則 (昭和54年3月21日、教育委)
(員会規則第6号抄)

この規則は、昭和54年4月1日から施行する。

IV 職 員

職	氏 名	備 考
所 長	佐々木 宣 明	文化課主幹兼務
主 査	山 沢 義 貴	
主 査	谷 本 鋭 次	
主 事	福 村 直 人	
主 事	倉 田 直 純	
事務補助員	森 本 敦 子	
"	刀 根 やよい	

V その他

(1) 齋宮跡調査指導委員

○設置要綱

1. 設 置

国史跡齋宮跡の調査と保存のための整備にかかる事業の円滑な推進を期するため、三重県教育委員会事務局に齋宮跡調査指導委員(以下「委員」という。)を置く。

2. 所掌事務

委員は、国史跡齋宮跡の調査、保存のための整備について、三重県教育委員会教育長の求めに応じて次の事項指導・助言する。

(1) 当史跡の遺構の調査、検討に関すること。

- (2) 当史跡の遺物の調査、検討に関する
こと。
- (3) 当史跡の文献の調査、検討に関する
こと。
- (4) 当史跡の環境整備の計画、検討に関
すること。
- (5) その他、当史跡の調査、保存のため
の必要事項に関すること。

3. 定 数 等

- (1) 委員の定数は、10人以内とする。
- (2) 委員は、考古学、歴史学、建築史学
などに関し専門的知識を有する者のう
ちから三重県教育委員会教育長が委嘱
する。

4. 任 期

任務が完了するまでの間とする。

5. 会 議

会議は、必要に応じ三重県教育委員会
教育長が招集する。

6. 庶 務

会議の庶務は、三重県教育委員会事務
局文化課において処理する。

7. そ の 他

この要綱に定めるもののほか、委員に
関し必要な事項は、三重県教育委員会教
育長が定める。

附 則

この要項は、昭和54年10月19日から施
行する。

○調査指導委員

氏 名	専 攻	現 職
福山敏男	建築史	(国)文化財保護審 議会専門委員
坪井清足	考古学	奈良国立文化財研 究所長
門脇禎二	古代史	京都府立大学教授
榎崎彰一	考古学 陶磁史	名古屋大学教授
服部貞蔵	考古学	(県)文化財保護審 議会委員
久徳高文	国文学	椋山女学園大学教 授
渡辺 寛	古代史	皇学館大学助教授

昭和58年度所内日誌

自 昭和58年4月1日
至 昭和59年3月31日

月 日	内 容
4月13日	斎王の森南水田へ野花ショウブ移植
25日	「斎宮跡保存管理計画」の見直しについて（文化庁・三重県・明和町の三者会議）……文化庁
5月6日	「斎宮跡保存管理計画」の見直しについて（三重県・明和町の協議）……津農協ビル
15日	陳情
16日	斎宮小学校プール基礎コンクリート撤去開始
21日	第48－2次発掘調査開始（住宅新築）
25日	第48 _上 －3次発掘調査開始（住宅新築）
27日	第48－2次発掘調査完了
30日	第48－4次発掘調査開始（住宅新築）
6月1日	第48－1次発掘調査開始（斎宮小学校プール）
1日	第48－3次発掘調査完了
2日	斎宮跡保存啓発事業（奈良県飛鳥村視察……明和町各界代表）
3日	第48－4次発掘調査完了
12日	斎宮跡地権者の会（全体会議）……明和町中央公民館
19日	第48－1次発掘調査 現地説明会（山沢主査報告）
23日	玉城町村山記念館展示指導
30日	第48－1次発掘調査完了
7月1日	第49次発掘調査開始（上園地区）
6日	斎宮跡地権者の会（役員会）……明和町中央公民館
12日	明和町寿大学において講演（山沢主査）
26日	第48－5次発掘調査開始（町道測溝）
31日	第48－5次発掘調査完了
8月18日	第50次発掘調査開始（東裏地区）
18日	第48－6次発掘調査開始（農業用倉庫の新築）
24日	斎宮跡保存啓発事業（体験発掘 24日～26日）
26日	第48－5次発掘調査開始
28日	鈴鹿市郷土史研究会において講演（山沢主査）
31日	斎宮跡に係る関係課長会議……三重県津庁舎
31日	第48－6次発掘調査完了

月 日	内 容
9月5日	第48－7次発掘調査開始（車庫の新築）
8日	「斎宮跡保存管理計画」の見直しについて（三重県・明和町の協議）……県庁
14日	斎宮百友会 斎王の森公園へベンチ寄贈
17日	第48－7次発掘調査完了
20日	斎宮跡地権者の会（役員会）……明和町中央公民館
26日	「斎宮跡保存管理計画」の見直しについて（三重県・明和町の協議）……県庁
10月1日	斎宮跡地権者の会（管理計画小委員会）……明和町中央公民館
3日	「斎宮跡保存管理計画」の見直しについて（三重県・明和町の協議）……県庁
7日	第49次発掘調査完了
11日	第48－8－1次発掘調査開始（整備場等の新築）
19日	昭和58年度港湾行政研究会において講演（佐々木所長）
20日	斎宮跡生活環境整備について協議（中勢南部県民局・明和町）……県松阪庁舎
29日	第48－8－2次発掘調査開始（農業用倉庫の新築）
31日	第48－8－3次発掘調査開始（盛土）
11月2日	第48－9次発掘調査開始（防火用水）
2日	明和町文化展に遺物貸出し
3日	第50次発掘調査 現地説明会（谷本主査報告）
3日	斎宮跡講演会「斎宮の姫君たち」 講師 梶山女学園大学教授久徳高文氏……明和町中央公民館
7日	第48－8－1、第48－8－2、第48－8－3発掘調査完了
14日	松阪市花岡歴史講座において講演（山沢主査）
18日	第51次発掘調査開始（西加座西地区）
18日	第48－9次発掘調査完了
19日	第50次発掘調査完了
20日	斎宮跡地権者の会（管理計画・環境整備小委員会合同会議）……明和町中央公民館
25日	大規模遺跡調査五県会議……東北歴史資料館
29日	第48－10次発掘調査開始完了（町道測溝）
12月5日	斎宮跡地権者の会（全体会議）……明和町中央公民館……保存管理計画の見直し、基本合意に達する。
13日	玉城町資料館運営会議……玉城町資料館
14日	斎宮跡調査指導委員会……明和町役場
15日	第48－11次発掘調査開始（農業用倉庫の新築）
19日	第52次発掘調査開始（西加座東）
21日	第48－11次発掘調査完了

月 日	内 容
1 月 5 日	第52次発掘調査開始（西加座東）
11 日	県議会文教委員視察
14 日	国学院大学日本文化研究所にて報告（山沢主査）
27 日	文化振興齋宮跡保存促進三重県議員連盟 難波宮跡・四天王寺視察
29 日	三重郷土史会において講演（倉田主事）
2 月 5 日	第51次、第52次 現地説明会（福村、倉田主事報告）
15 日	第48－12次発掘開始（住宅新築）
19 日	N H K 名古屋「15年をむかえる齋宮跡調査」放映
20 日	第48－13次発掘調査開始（齋宮小学校校舎）
21 日	第48－12次発掘調査完了
26 日	N H K 津「齋宮……神と人とのはざまにて」放映
28 日	第51次発掘調査完了
3 月 1 日	第48－14次発掘調査開始（町道測溝）
1 日	齋宮跡地権者の会（管理計画小委員会）……明和町中央公民館
5 日	第48－14次発掘調査完了
5 日	作業員旅行（名古屋市名鉄ホール）
7 日	齋宮跡調査指導委員会……明和町役場
11 日	齋宮跡地権者の会（役員会）……明和町中央公民館
14 日	第52次発掘調査完了
15 日	齋宮跡地権者の会（全体会議）……明和町中央公民館

掘立柱建物・柵列一覧表

S B	規 模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		時 期	備 考
					桁 行	梁 行		
第49次調査 (6 A D I - D . U . V . W . X)								
3010	(3)×2	N8°E	—	4.5	2.3	1.15	奈 良	
3008	3×2	E2°S	6.0	3.2	2.0	1.6	平安初	
3030	3×2	E15°S	5.7	3.3	1.9	1.65	平安末	
2994	4×2	E1°S	8.0	3.7	2.0	1.85	鎌倉後	北側に2間×1間の張り出しあり。 南東隅に土壇。柱掘形内に礎石。
3009	5	E10°S			2.0		奈 良	柵列
2999	4	E2°S			2.2		鎌倉後	"
第50次調査 (6 A C H - H)								
3059	—×2	E17°S	—	2.0	4.0	2.0	平安初	南面に廂 廂柱間2.35m
3060	5×2	E13°S	9.5	1.9	4.2	2.1	"	
3061	4×2	E10°S	7.6	1.9	4.2	2.1	"	
3063	4×2	E13°S	7.2	1.8	4.2	2.1	"	
3080	3×2	E13°S	6.3	2.1	4.3	2.15	"	
3081	—×2	E17°S	—	—	3.6	1.8	"	
3082	—×2	E13°S	—	1.2	3.6	1.8	"	
3086	5×2	N10°E	9.0	1.8	4.2	2.1	"	
3089	—×2	E17°S	—	—	4.6	2.3	"	
3064	2×2	E16°S	4.6	2.3	4.2	2.1	平安末	東西に廂・廂柱間2.15m
3071	3×4	N16°E	6.45	2.15	6.3	2.0	"	
3085	4×4	N16°E	8.9	2.15	6.3	2.0	"	
3087	3×2	E16°S	5.4	1.8	3.6	1.8	"	
第51次調査 (6 A F F - D)								
3114	(3)×2	E1°S	—	3.9	1.95	1.95	奈良末 平安初	S B 3117より新しい
3115	3×2	E0°	6.0	3.9	2.0	1.95	"	S B 3116より新しい
3116	3×2	E4°S	6.0	3.9	2.0	1.95	"	
3117	3×2	E4°N	5.6	3.8	1.87	1.9	"	S B 3115、S B 3118より 新しい
3118	(2)×2	E3°N	—	4.2	2.1	2.1	"	総柱建物 S K 3248より古い
3120	5×2	E4°N	12.0	4.9	2.4	2.45	"	S K 3124、S K 3125より古い S B 3116より新しい
3132	2×2	N3°W	3.3	3.0	1.65	1.5	"	総柱建物
3155	3×3	E1°N	6.4	5.8	2.13	1.93	"	"
3160	3×2	E3°N	6.1	3.6	2.03	1.8	"	S B 3155より新しい
3164	3×2	E2°N	5.7	3.8	1.9	1.9	"	
3171	3×2	E0°	6.1	3.7	2.03	1.85	"	S B 3120より古い
3173		E0°			2.55		"	柵列
3191	2×2	N4°W	3.5	3.4	1.75	1.7	"	総柱建物
3193	4×2	E2°N	7.6	4.2	1.9	2.1	"	S B 3191より新しい
3203	(2)×2	E0°	—	4.3	2.6	2.15	"	

S B	規 模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		時 期	備 考
					桁 行	梁 行		
3205	—×2	E3°N	—	3.8	—	1.9	奈良末 平安初	S B 3203より新しい S B 3206より新しい 北、南側柱列より1.7m離れ 雨落溝あり、S B 3217より古い
3206	(4)×2	E4°N	—	4.9	2.4	2.45	"	
3213	3×2	E4°N	5.9	4.2	1.97	2.1	"	
3220	3×2	E4°N	14.7	5.9	2.94	2.95	"	
3119	3×2	E4°N	6.3	4.2	2.1	2.1	平安前	S B 3155より新しい S B 3218より古い
3121	3×2	E4°N	6.2	4.1	2.07	2.05	"	
3154	5×2	E4°N	10.6	4.2	2.12	2.1	"	
3166	5×2	E4°N	10.7	4.3	2.14	2.15	"	
3201	3×2	E2°N	6.4	4.2	2.13	2.1	"	
3204	(2)×2	E3°N	—	3.7	1.9	1.85	"	
3214	3×2	N3°W	6.0	3.9	2.0	1.95	"	
3217	3×2	N5°W	5.9	3.9	1.97	1.95	"	
3240	(3)×—	E5°N	—	—	2.4	—	"	
3128	3×2	E10°S	6.0	4.0	2.0	2.0	平安中	S E 3134より古い S B 3191より新しい S K 3190より古い 北面、西面廂。西面廂柱間2.5m
3135	5×2	E10°S	9.9	3.9	1.98	1.95	"	
3172	5×2	E1°S	10.0	4.4	2.0	2.2	"	
3174	6×2	E0°	6.3	4.1	1.05	2.05	"	
3199	3×2	N2°E	5.7	4.2	1.9	2.1	"	
3218	4×3	N0°	5.8	4.3	1.93	2.15	"	
3237	(3)×2	E2°N	—	3.6	2.0	1.8	"	
3143	3×2	E4°S	6.4	3.6	2.13	1.8	平安後	
3153	4×2	E2°N	8.4	4.0	2.1	2.0	"	
3168	3×2	E4°N	6.4	4.1	2.13	2.05	"	
3192	3×2	E0°	6.1	4.4	2.03	2.2	"	
3209	(4)×2	E1°S	—	3.5	1.9	1.75	"	
3228	—×2	E0°	—	4.0	—	2.0	"	
3238	(2)×(2)	E3°N	—	—	1.8	1.9	"	
3144	3×2	E2°S	5.9	3.6	1.97	1.8	平安末	S B 3157より新しい S B 3144、S B 3149、S B 3150より新しい 総柱建物 S B 3209より新しい 北面、南面廂、廂柱間2.3m S B 3198より新しい
3147	3×2	E4°N	6.8	4.0	2.27	2.0	"	
3148	5×2	E2°S	10.7	4.0	2.14	2.0	"	
3149	3×2	E3°N	6.3	4.0	2.1	2.0	"	
3150	5×2	E2°N	10.0	3.9	2.0	1.95	"	
3151	5×2	E2°N	10.9	4.2	2.18	2.1	"	
3152	5×2	E2°N	10.6	4.0	2.12	2.0	"	
3157	2×2	E3°N	4.1	4.0	2.05	2.0	"	
3161	3×2	E2°N	6.1	3.8	2.03	1.9	"	
3183	3×4	E5°S	7.2	4.4	2.4	2.2	"	
3184	3×2	E3°S	6.3	4.2	2.1	2.1	"	
3198	3×2	E3°S	6.6	4.2	2.2	2.1	"	

S B	規 模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		時 期	備 考
					桁 行	梁 行		
3229	(2)×2	E3°N	—	4.0	2.1	2.0	平安末	S B 3229より新しい S B 3233、S B 3241より新しい S B 3231より新しい 総柱建物
3230	(2)×2	E3°S	—	3.5	2.1	1.75	"	
3231	(3)×2	E2°S	—	4.1	2.1	2.05	"	
3233	(4)×2	E4°N	—	4.0	2.1	2.0	"	
3234	(4)×2	E3°N	—	3.9	1.93	1.95	"	
3235	(3)×2	E0°	—	3.6	2.1	1.8	"	
3236	3×2	E3°S	6.4	4.3	2.13	2.15	"	
3239	(4)×—	E4°N	—	—	1.93	—	"	
3241	3×(3)	E3°N	6.4	—	2.13	2.1	"	
3242	(5)×2	E2°N	—	4.1	2.05	2.05	"	

第52次調査 (6 A G F—D・E)

3249	—×2	N5°W	—	3.8	—	1.9	平安前	
3250	3×(2)	E2°N	5.7	—	1.9	2.1	"	
3251	3×(2)	E0°	5.7	—	1.9	1.9	"	
3252	3×2	E4°N	6.0	4.0	2.0	2.0	"	
3253	(2)×2	E3°N	—	4.8	2.1	2.4	"	
3256	2×2	N2°W	5.6	3.6	2.8	1.8	"	
3257	5×2	E3°N	11	4.8	2.2	2.4	"	
3255	3×2	N3°E	5.7	3.6	1.9	1.8	平安中	
3259	3×2	E1°S	5.1	3.8	1.7	1.9	"	

第48—1次調査 (6 A C M—M)

2944	3×2	N12°W	6.3	4.2	2.1	2.1	奈 良	南北に2.2mの廂
2950	4×4	E10°S	8.4	8.6	2.1	2.1	平安後	

第48—2次調査 (6 A D P—Q)

3270	(-)×(2)	E10°S	—	4.2	—	2.1	平安後	
------	---------	-------	---	-----	---	-----	-----	--

第48—5次調査 (6 A G D～6 A F E)

3288	—×3	E2°N	—	6.3	—	2.1	平安中	
------	-----	------	---	-----	---	-----	-----	--

第48—6次調査 (6 A G C—A)

3302	(3)×(-)	N3°E	—	—	2.1	—	平安中	
------	---------	------	---	---	-----	---	-----	--

第48—7次調査 (6 A D T—H)

3313	(2)×2	N7°W	—	4.2	2.0	2.1	平安前	
3311	(3)×(2)	N0°	—	4.2	2.1	2.1	平安後	
3310	(-)×2	N0°	—	3.7	—	1.85	平安末	

第48—8次調査 (6 A C L—E・F・G)

S A 3319		E10°E			1.95		江 戸	柵列
----------	--	-------	--	--	------	--	-----	----

第48—9次調査 (6 A E V—J)

3330	(2)×(2)	E7°N	—	—	2.4	2.4	平安後	
------	---------	------	---	---	-----	-----	-----	--

第48—11次調査 (6 A C P—E)

3342	(3)×2	E3°N	(-)	4.8	2.4	2.4	奈 良	
------	-------	------	-----	-----	-----	-----	-----	--

S B	規 模	棟方向	桁行(m)	梁行(m)	柱間寸法(m)		時 期	備 考
					桁 行	梁 行		
3343	(2)×2	E7°N	(-)	4.2	2.1	2.1	奈 良	
3344	(2)×2	E3°N	—	4.8	2.4	2.4	"	
3346	(-)×2	E1.5°N	—	3.5	—	1.75	"	
3348	(3)×2	E7°N	—	4.0	1.8	2.0	"	
3349	(4)×(2)	E1.5°N	—	—	1.6	2.3	"	

第48—12次調査 (6 A F C—H)

3353	—×(2)	E6°N	—	—	—	2.4	奈 良	
3360	(-)×(2)	N0°	—	—	—	1.8	平安中	

第48—13次調査 (6 A C M—O)

3367	4×2	E1°N	8.2	4.1	2.05	2.05	平安末	
3379	(4)×(2)	E4°S	4.8	—	1.6	1.5	平安後	

第48—14次調査 (6 A E T)

3401	(-)×3	E4°S	—	4.4	—	1.4	不 明	東に1.6mの廂
------	-------	------	---	-----	---	-----	-----	----------

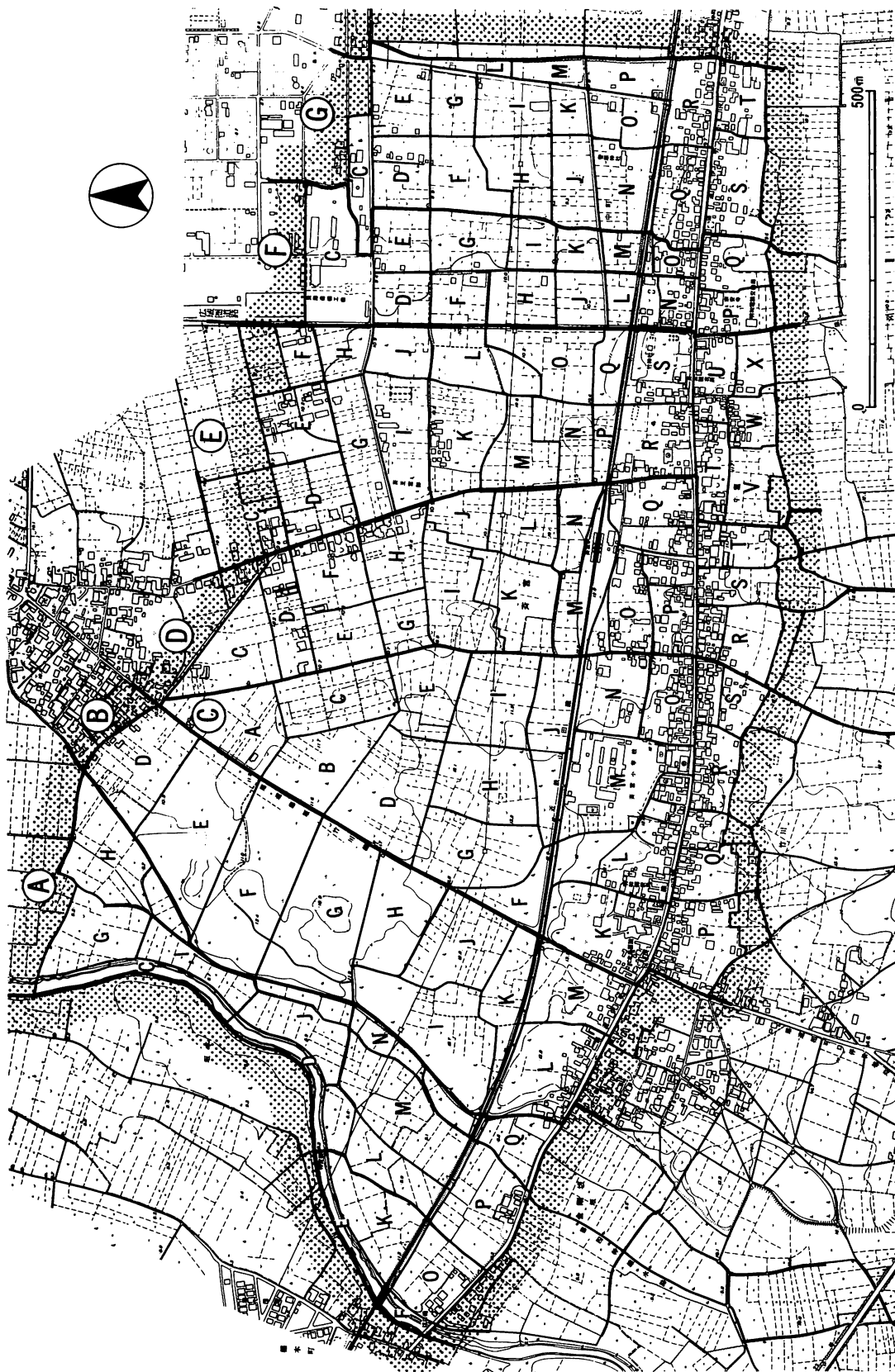
竪穴住居一覧表

S B	規模(m)	長軸方向	深さ(cm)	柱 穴	カマド	時 期	備 考
第49次調査 (6 A D I - D . U . V . W . X)							
2998	4.0×3.5	N 20°E	20		東 壁	奈良初	
2997	4.0×2.7	E 10°S	28		〃	奈良後	
3007	3.5×3.0	N 10°E	10		〃	平安初	
第50次調査 (6 A C H - H)							
3058	3.1×-	N 43°E	21			奈 良	
3065	4.1×3.2	N 11°E	22		東 壁	〃	
3077	3.6×3.2	N 4° W	25		〃	〃	
3083	2.7×2.4	N 24°E	10			〃	
3092	3.9×3.2	E 20°S	20		北 壁	〃	
3093	-×4.0	N 15°E	28	○	東 壁	〃	
3057	3.6×2.7	N 16°E	45			鎌 倉	
3067	3.8×3.7	E 15°S	30			〃	
第51次調査 (6 A F F - D)							
3113	4.2×4.2	E 8° N	40	○	東 壁	奈 良	
第52次調査 (6 A G F - D . E)							
3254	3.3×3.1	N 4° E	23		東 壁	平安初	
第48-1次調査 (6 A C M - M)							
2940	5.5×3.8	N 5° E	22			奈 良	
2943	2.3×2.3	E 16°N	17		東 壁	〃	
2947	4×3.1	N 15°W	26		〃	〃	
2948	-×-	E 13°N	36			〃	
2952	5.2×2.7	E 3° S	16		東 壁	〃	
2957	4.6×3.5	N 15°W	23		〃	〃	
2960	3.5×3.2	E 0°	9			〃	
第48-6次調査 (6 A G C - A)							
3303	2.7×-	N 7° W	12		東 壁	奈 良	
第48-8次調査 (6 A C L - E . F . G)							
3325	3.0×-	N 19°E	19			不 明	
第48-11次調査 (6 A C P - E)							
3340	4.3×-	N 7° W	25		東 壁	奈 良	
3350	3.3×-	N 7° W	18			〃	
第48-13次調査 (6 A C M - O)							
3370	4.0×(-)	N 30°W	25			奈 良	
3373	3.4×(-)	N 36°E	12			〃	
3381	4.2×3.2	N 9° E	26			〃	
3383	3.0×(-)	N 30°W	20			〃	
3385	3.0×-	N 7° W	10			〃	
3390	(-)×(-)	N 29°W	13			〃	
3391	2.3×(-)	N 16°W	15			〃	

斎宮跡発掘次数一覧表

次	年度	調 査 地 区	次	年度	調 査 地 区
1	45	試掘	13-4	51	楽 殿2916～2917 (松井)
2	46	古里A地区	13-5	"	御 館2974-1 (川本)
3	"	" B地区	13-6	"	中垣内 375-1 (南)
4	47	" C地区	13-7	"	東裏 328 (小川)
5	48	" D地区	13-8	"	西加座2771-1 (細井繁久)
6-1	"	Aトレンチ	13-9	"	" 2773 (細井国太郎)
6-2	"	Bトレンチ	13-10	"	東裏363-1、362-1 (児島)
6-3	"	Cトレンチ	13-11	"	西加座2681-1 (浮田)
6-4	"	Dトレンチ	13-12	"	" 2721-3、2724-2 (森川)
6-5	"	Eトレンチ	13-13	"	東前沖2506-2 (宮下)
7	49	古里E地区	14-1	52	2 E トレンチ
8-1	"	F トレンチ	14-2	"	2 F トレンチ
8-2	"	G トレンチ	14-3	"	2 G トレンチ
8-3	"	H トレンチ	14-4	"	2 H トレンチ
8-4	"	I トレンチ	14-5	"	2 I トレンチ
8-5	"	J トレンチ	15	"	斎宮小学校
8-6	"	K トレンチ	16-1	"	竹川町道A
8-7	"	L トレンチ	16-2	"	" B
8-8	"	M トレンチ	16-3	"	" C
8-9	"	N トレンチ	16-4	"	" D
8-10	"	O トレンチ	16-5	"	" E
8-11	"	P トレンチ	16-6	"	" F
9-1	50	Q トレンチ	17-1	"	竹神社社務所
9-2	"	R トレンチ	17-2	"	竹神社防火用水
9-3	"	S トレンチ	17-3	"	西加座2721-6 (西沢)
9-4	"	T トレンチ	17-4	"	楽 殿2894-1 (中川)
9-5	"	U トレンチ	17-5	"	" 2895-1 (西口)
9-6	"	V トレンチ	17-6	"	出在家3237-3 (吉川)
9-7	"	W トレンチ	17-7	"	" 3237-1 (里中)
9-8	"	X トレンチ	17-8	"	楽 殿2894-1 (西村)
9-9	"	Y トレンチ	17-9	"	東海造機
9-10	"	Z トレンチ	18	53	6 A E L-E・I (下園)
10	"	広域圏道路	19	"	6 A E N-M・N・O (御館)
11-1	"	西加座2661-1 (山中)	20	"	6 A E O-I・J (柳原)
11-2	"	" 2681-1 (山名)	21-1	"	6 A G N-B (鍛治山、中山)
11-3	"	東前沖2483-2 (前田)	21-2	"	6 A F I-D (西加座2711-2、2717-4 他山路)
11-4	"	下 園2926-9 (吉木)	21-3	"	6 A F D-D (西前沖2649-1 大西)
12-1	51	2 A トレンチ	21-4	"	6 A F H-F (西加座2678、2679-3 森下)
12-2	"	2 B トレンチ	21-5	"	6 A G D-K (東前沖、渡部)
12-3	"	2 C トレンチ	21-6	"	6 A C A-T (古里3269-2、中西)
12-4	"	2 D トレンチ	21-7	"	6 A F E-F (東前沖2631-1 鈴木)
13-1	"	東加座2436-7 (浜口)	21-8	"	6 A E G-A (楽殿2909-3 大西)
13-2	"	" 2436-4 (中村)	21-9	"	6 A E D-R (篠林3218-3 宇田)
13-3	"	古 里3283 (村上)	22-1	"	6 A G U

次	年次	調 査 地 区	次	年度	調 査 地 区
22-2	53	6AGU	37-5	56	6AFC-G(西前沖2604-7、中村)
22-3	"	6AGW	37-6	"	6ABD-A(古里588-2、北藪)
23	54	6AEL-B(下園)	37-7	"	6AEC-M(荊干2861-2、斎王公民館)
24	"	6AGF-D(西加座)	37-8	"	6ADR-P(木葉山128-8、13、14、富山)
25-1	"	6ADP-K(牛葉3029-1、三重土地ホーム)	37-9	"	6AGK-E(東加座2355-1、竹内)
25-2	"	6ACA-Y(古里3270、脇田)	37-10	"	6AED-O(楽殿3217-1、渡辺)
25-3	"	6ADD-F(篠林3139-3、池田)	37-11	"	6ADN-O(内山3043-3、斎宮駅)
25-4	"	6AER-H(牛葉3014、牛葉公民館)	37-12	"	6AFH-J(西加座2681-1、3、4、渋谷)
25-5	"	6AGN-H(鍛冶山2392、丸山)	37-13	"	6AGK-F(東加座2385-3、2386-3、竹内)
25-6	"	6AFH-A(西加座2675-5、谷口)	38	"	6ACD-S(塚山)
25-7	"	6AEK-V(下園2926-10、奥田)	39	"	6ABD-R・S・T(古里)
25-8	"	6AFC-D(西前沖2064-5、山本)	40	"	6AGH-L・M(東加座)
25-9	"	6ACN-C(広頭3387-1、北出)	41	"	6AGJ-J他(斎宮地内)
25-10	"	6AEV-A(鈴池339-1、永島)	42-1	57	6AEI-D・F(楽殿)
25-11	"	6ACF-B(東裏364-1、沢)	42-2	"	6AEK-A・B(楽殿)
25-12	"	6AEE-Y(楽殿2892-3、山本)	43-1	"	6ADC-C(出在家3235-2、永田)
25-13	"	6AFJ-E(西加座2766-1、山内)	43-2	"	6ADT-B(木葉山308-1、山本)
26-1	"	6AFR(中西)	43-3	"	6ACP-T(南裏241-1、辻)
26-2	"	6AEX~6ACQ(鈴池、木葉山、南裏)	43-4	"	6ADS-D(牛葉123-3、西山)
26-3	"	6AEV・W・X(鈴池)	43-5	"	6ADE-D(篠林3220-3、澄野)
26-4	"	6ACR(木葉山・南裏)	43-6	"	6AGE(東前沖、町道側溝)
27	"	6ACG-S・T(東裏)	43-7	"	6ABD-F(古里588-6、今西)
28	"	6AEO-D(柳原)	43-8	"	6ADQ-H(牛葉3025-2、大西)
29	"	6AFI、6AFL、6AFK、6AFM、6AGJ	44	"	6ADP-A・B(鍛冶山2759-1、他)
30	55	6ABJ-M・X・W(中垣内)	45	"	6AEG-P・Q(楽殿2904-2、他)
31-1	"	6ADO-M(内山3038-13、岩見)	46	"	6AGN-C・D(鍛冶山2737-1、他)
31-2	"	6ACP-I(南裏227-2、鈴木)	47	"	6ADJ-D・G他(西加座、御館、宮之前、上園)
31-3	"	6ABD-A(古里588-4、北藪)	48-1	58	6ACM-M(広頭3385)
31-4	"	6ADQ-T(牛葉3018-2、百五銀行)	48-2	"	6ADP-Q(牛葉3033-1・2、吉田)
31-5	"	6ACC-G(塚山3338-3、水谷)	48-3	"	6ABL-M(中垣内434-6、西川)
31-6	"	6ABO-X(古里576-1、池田)	48-4	"	6AGL-B(東前沖2480、倉田)
31-7	"	6AGI-L(東加座2427-1、竹内)	48-5	"	6AGD~6AFE(東前沖、町道側溝)
31-8	"	6ACN-G(広頭3388-1、5、8、9、森)	48-6	"	6AGC-A(西前沖3550-1、今西)
31-9	"	6AGD-L(北野2487-1、中川)	48-7	"	6ADT-H(木葉山307、森西)
31-10	"	6ADM-O(内山3043-3、斎宮駅)	48-8	"	6ACL-E・F・G(東裏334-15、他)
31-11	"	6ADT-I(木葉山304-2、澄野)	48-9	"	6AEV-J(鈴池341-1、乾)
31-12	"	6ADT-J(木葉山304-7、宇田)	48-10	"	6ADT(牛葉、町道側溝)
32	"	6ACE-D・E・F(塚山)	48-11	"	6AGP-E(鍛冶山3352-1、柳原)
33	"	6ADE-C・D他(篠林)	48-12	"	6AFC-H(西前沖2604-8・9、清水)
34	56	6AFK-F・G・H(西加座)	48-13	"	6ACM-O(東裏)
35	"	6APE他(西前沖)	48-14	"	6AET(牛葉、町道側溝)
36	"	6ABI-F(中垣内)	49	"	6ADI-D・U・V・W・X(上園3083、他)
37-1	"	6AFC-M(前沖2604、日本経木)	50	"	6ACH-H(東裏294、297、山本)
37-2	"	6ADQ-R(牛葉3021-2、野田)	51	"	6AFF-D(西加座3883-1・4、森下)
37-3	"	6AFC-F(西前沖2604-6、押田)	52	"	6AGF-D(西加座2703、他)
37-4	"	6AFC-M(西前沖2604、日本経木)			



齋宮跡地区表示

図 版



第49次調査全景 (北から)



第51次調査全景 (北西から)



第51次調査全景 (西から)



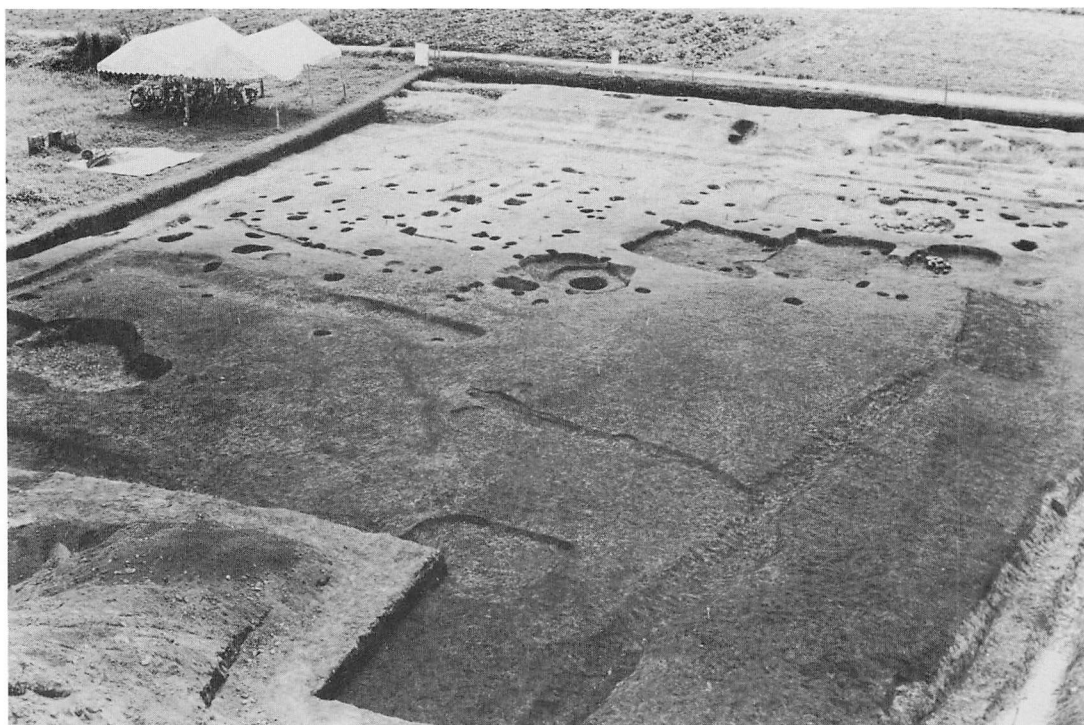
第52次調査全景 (西から)



全 景 (西から)



北部全景 (東から)



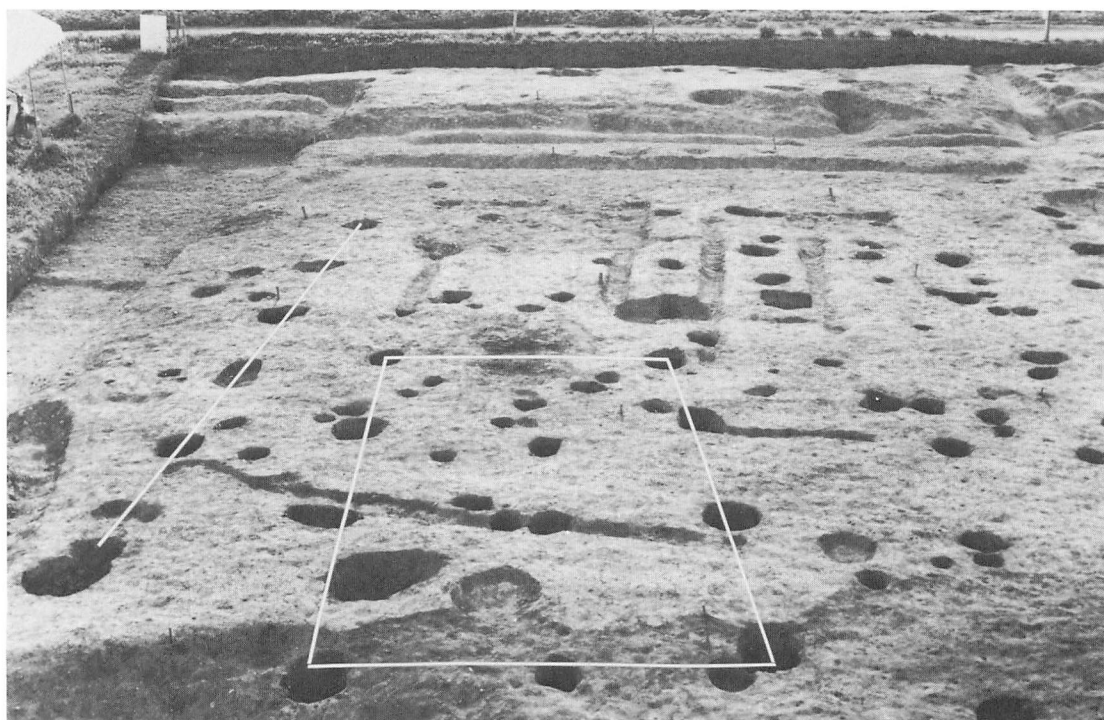
南部全景 (東から)



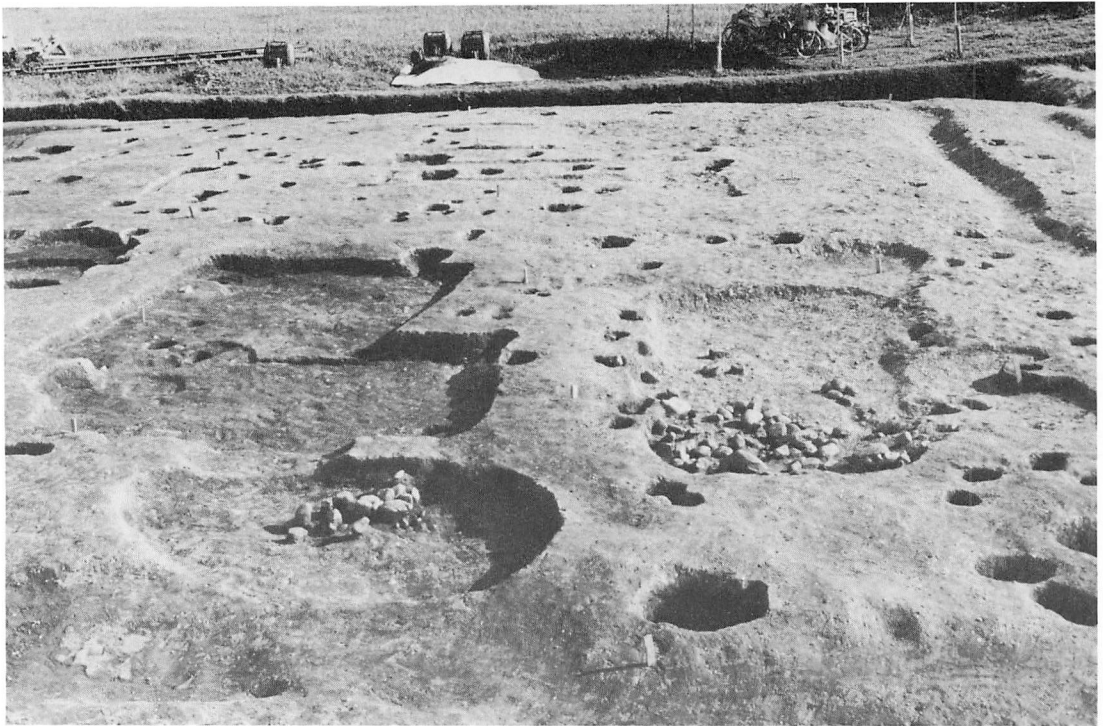
SD170 (西から)



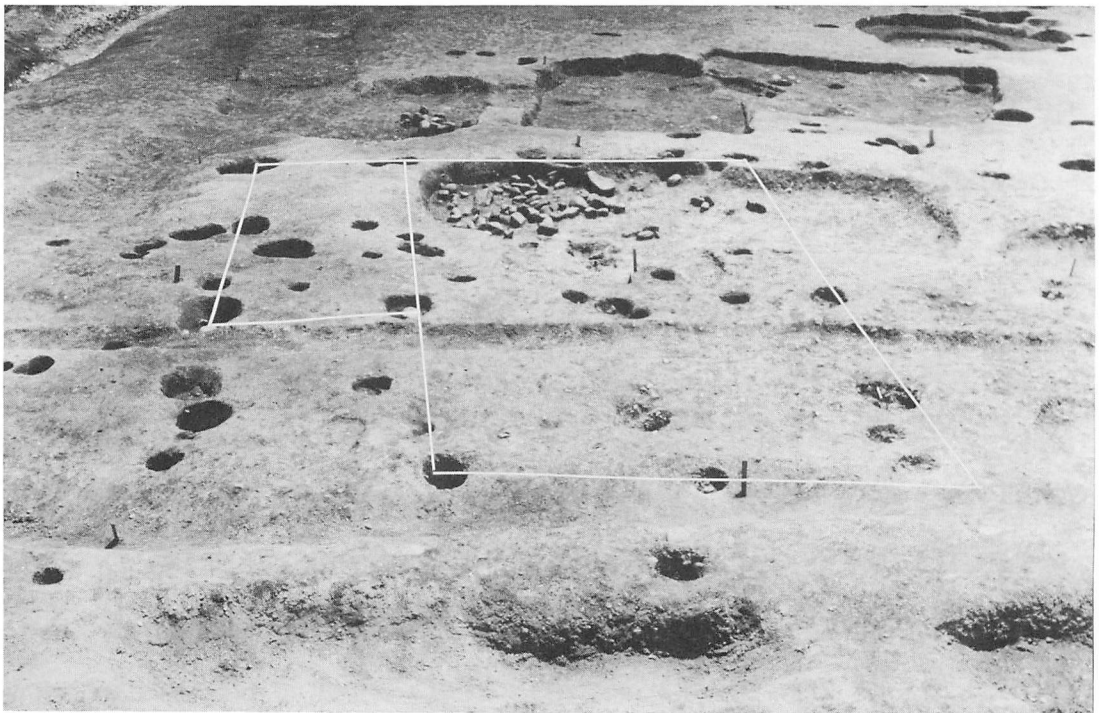
S B 2997 ・ S B 2998 ・ S E 3003 ・ S K 3004 (西から)



S B 3008 ・ S A 3009 (東から)



S K 2995 ・ S K 2996 ・ S B 2997 ・ S K 2998 （北から）



S B 2994 （西から）



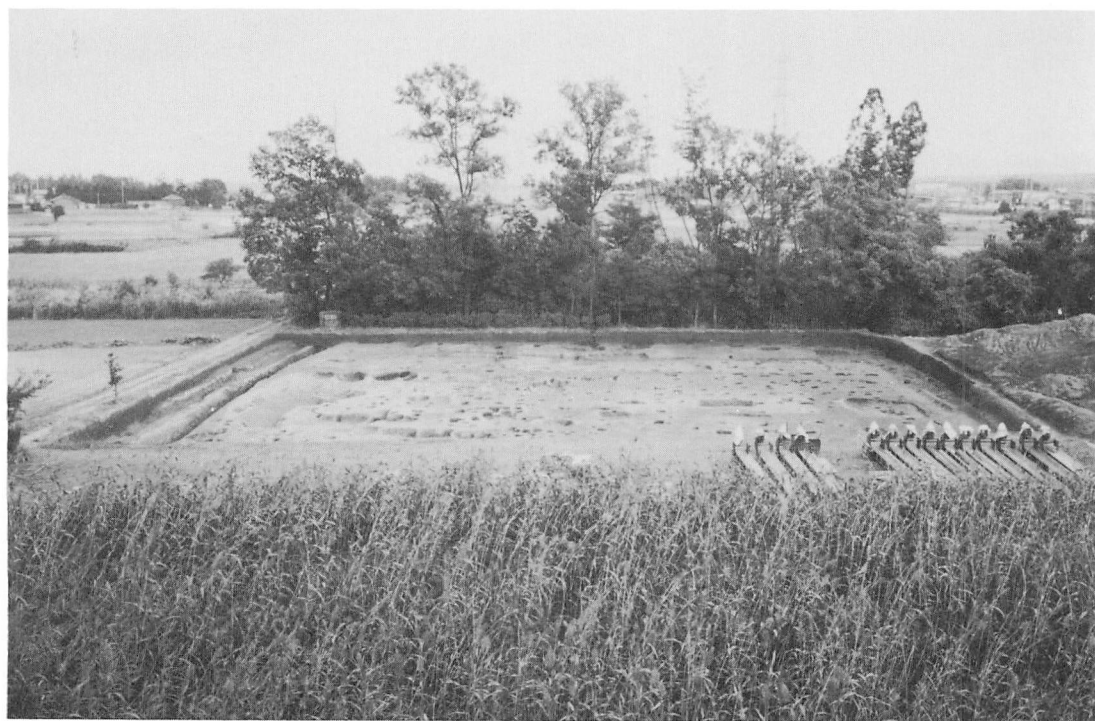
S K 2982・S K 2983 (東から)



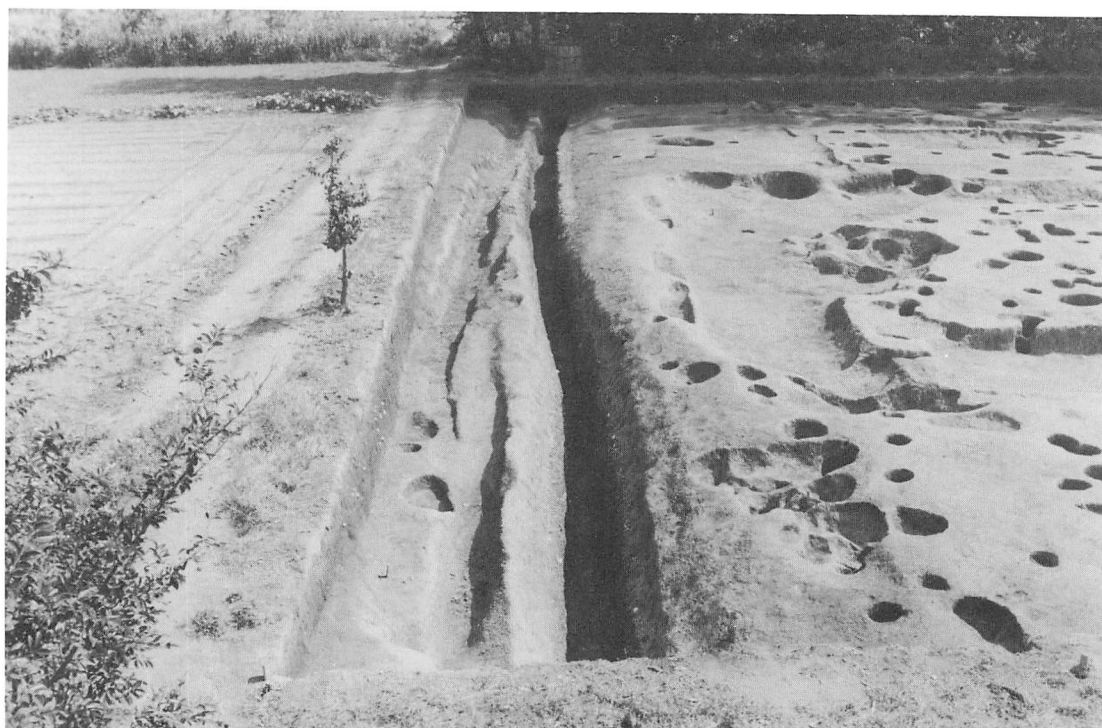
S X 2990 (北から)



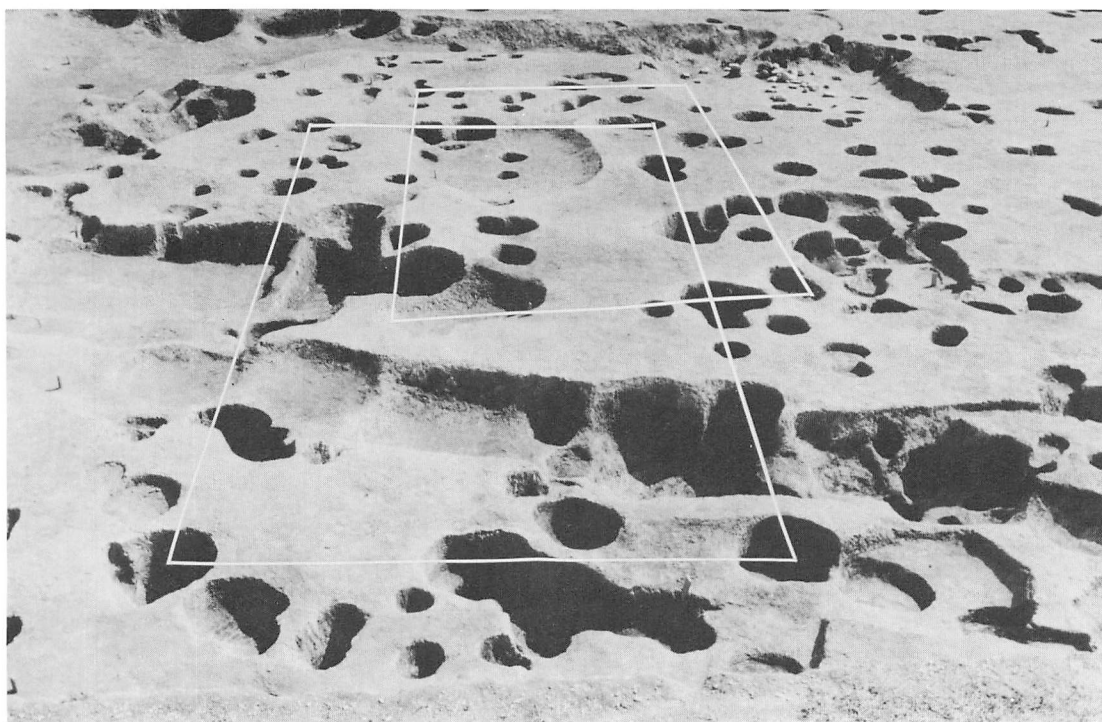
全 景 (北西上空から)



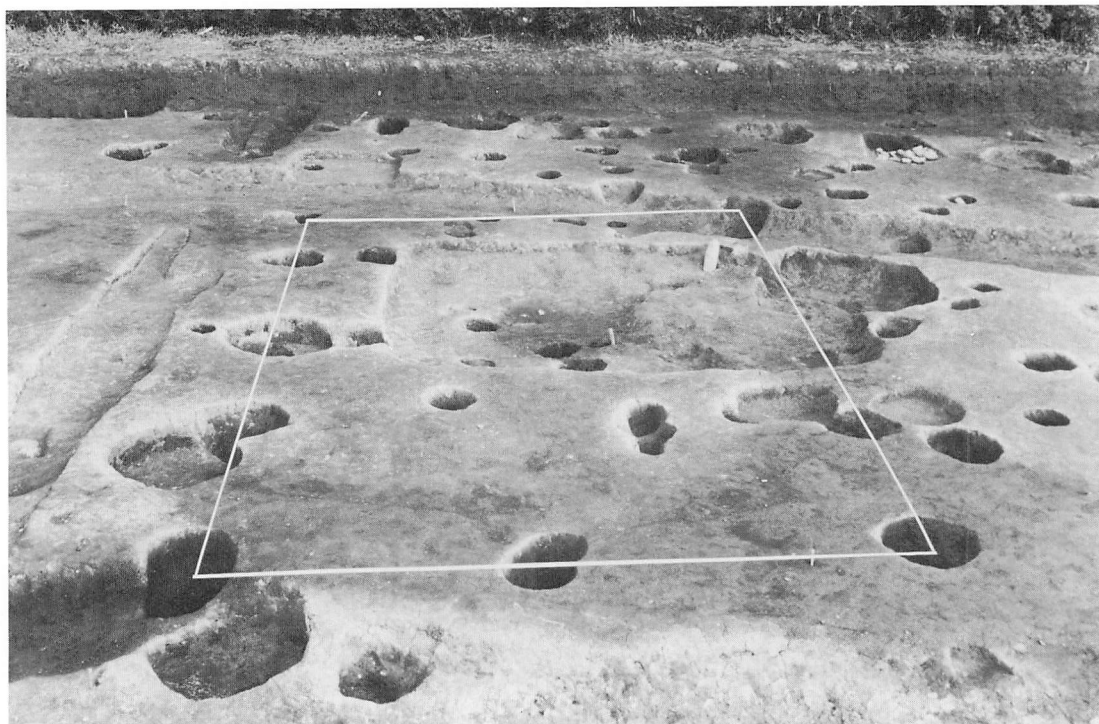
全 景 (西から)



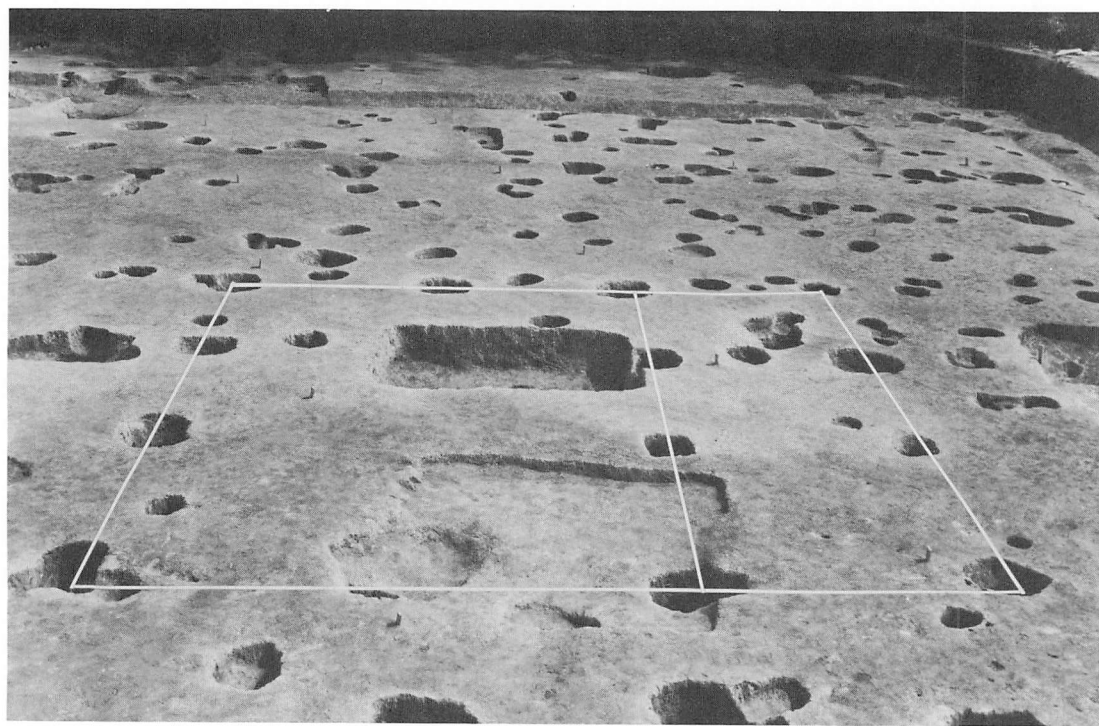
S D 170 (西から)



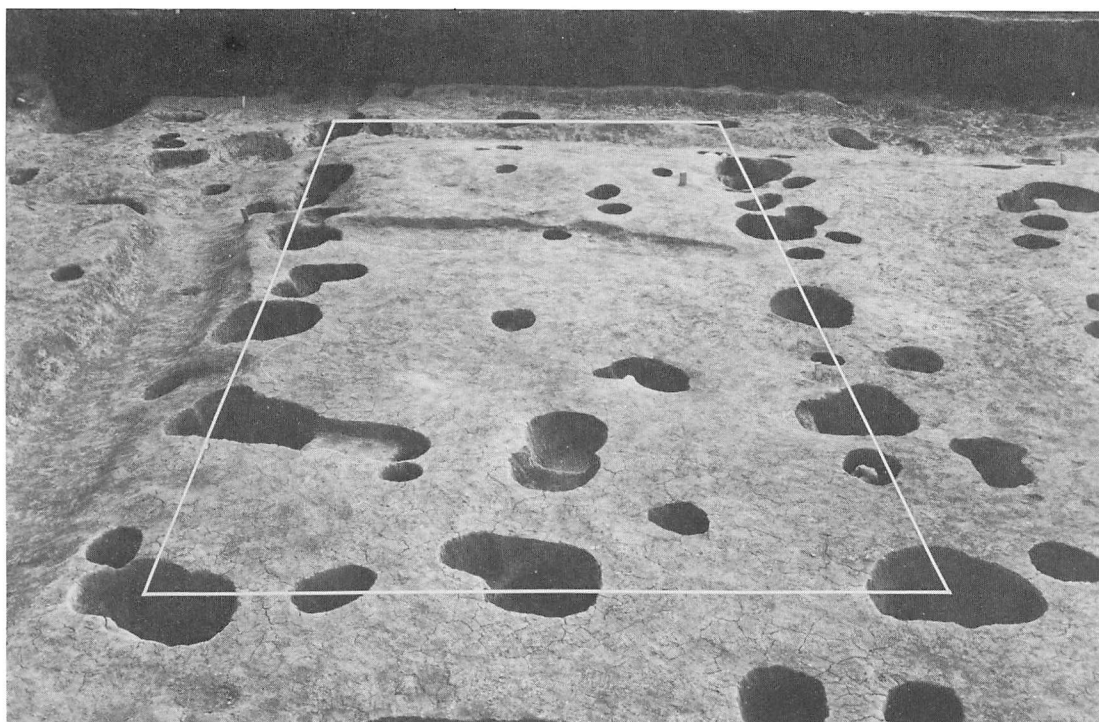
S B 3060 ・ S B 3061 (西から)



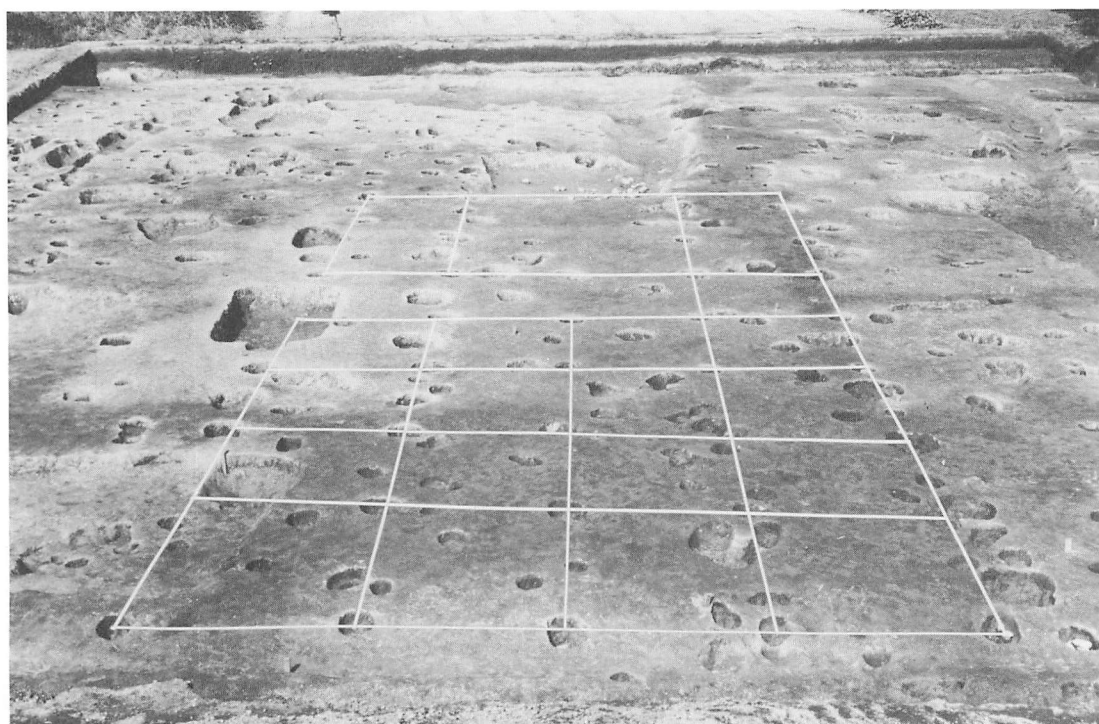
S B 3063 (西から)



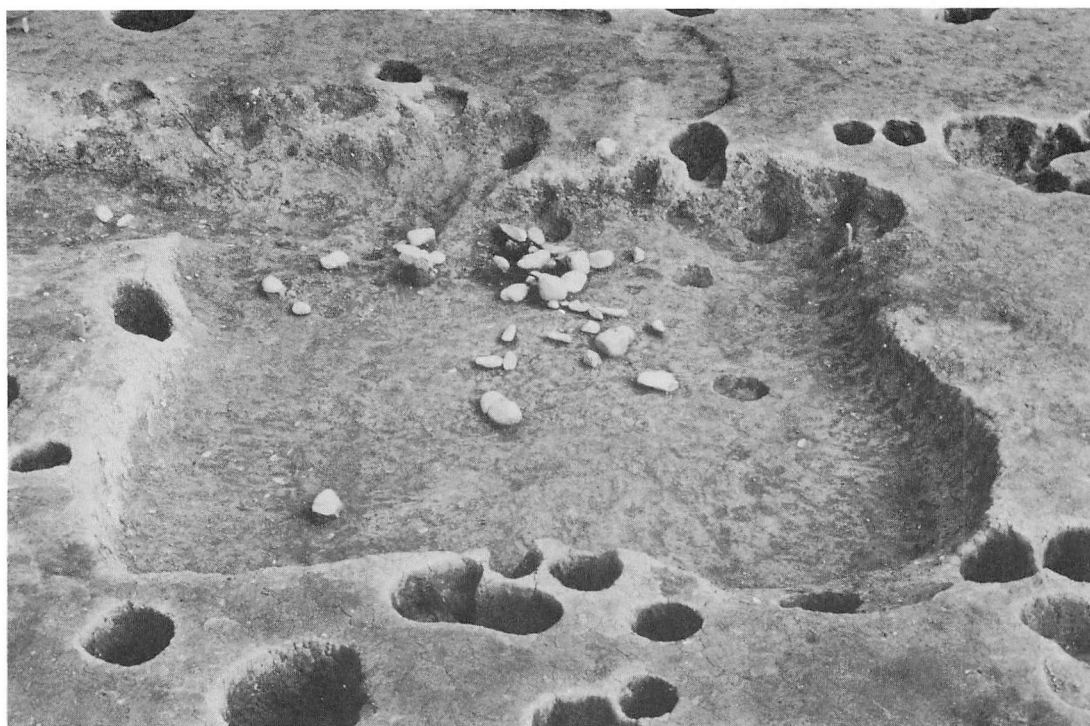
S B 3080・S B 3083・S X 3084 (西から)



S B3086 (北から)



S B3071・S B3085 (南から)



S B 3067 (西から)



S D 3052 (北から)



東部全景 (北から)



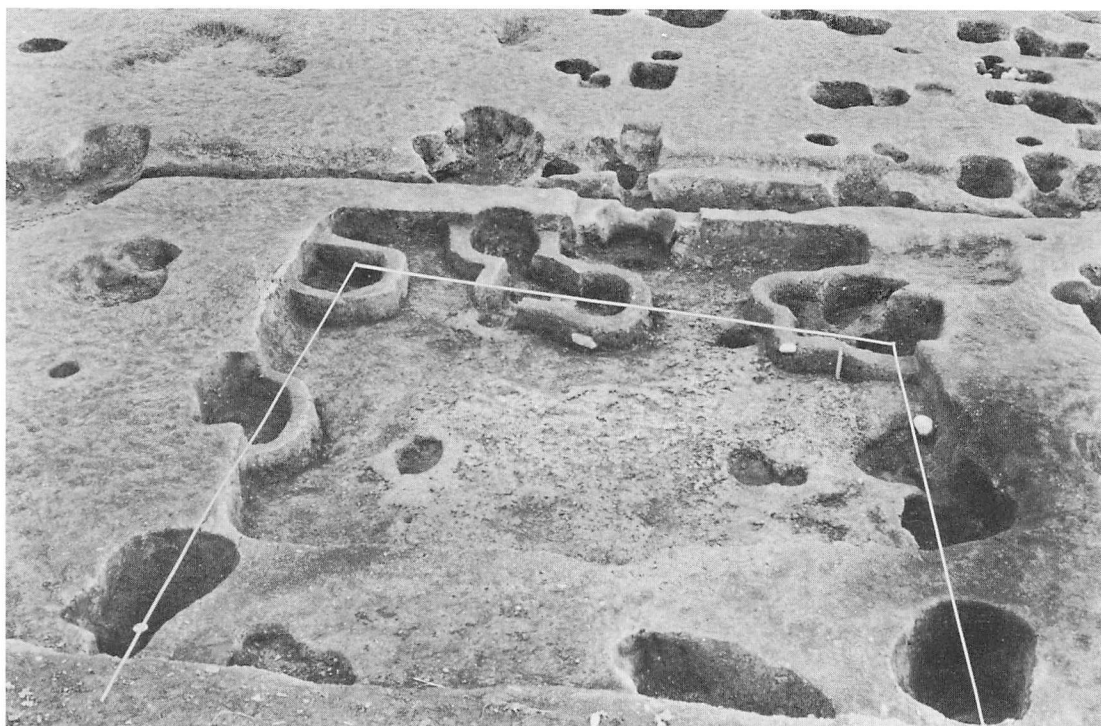
西部全景 (北から)



全 景 (南東から)



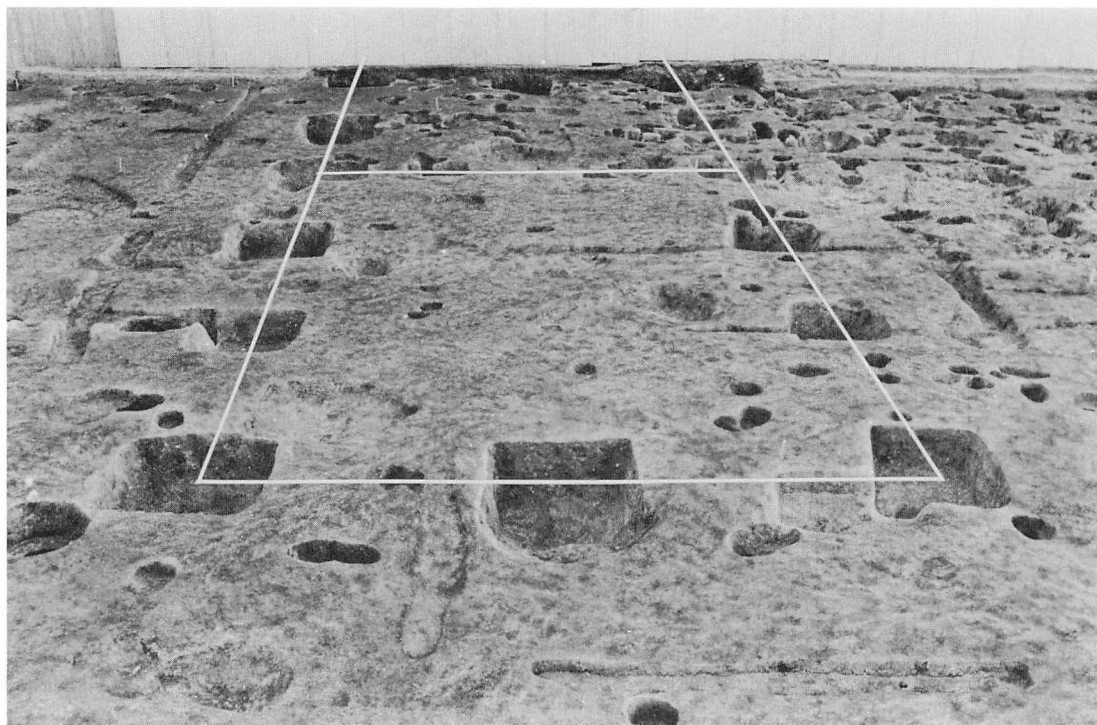
西南部分 (西から)



SB3113・SB3114 (西から)



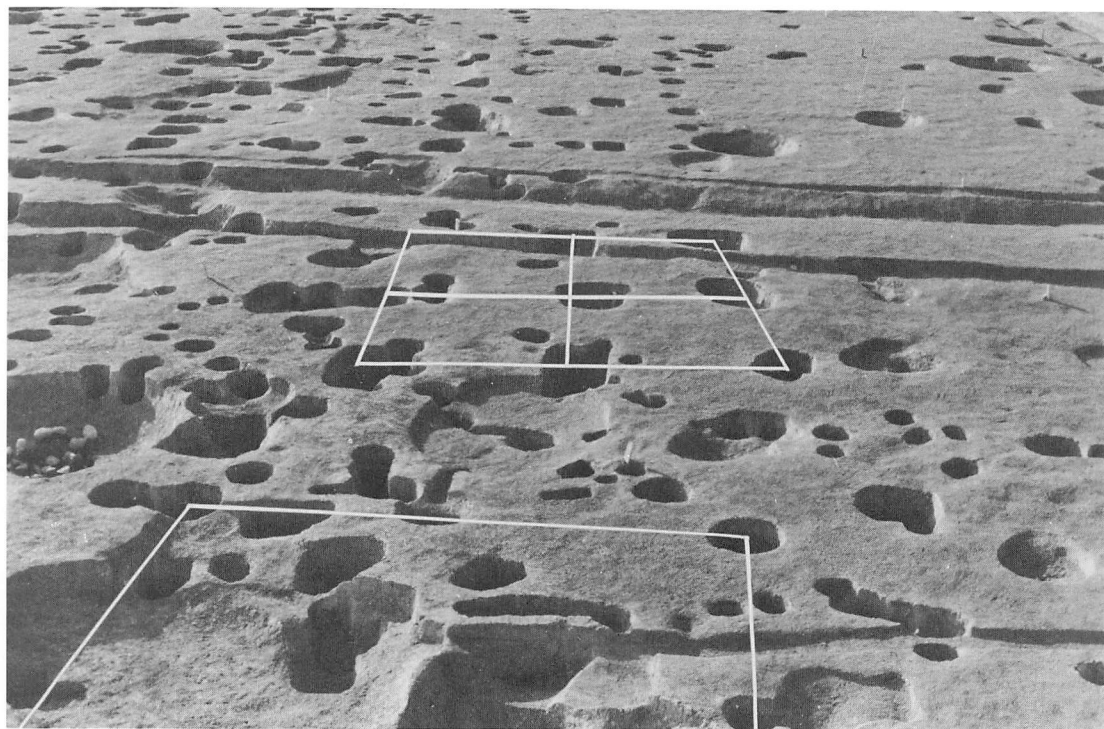
SD291 (東から)



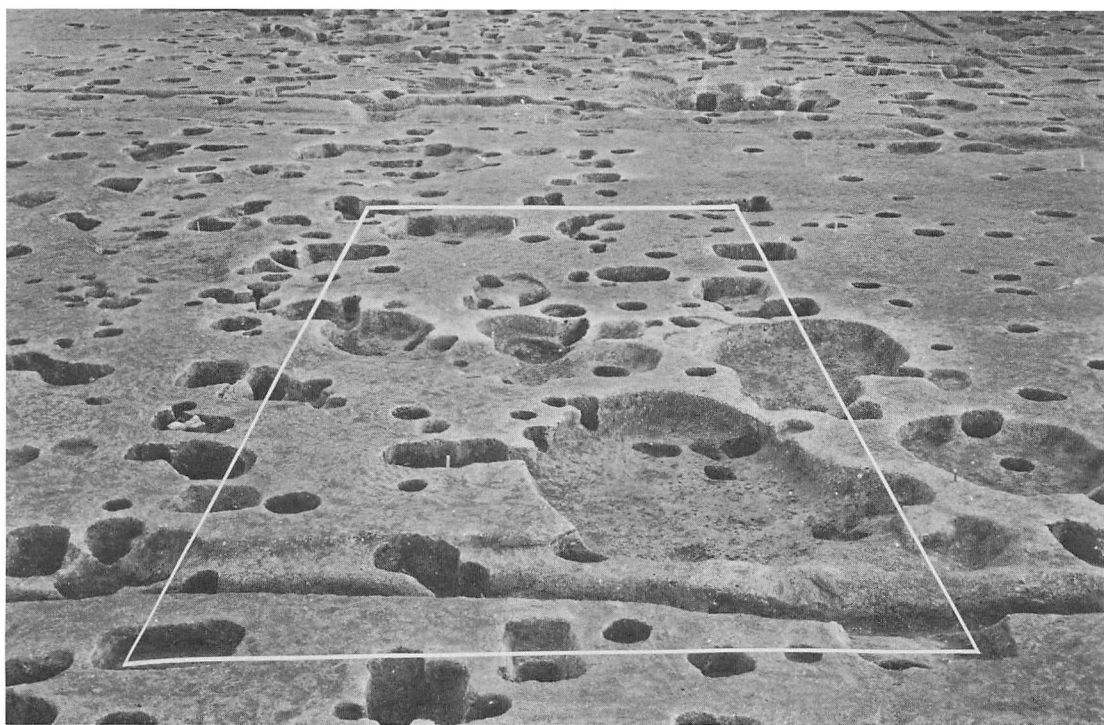
S B 3220 (西から)



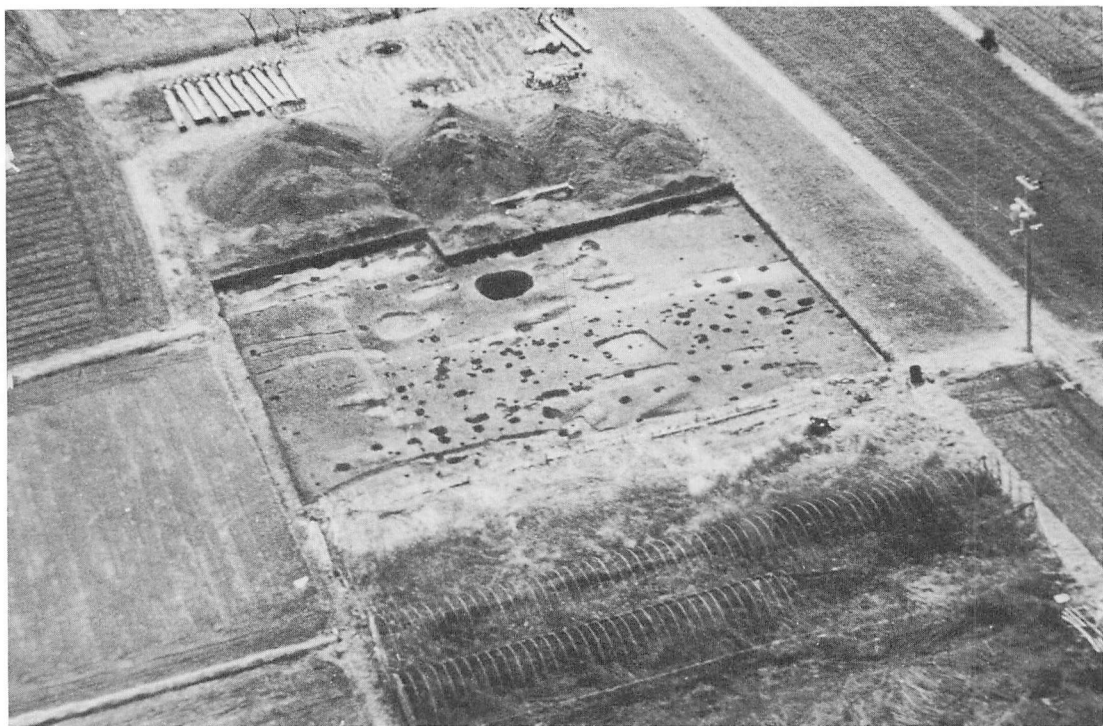
S B 3120・S B 3116 (北から)



S B 3191・S B 3184 (東から)



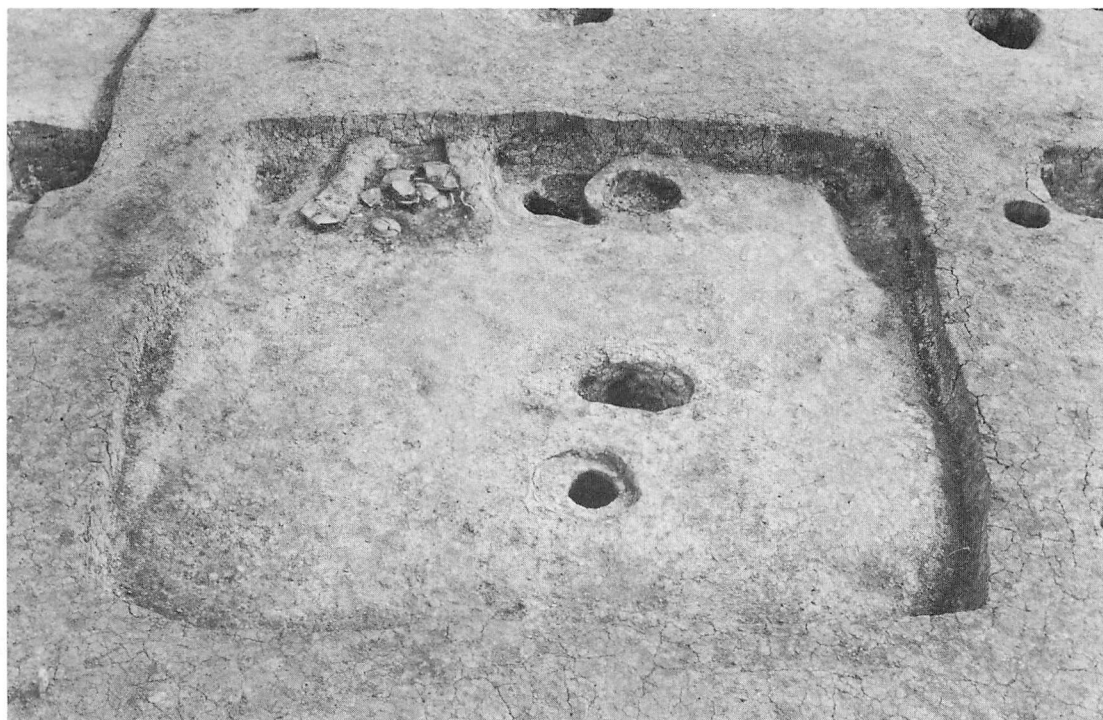
S B 3120 (西から)



全 景 （北上空から）



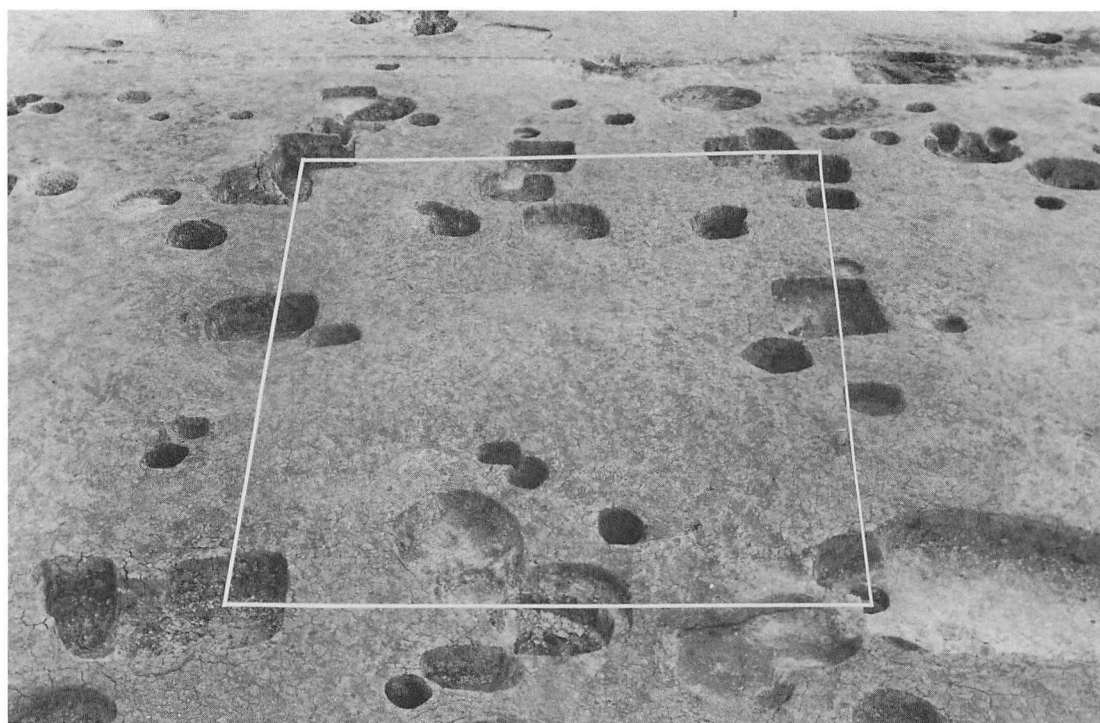
全 景 （西から）



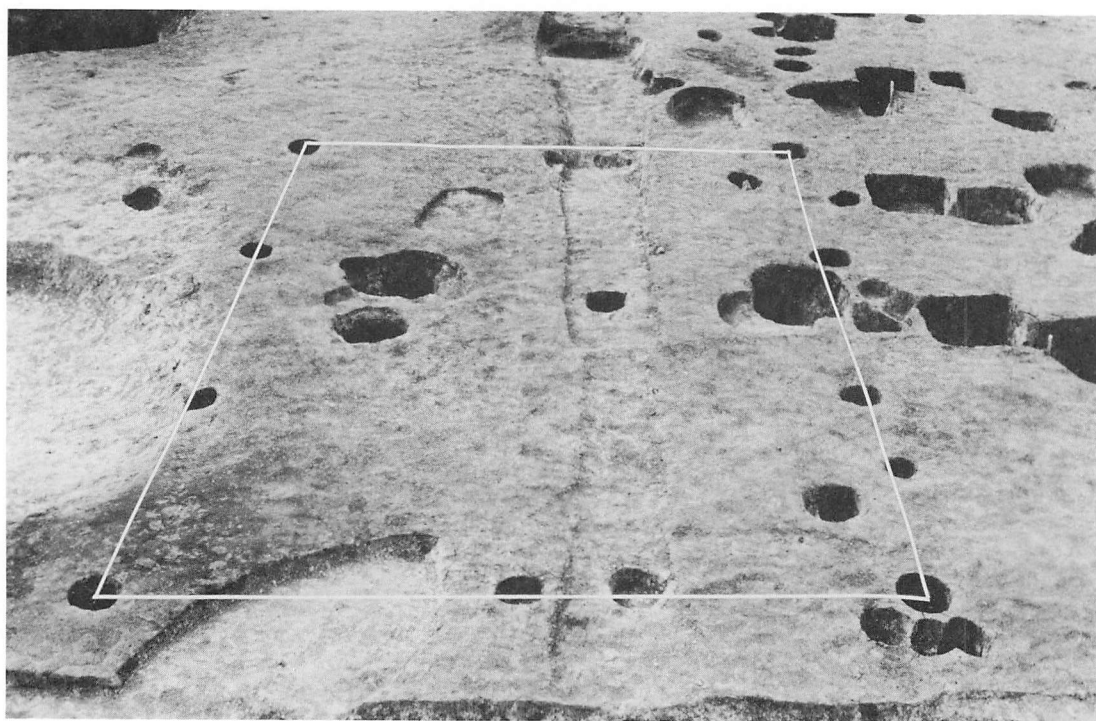
S B 3254 (西から)



S B 3255・S B 3257 (西から)



S B 3256 (北から)



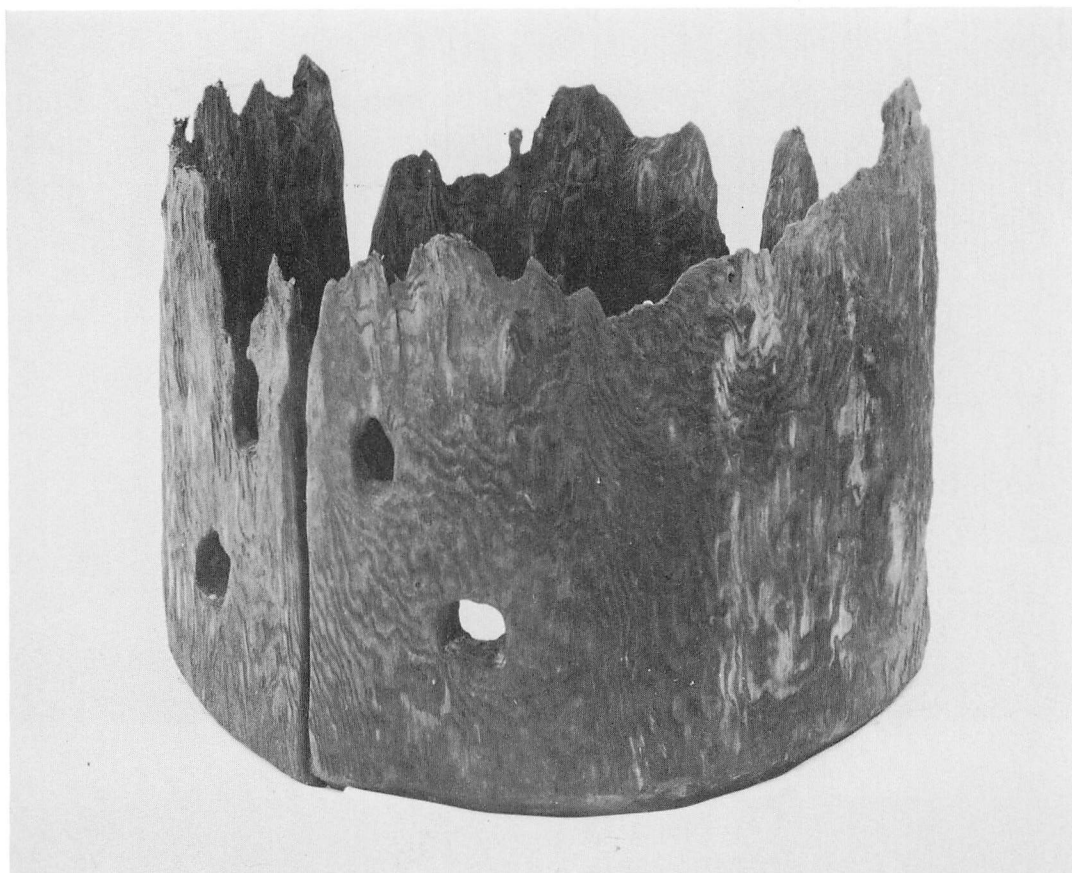
S B 3259 (東から)



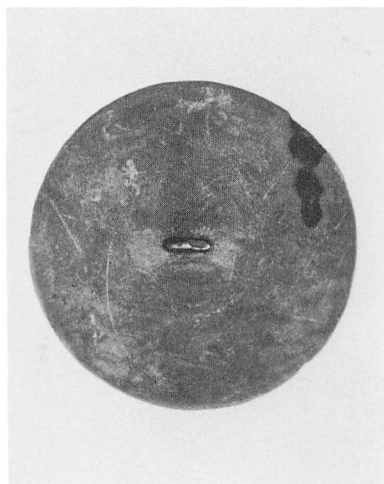
S B 1211・S E 3260 (東から)



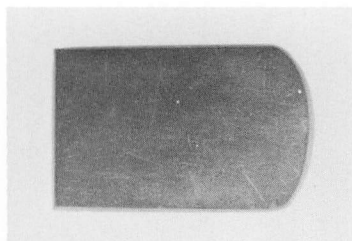
S E 3260 (西から)



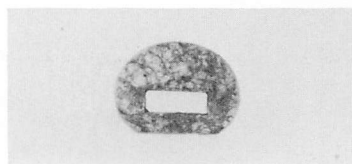
第52次 木製井戸枠



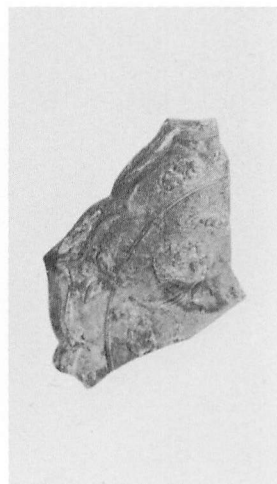
第52次 小形銅製儀鏡 (1 : 1)



第52次 石製蛇尾 (1 : 2)



第51次 石製丸柄 (1 : 2)



第50次 瑞花八棱鏡 (1 : 2)



第48-1次（6ACM-M）調査（東から）



第48-2次（6ACM-M）調査（北から）



第48-3次(6ABL-M)調査 (西から)



第48-4次(6AGL-B)調査 (西から)



第48-5次(6AGD)調査 (西から)



第48-14次(6AET)調査 (東から)



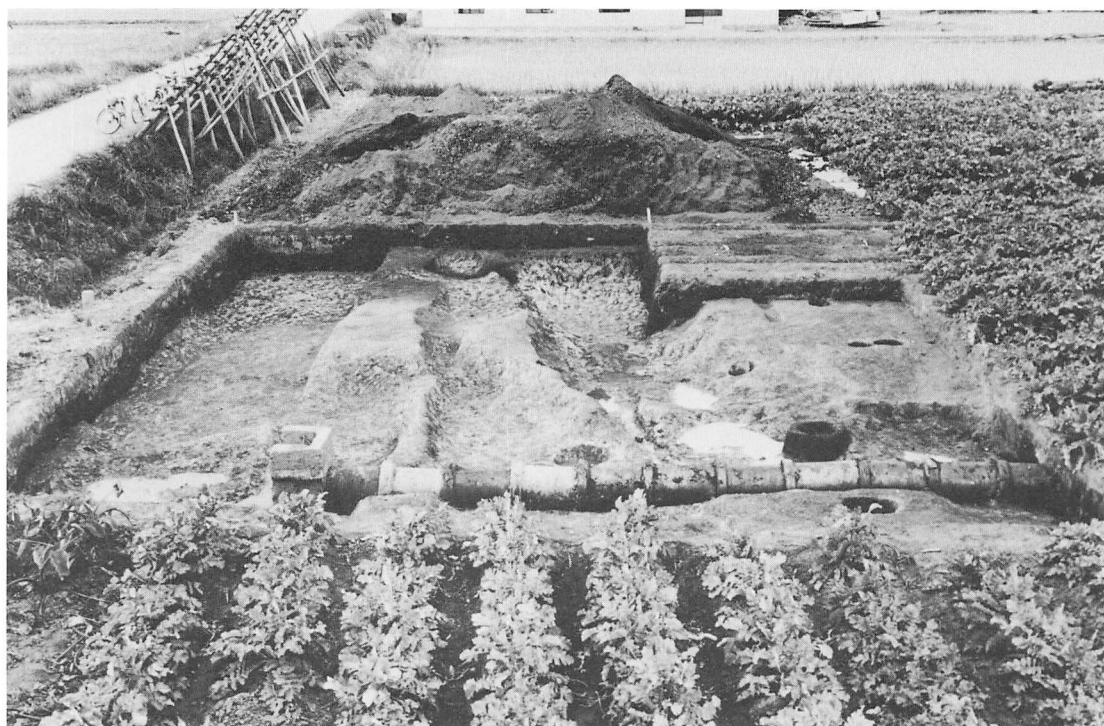
第48-6次(6AGC-A)調査 (西から)



第48-7次(6ADT-H)調査 (東から)



第48-8次(6ACL)調査 (南から)



第48-9次(6AEV-J)調査 (東から)



第48-11次(6AGP-E)調査 (南から)



第48-12次 (6AFC-H) 調査 (北から)



第48-13次 (6ACM-O) 調査 (西から)

三重県齋宮跡調査事務所年報1983

史 跡 齋 宮 跡

——発掘調査概報——

昭和59年3月31日

編集発行 三重県齋宮跡調査事務所

印刷 光 出 版 印 刷
